
異端児の退屈な日々

果樹園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異端児の退屈な日々

【Nコード】

N2097P

【作者名】

果樹園

【あらすじ】

特殊な条件下で育った高校二年生の神田真治と、絵に描いたような万能君の高坂和也が異世界に召還されて勇者のお仕事をするとする王道ファンタジー。勇者の仕事は和也に任せて、真治はただならぬ異世界での生活を満喫する。（主人公は真治）主人公最強ものです。

第零章 平和で退屈な日々

第零章 平和で退屈な日々

現在時刻A M八時四十分、今日は俺の通う高校の始業式だ。そんでもって俺は通学路を全速力で走っている。さてなんででしょう？

答えは簡単、始業式は八時半からだからです。・・・はい、こんなところで自虐してる暇なんてないね。というわけで走る！ わずかな可能性に賭けて！と、数歩走ってある事に気付き足を止める。

「今八時四十分なんだから・・・間に合うのって不可能じゃね？」

ああ、なんでこんな事に気付かなかったんだ。

「じゃあ、ゆっくり行こうか」

ふむ、人生あきらめも肝心じゃ。

それから十分ほど歩いて自分の通う高校に着いた。

「さて、ここでどう動くか」

素直に始業式の行われている体育館に行くか、それとも屋上でふて寝するか。

考える事三秒、まあ考えるまでもなかったな。

結論を出すと俺は体育館とは逆の方向に歩き出していた。

「さて、そろそろ終わるだろう」

体育館の入り口を見つめると始業式から解放された生徒たち出てくるところだった。

「俺も教室に行くか」

目指すは当然のごとく俺の所属する二の二の教室。

「さあて、　また退屈な日々を過ごすのでしょうかね」

五分もしないうちに二の二の教室に着いた。
ついでに声も掛けられた。

「よお、　真治。　お前始業式どうした？」

「さぼった」

説明しておくといつは俺の数少ない・・・いや、　たった一人の親友だ。

成績優秀、　スポーツ万能、　容姿端麗、　おまけに性格までいいときた。

「姓を高坂、　名を和也という」

「おい、　なに説明口調になってんだ？」

うるさい！　イケメンなんて滅べばいい！

「まあそんなことはいいとして、　明日遊びに行かね？」

「なんで？」

「いやほらさ、　学校始まってウガーな気分をフーって気分に変えたいじゃん」

言ってることがよくわからないが、　要するに遊びたいってことだろう。

ちなみに今日は金曜、　よって明日は必然的に土曜となる。

「まいつか、　でも午後からで頼む」

「何か予定ある感じ？」

「そんな感じ、　でも午前中で終わるので問題なし」

「じゃあ明日の午後一時、　駅前集合で」

「OK」

じゃ、　そう言い残して和也は教室を出て行く。

「俺も帰るか」

殺し屋ダディとマッドサイエンティストがいる我が家へ。

第零章

平和で退屈な日々（後書き）

つたない文章ではありますが、どうぞよろしくお願いします。

第一章 両親のこと

玄関に入るとナイフが飛んできたできた。

しかし動ずることなく紙一重で避ける。

続けて二本目、三本目と投擲される。

今度は余裕があつたので二本目のナイフは避けて、三本目のナイフのグリップを掴む。

そしてそれを飛んできた方向へと投げ返す。

「なにすんだよ、当たったら死ぬじゃんか」

「いや、これぐらいのことを対処できないほどヤワな育て方をした覚えはないな」

にゅつと玄関先のリビングから親父が出てくる。

「はいはいそうだったな、で？ 母さんは？」

親父は床を指さした。

「ああ、わかった。あんがとな」

そう言つて振り返ると後ろから三本のナイフが飛んできた。

それらを難なく避けきる。

「さすが」

「俺は殺人者の息子だからな」

親父はニタリと笑うとリビングに戻って行つた。

「俺も行くか」

ここから母さんに会うためのステップを説明しよう。

まずは台所に行きます。そこにはどこにでもある床下収納的な扉があります。

開けます。入ります。はい終わり。

「母さん、いるのー？」

「いるわよ」

様々な機械がひしめき合う中、声のした方向へと歩き出す。

「ここよ」

目の前のパソコンの中で様々な文字式が次々と映し出されている。
「で、今回はなに作ってんの？」

「ん？ お父さんの仕事に役立ちそうなものをね」

お父さんの仕事、というと殺しの道具、ということだろう。

「具体的に言うത്？」

「撃ち漏らしをしないスナパーライフルが欲しいって言ってたから、
電磁加速砲の改良したものを渡したかったんだけど」

「まさか・・・作れなかったの？」

母さんはマッドサイエンティストだ。しかし頭の良さはそこら
辺の科学者よりもずば抜けているし、材料だって欲しいと思えば
なんだって手に入るだろう。

「一応作ることではできたんだけど・・・威力はその辺のライフルと
同じくらいだし、なにより発射できる数が少なすぎて。まあ射
程距離は長いはずだけど」

ああそっか。電磁加速砲は発射するのに大量の電力を必要とす
る。

そのため持ち歩ける電磁加速砲を作ると電力は限定されて、威
力も弱くなってしまうということだろう。持ち歩ける電磁加速砲
を作るだけでもすごいと思うけど。

「まあがんばって。俺も少し調べておくから」

小さい頃から科学を教え込まれてきたのでその辺の学者よりは頭
がいいはずだ。

「お願いね、あと夜ご飯もお願い」

「わかった、できたら呼ぶね」

そう言い残して部屋から出る。

「今日はハンバーグにするか」

そんなことを考えながら冷蔵庫の扉を開ける。

この家で料理を作るのは俺しかない。

よって俺が飯を作るのは必然。

母さんが作った時はすごかった。

俺と親父が『新しい化学兵器だ』とガタガタブルブルした思い出がある。

あの惨劇を繰り返さないために俺はここに立っている。

まあ、そんなことはどうでもいいか。 ついでに料理の課程も省きます。

というわけで準備完了。

「みんな、ご飯ですよ」

すでに二人ともリビングのテーブルで待っている。

「はい、どうぞ」

テーブルに食事が行き渡る。

「それじゃあ、いただきますよ」

「いただきます」

俺と母さんは、フォークとナイフを使っているが、親父は箸を使っただけで食べている。

食事を始めて少ししてから親父の箸が止まる。

「お前、今日誕生日だったろう」

「ああ」

なんと！俺と母さんが忘れていて親父だけが覚えていたなんて。

「そんでもって、誕生日プレゼントというものを用意した」

これまたなんと！誕生日プレゼントなんてものまで用意しておくなんて。

幻覚か？ 幻覚なのか！

「それよりお前、アレは持ってんだろうな？」

「・・・ああ、持ってるよ」

腰から刃渡り十五センチくらいのサバイバルナイフを取り出す。

これは、十三歳の誕生日の時にくれたものだ。 言いつけで常備持ち歩いている

・・・前の誕生日にナイフをくれたってことは。

「ほら、受け取れ」

渡されたものは・・・。

「拳銃かよ・・・」

「ああ、米軍正式採用のベレッタM92Fだ」

「見りゃわかる。親父に教え込まれたからな」

父親のしている仕事がアレなので、とくに驚かない。

「米軍に戦友がいてな、そいつに都合つけてもらった」

ナイフの次は拳銃ね。次はアサルトライフルじゃね？

「それからこれも」

渡されたのは、銃を入れておくショルダーケースだった。

「そいつも持ち歩いておけよ、いつ襲われるかわからないしな」

「はいはい」

ここで蚊帳の外だった母さんが話に入ってきた。

「お父さん、この前言ってたライフル・・・もうすこし時間が掛かりそうなんだけど」

「いや、そんなに急がなくてもいいぞ。しばらく依頼もないだろうし」

その言葉を聞いた瞬間、母さんの表情が輝きだした。

「助かるわ」

「それより学校はどうなんだ？」

「あゝまあまあかな」

「お前も時期に俺の稼業に就くんだから学校なんて行ったって仕方ないだろう？」

「まあまあ、いいじゃないですか」

親父の言う稼業とは殺し、つまり殺し屋の稼業を継げと言っているのだ。

まあ、親父からは、殺しのテクニク、あらゆる武術を学んだし、母さんからは、科学のすべてを教え込まれてきた。

これだけ無駄なところでハイスペックな高校生はどこにもいないだろう。

「わかったわかった、考えておくよ」

食器を台所に持って行く。

「じゃ、俺もう寝るから」

「はい、おやすみ」

「明日は六時起きだぞ!」

前者が母で、後者が父だと言つことは言つまでもあるまい。

ところ変わってマイルーム。

唯一くつろげる空間だ。

ここで先程もらったプレゼントを取り出す。

「拳銃ね、こんなん見つかったら俺捕まるぞ」

呟きながらシオルダーケースを付ける。

「ありよ?」

シオルダーケースに拳銃をしまおうとしているのだがうまく入らない。

「どうなってるの?」

シオルダーケースの中を覗くと問題は解決された。

「げっ、予備マガジンも入ってんじゃん」

シオルダーケースの中には予備マガジンが三本入っていた。

「用意周到すぎだろ・・・」

ここで時計を見る。

十時半、明日は六時起きって言ってたし、もう寝るか。

電気を消して布団に潜り込む。

さて、明日は平和な日常を満喫しますか。

そんなことを考えながら俺は眠りについた。

第一章 両親のこと（後書き）

電磁加速砲の知識は全然ありません。でもこの後出てきます。
よろしく願います。

第二章　　我が家のこと

現在時刻、　A M五時五十九分。
まだ眠っていたという欲求に駆られるが、　まだ命は惜しいので自粛。

昔からの肉体的教育で決まった時刻に起きられるようになった。
「やっぱり出なきゃいけないか」

部屋の扉を見つめる。　扉の向こうから殺気がただ漏れに
いるのがわかる。

うん、　行かなきゃここで確実に死ぬね。

「それじゃあ、　カウント始めるか」

5 , 4 , 3 , 2 , 1 , 0 !

勢いよく扉を開け放つ。

早速左側からナイフが飛んできた。

「ふっ！」

腰を低くかがめて、　回避の行動をとる。

「まず、　一本！」

無駄な動きはとらず最小限の動きで回避。

「次は・・・三本かよ！」

またまた左側からナイフが飛んでくる。

しかも時間差で三本！

「こりやまずいな」

一本目のナイフを避けながら、　右手で昔から持ち歩いているナイフを取り出す。

「しっ！」

二本目のナイフを右手のナイフで弾く。

そして空いた左手で三本目のナイフを掴む。

「ほら、　お返しだ！」

左手に握られたナイフと飛んできた方向へと投げ返す。

ここまでの行動わずか五秒。

「今度はこっちから行くぞ！」

階段を駆け下りて一階へと向かう。

途中でナイフが何本か飛んできたが、難なく弾く。

「ここか！」

リビングの扉を開け放つ。

当然奇襲を予想していたのだが、なにも飛んでこなかった。

「あら？ 間違えたかな？」

リビングからは殺気が一切感じられない。

「おかしい、ここだと思ったのに」

呟きながらリビングのほぼ真ん中に来ると変化は起こった。

「きたっ！」

急に殺気を感じ回避行動をとる。

しかし今回の攻撃は今までとは規模が異なるものだった。

「八本！？」

まさに四方八方からナイフが飛んできた。

「これは・・・さすがに無理だろ！」

一本、二本、三本と弾き返す。

「4、5、6、7・・・8！」

投擲された八本のナイフをすべて防ぎきる。

これは新記録でしょ！？

「安心するな、首、もう飛んでるぞ？」

後ろから声を掛けられた瞬間、背筋が凍る。

「ありや、また俺の負け？」

「当たり前だ」

おそろおそろ振り向くとそこには、俺の首筋にナイフを突き立てた親父が立っていた。

「これで、3543勝無敗だな」

「よくそんなこと覚えてんな」

親父はナイフをしまうと、ついてこいというサインを出してき

た。

まあおかた何かの体術の訓練でもすんだろ。
そんなことを考えながら歩いていると、母さんの研究室までき
た。

「おはよう、 真治。それからあなた」

「おはよう母さん」

「ああ、 おはよう」

親父はそのまま部屋の奥へと進む。

「あれ？ 母さんに会いに来たんじゃないの？」

母さん以外にこの部屋には用はないはずだが。

まさかここで訓

練？・・・ないない。

「こつちだ」

親父が床を指さす。

「ここって・・・まさか新しい地下室？」

「そうだ」

「まじかよ」

十六年生きてて初めて知ったよ。

「さっさと入れ」

「はいはい」

素直に従い地下二階へと下りる。

「なんじゃこりゃ？」

まず目に入ってきたのがどでかいスペース、 それから奥の方に
人型的。

考える事わずか0.5秒。

「ああ、 射撃場か」

まったくもって規格外だね、 家も、 親も、 そして驚かない
俺も。

第二章 我家のこと（後書き）

異世界に行くのは、もうちょっと後になります。
長くなるかもしれないので、よろしくお願いします。

第三章 とある朝の訓練

「ほら！ さつさと目標を打ち抜け！」

射撃場に入ってからすでに三時間は経過していた。

「いや、無理だつて！ どんな無理なレベルを要求してんだよ！」

「こんなレベル」

親父は俺の使っていた拳銃を取り上げると、ボタンを押せと指示してきた。

ボタンというのは、的を出すためのスイッチだ。

親父は俺に二秒でやれって言つてし、一秒に設定しちゃお。

これまた説明だが、的は一定時間経つと自動的に倒れる仕組みになっている。

タイマーの設定で倒れるまでの時間を調節できる。

さあ親父、恥かいてもらうぜ！ 設定一秒！

「とつとと押せ！」

「わかったよ」

ふふ、甘いぜ。俺のコンボはまだ終わってはいない！ とく
と見よ！

「それじゃいくぜ、 5 , 4 , 3 , はいドーン！」

どうだ！ これは打てないだろう！

さて、これから赤面タイムを迎えてもらいましょうか。

「親父、残念だったな」

「何がだ？」

「いや、的だよ。親父でもやっぱり外すんだなってね」

「・・・外してないぞ」

「またまた何言つてんだ・・・よ」

結論を言つと人型の急所という急所はすべて打ち抜かれていた。

「ここまでやるのはまだ無理だろうから、せめて頭と足の関節ぐ

らいは打ち抜けるようにしておけ。 ついでに俺は十一歳の時にできたぞ」

「つつ！ わかったよ！ 見てろよ！」

親父から拳銃を奪い取る。

「ふっ、 一時間後にまたくる」

そう言い残して親父は射撃場から出て行った。

「あんまし俺をなめんなよ」

これから愛銃になるであろうM92Fにマガジンを装填する。

「確かに、 悠長に狙いを定めている時間なんてなさそうだしな」
的をオートプログラムに設定して、 銃を構える。

ビーという音と共に、 人型の的が出てくる。

バンッ、 バンッという乾いた音が鳴り響く。

「さて、 結果は・・・げっ、 中心から離れてんじゃない」

頭と足の関節三力所を狙ったのだが、 狙いがまいち安定しない。
い。

「やっぱり親父、 撃つの早いな」

こっちは三力所でいっぱいいいのに、 何力所も性格に打ち抜くなんて人間業じゃないな。

「すばやく、 たくさんの弾を撃つには・・・ あっそうだ
！」

アレがあつたじゃんか！ 問題は準備だが・・・。

「ここは曲がりなりにも射撃場なんだからあるだろう」
射撃場の隅にあつたタンスらしきものを漁り出す。

「頼むぜ！ あつてくれよ・・・ あつた！」

ふふ、 これがあれば親父にも負ける気がしないぜ！

「さっそく訓練始めるか」

親父が来るまであと・・・ 三十分くらいか。

「それだけありや十分だ！」

さっそく新しい訓練を始めた。

「それで、 できるようになったんだろうな？」

現在時刻十一時ジャスト。 あれから一時間が経過しております。

「ああ、 なんでもかかってこいだ」

ほう、 と親父がにたりと笑う。

「さっそくやってもらおうか」

「いつでもどうぞ」

さあ、 いくぜ。 親父に一泡吹かせてやる！

ビーという音と共に的が出てくる。

それを、・・・二丁の拳銃で撃ち抜く！

右手のM92Fで右足の関節と、 右の腕の関節を。

左手のM1911で左足の関節と、 左の腕の関節を。

最後に二丁使って頭を打ち抜く。

頭を打ち終わると同時に、 プログラムが終了する。

「どうだ！ これで文句ねえだろ！」

「ほう、 確かにこれは驚いた。 まさか二丁拳銃とはな」

二丁拳銃にすると手数は増えるが、 標準がうまく定まりにくくなる。

それを修正するのに三十分も掛かっちゃったってわけさ。

「すごいっしょ」

「さすが殺人者の息子だな」

「それって褒めてるよな？」

「さあな、 それよりもそのM1911もお前にやる」

「サンキュー」

シオルダーケースはタンスらしきものの中にあっただけで持ち運びに支障なし。

それからおもしろい物のあったのでついでもらっておいた。

「んじゃ、 俺この後遊びに行くから」

たしか集合は一時だったはず。

「わかった、 でもその前に・・・昼飯作っていつてくれ」

「おーけ」

どうやら親父もまだ命は惜しいようだ。

第三章 とある朝の訓練（後書き）

あと二回くらいで異世界いけそうです。
感想などよろしく願います。

第四章 休日の過ごし方

現在時刻、PM一時。

俺は和也と待ち合わせをしている駅につつ立っていた。

もちろん拳銃とナイフは携帯中。

「来ないな」

他にもちらちらと待ち合わせをしているであろう人たちが目に入る。

「この孤独感は何だろうね」

一人待ち合わせ場所に待たされる孤独感、耐え難いのう。

そんな考えを巡らせていると、当の本人がやってきた。

女二人連れで。

「悪いな、待たせちまったか？」

「・・・おい和也、ちよっとこっち来い」

訝しそうな表情をするが、素直に従ってくれた。

「なんなんだよ、あいつらは」

「おう、そのことなんだがな、あの二人が、『今度一緒に遊びに行きませんか？』って言うてきたのでOKしたわけよ」

ここで少々の沈黙、そして開口。

「なぜ俺を巻き込む？」

「一人じゃ寂しかったから！」

「じゃあな、俺帰って寝るから」

その言葉を聞いた瞬間、和也がガシッ！と腕を掴んできた。

「俺を一人にしないでくれ」

「いいじゃねえか、どうせあの二人もお前目当てなんだろ」

その中で遊ぶというのは、寿命を縮めることに等しい。

「・・・・・・・・」

和也が急に黙りだした。何か考え事をしているようにも見える。少々の沈黙の後、和也は口を開いた。

「それがよ、 右側の女の子、 お前に気があるんだってよ」

「で、 まずどこに行くんだ？」

これは行かないわけには行くまい！

日々訓練漬けの毎日のせいで俺の青春は枯渇している！

エネルギー補充には持ってこいだろう。

「その話はあつちでしようぜ」

「おう！」

未来の想像をしながら意気揚々と歩き出す。

「………悪い」

「ん？ 何か言ったか？」

何かぼそつと呟いたような気がしたが。

「い、 いや別に」

普段なら聞き漏らさないんだけど、 なんせ俺は今非常にテンパ
つてるぜ！

「それじゃあ行こうか」

進行役はもちろん和也。

こうして俺たちは町へとくりだした。

第四章

休日の過ごし方（後書き）

うーん、なかなか異世界に行けない。
主人公の性格が変わっているような？

第五章 退屈とのお別れ

とりあえず現状確認。

町にくりだしてからおよそ三十分経過。

現在、六人ぐらいの不良（見た目から判断）と仲良くにらめっこをしていた。

ちなみにこちらの陣形は前から、和也、俺、女の子二人、である。

「おい、兄ちゃんよ、女の子こっちにもわけてくんねえか？」

で、でた！ 不良専用の理不尽請求。
もちろんそんな要求を？ むはずもなく。

「そんな要求聞けるはずがないだろ」と和也。

「そうだそうだ！」と俺。

「なら力尽くで奪うしかねえな」

こりや喧嘩になるね、絶対。

和也もそんな空気を感じとったのか、女の子に指示を出した。

「二人とも、最初の集合場所で待ってて」

最初の集合場所というと駅のことだろう。

そんなことこいつらが知ってるわけないしな。

「わかった………怪我しないでね、和也君！ と金魚のフン」

「絶対帰ってきてね！ 和也君！ とその他」

……は？ なにこの扱い？ 少なくとも二人目の女の子俺に気があるんじゃないの？

その言葉を聞いていた和也が、バツが悪そうに言った。

「悪い真治、あれウソだ」

ウソ？ あれってなに？ 俺に気があるってウソなの？

「……悪い、俺こっちにつくわ」

そう言い残して不良側につく。

くそ！ 俺の恋心を利用しやがって！ ぶっ飛ばしてやる！

「さあいけ！ 不良ども！ あの憎きイケメンを抹殺してしまえ！」
「お前も抹殺だよ！」

不良のリーダー的な存在の奴に思い切り殴られる。 油断したぜ。

「真治！」

うん、全然痛くなかったんだけどね。 ここは痛いふりをしとかなきゃいろいろ面倒だろう。

「ぐは！ 顎の骨が折れちまった！」

「くそ、ここは一時撤退だ！」

俺と真治は不良を巻くために走り出す。

「とりあえず裏路地をぐるぐる回ろう！」

「イエッサー」

俺の恋心を弄んだことは置いて、 とりあえずこの不良たちを巻くとしますか。

「お前、あいつら実力でどうにかできないの？」

俺は走りながら不良を指さす。

「いや、さすがにあの人数はきつい」

まあ、普通の人間なら、ね。

ついでに言っておくと、俺のスペックが化け物じみているのは親以外知らない。

普通の生活にはこんな力必要ないし、 第一に俺暴力嫌いだし。

「わかった、っておっとと」

どうやら行き止まりになってしまったようだ。

「へっへっへ、あの女の子達の居場所教えてもらうぜ」

不良は、鉄パイプやら、ナイフやらを手を持っている。

「くそ！ やるしかないのか！」

和也が戦闘態勢をとる。

ふむ、なかなかいい構えだ。 さすがスポーツ万能の異名は伊達じゃないな。

とりあえずいざという時は、 ちょちよいとやってやろう。

「がんばれ和也！ 俺は応援しているぞ！」

「お前もやれよ！」

「ごちゃごちゃ言ってるじゃねえ！ お前らやっちなえ！」

さて、どこまでがんばるかな？ と思っていたら、突然変化が起きた。

俺と和也が立っている場所に、字が書き詰められた魔方陣のような物が現れた。

「！」

その場にいる誰もが固まった。 無論俺も例外ではない。

「なんだこ」

なんだこれと、言い終える前に、俺の視界は黒く染まった。

第五章 退屈とお別れ（後書き）

やっと異世界に行けます！ 長くなってすみません。
感想、批評などよろしく願います。

第六章 召還されて

「?????サイド」

部屋が光で包まれた。

眩しすぎて目を開けることができない。

「姫様！ 大丈夫ですか！」

どこからか私を呼ぶ声が聞こえる。

おそらく、部下の兵士の声だろう。

「大丈夫です！ それより召還魔術の方はどうなりましたか！」

視力も回復してきたので慌てて魔法陣の方へと目をやる。

そこには、一人の少年が横たわっていた。

「どこだここ？」

第一声はこれだった。

「たく、ドッキリにしては気合い入ってんな」

あたりを見回す。

どうやら森の中のような。

「え」と、確か・・・不良に絡まれて、裏路地に逃げて、それから・・・」

ここで、腰に手を当てる。

そこには、いつものようにナイフが携帯されていた。

「ナイフに、あと拳銃も」

脇に手を当てると愛銃のM92FとM1911がホルスターに納められていた。

「バックは・・・」

うん、こっちも問題なし。

「ちゅうことは、これは夢ではないだろう」

とりあえず、 お家に帰りますか。

「でも帰り方がわかんねえ」

まあとりあえず歩いてればどうにかなるだろう。

そう思っただけ振り返った瞬間、 ここは俺の住んでいた世界ではな

い、 と確信した。

「なんだこいつは？」

（和也サイド）

なんで俺こんなところで横になってるの？

それからなんでこの人達は俺のこと見てんの？

とりあえず現状把握しておこう。

「あの〜ここどこですか？」

瞬間、 ここにいる人たちがビクツと飛び跳ねた。

「申し遅れました、 私この国の第一王女のARIA・カスタロットです。 以後お見知りおきを」

知らない国の名前、 王女様、 鎧を着た人たち、 このヒントから得られる答えは。

「もしかして俺・・・召還されちゃいました？」

一瞬驚いたような顔をした後、 にこりと微笑んで言い放った。

「はい、 ものわかりがよくて助かります」

やっぱりか・・・。

「それで、 俺に何をやらせたいんですか？」

大体予想はできてるけどな。 一応聞いて置こう。

「あなた様にはこの国の勇者をやっていただきたいのです」
ほらきたよ。

「まあそれはおいおい考えるとして・・・ここにもう一人誰かいませんでしたか？」

あの時の魔法陣によって召還されたのなら、 あの上に乗っていた真治も召還されるはずだろう。

「いえ、あなた様一人でしたが、どうかなさいましたか？」

「いやそれが、俺が召還されたときに仲間も一緒にいたような気がしたのですが」

もしかしたら真治は召還されなかったのかもしれない。

しかしそんな期待を裏切るように、一人の兵士がこの部屋に入ってきた。

「報告します！ 南部にある死の森の中心部分から巨大な光が発生しました！」

「本当ですか！？」

姫様が妙に慌てている。

「どうかしたんですか？」

「それが・・・あなた様がここに来たときも、巨大な光が発生したのです」

「それじゃあ！ その森の中心部に真治が召還されたかもしれないんですね！」

「おそろくそうですが・・・」

「では早く、助けに行きましょう！」

しかし兵士達はこちらを見ようとしない。

「助けに行きたいのは山々なのですが、その森は死の森と呼ばれ、凶悪な魔物がたくさん住み着いているのです」

「それじゃあ助けに行かないんですか！」

「おそろく召還されていたとしても、すでに命は・・・」

くそ！ こんなことであるか！ なんて真治がそんな目に遭わなきゃ行けないんだ！

「落ち着いてください、これから今後のことを話し合いましょう」
「・・・わかりました」

今はそうするしかできなかった。

第六章 召還されて（後書き）

展開が早いかもしれませんが・・・。
次は真治の戦闘シーンです！
感想などよろしくお願いします。

第七章 初めての实战

「なんだこいつは？」

今日の前に、犬を大きくしたような生き物がいる。

そこまではいい、そこまではいいんだ！

ただ、その四足歩行生物には、頭が二つあった。

「なに？ オルトロスですってか？」

「グルルルル」

明らかに相手は『今日の飯はこいつだぜ』って感じで唸っている。

「どうしたもんか？」

頭が二つある犬を、生け捕りにしたまま母さんにプレゼントしたら、喜ぶだろうな、なんて考えているうちに、オルトロスが飛びかかってきた。

「おっと、やっぱりすばしっこいな」

前足をつかって横風に爪で斬りかかってくる。

「こりや・・・やるしかないよな」

先に襲いかかってきたのはそっちの方だ、正当防衛と行かしてもらおうではないか。

腰に常時携帯しているナイフを取り出す。

「さって、かかってくるワン公」

そんな挑発を理解しているはずもないが、怒ったのか今度は真っ直ぐ飛びかかってきた。

「そんな単調な動きじゃ・・・死ぬぜ！」

突進を容易く避けて、隙のできた脇腹にナイフを深く差し込む。

「！%&，%！」

刺した瞬間、とてつもなく大きな鳴き声をあげた。

「うるさいな、って俺のナイフ！」

オルトロスは刺されてもまだ生きているようで、バックステップをとった。

「ま、 どうせ瀕死なんだから、 なんもできないだろ」

ほれほれ、 かかってこいや、 先に喧嘩売ってきたのはそっちだろ。 なんて悪態をついた。

しかしここで、 意思の疎通などできているわけがないのに、 明らかにオルトロスは怒ったような鳴き声をあげた。

「なんだ？ 威勢がいいだけじゃ、 生き残れないぜ。 って危ない！」

間一髪で相手の攻撃を避けることができた。

相手はバックステップを取ってたから、 すぐに攻撃はできなかったって？

そうですね、 しかし彼は、 炎をはいてきたのです、 はい。

「そりゃないだろ！ どんだけファンタジーなんだよ！」

と叫びつつも、 回避行動をやめないところは、 親父の訓練のおかげだろう。

「さて、 ナイフはあいつに刺さったまんまだし、 炎をはくから迂闊に近寄れないし・・・どうするか」

そんな考えをしているうちにも、 炎による第二撃を放とうとしている。

「やつぱ・・・これしかないよな」

自分の脇を触る。 あ、 変な意味じゃないよ。

「ただ、 拳銃を取っただけですよ！」

ショルダーケースから拳銃を二丁取り出す。

そして二丁使って相手の頭に一発ずつ打ち込む。

今度は鳴き声をあげずに・・・死んだ。

「生き物なら、 頭に食らったらさすがに死ぬだろ」

どうやら、 魔物も例外ではなかったようだ。

「恨むなら俺ではなく・・・人間の先端技術を恨むんだな！」

そう言い残してこの場を去った。

第七章 初めての实战（後書き）

すみません、 戦闘は初めて書くのでうまくないかもしれませんが・
・・。

感想などよろしくお願いします。

第八章 最悪な出会い

歩き始めてから僅か五分ほどで変化があった。

「あちゃー、 大変なことになってんな」

そういうのも、 目の前で馬車？ が横倒しにされているからである。

その傍らには、 二人の男性と、 さっき殺したオルトロスが五匹ほど。

明らかに男性達は苦戦しているようだ。

「ここに来てから初めて会う人、 絶対生かさなくては！」

そう思い立ち、 駆け寄って援護をしようと思ったが、

「おい！ 逃げるぞ！ この数相手じゃ食い殺されちまう！」

「でも、 商品はどうすんだよ！」

「高く売れるだろうが・・・命には代えられねえ！」

そんな会話をすると、 男達は一目散に逃げていった。

オルトロスは男達を追おうとしたが、 近くにいる人間、 つま

り俺に標的を変えたようだ。

瞬く間に五匹のオルトロスに囲まれる。

「あ、 あの人達行っちゃったよ・・・どうしてくれんだ犬ッコロどもが！」

そんな叫びを無視してオルトロス共が鳴き声をあげる。

「うるさい」

拳銃の引き金を、 躊躇なく引く。

パン、 パンと乾いた銃声が鳴り響く。

気付けば数は残り一匹になっていた。

「さあて、 往生せいや」

二つの銃口を最後の一匹に向ける。

すると、 これが危険な物だとわかったのか、 オルトロスは一目散に逃げていった。

「まいつか、 去る者は追わず、 ってね」

まあ、 あんなワン公どうだっていい。

今気付いたが俺は大変腹が減っているのだ。

すぐ近くで死んでいるこいつらを食べるのはちょっと……。

「馬車に何か積んであるんじゃないね？」

あの男達が去り際に、 高く売れるかどうかのこの言っただから、
うまい食べ物でも入っているのだろう。

「捨てるなら食っちゃってもいいですか？」

空を仰いで聞こえるはずのない質問をした。

「………ありがとう！ 感謝するぜ！」

自分の都合のいいように答えを肯定する。

そうと決まれば！ 急ぎ足で馬車に歩み寄る。

そんでもって馬車の前に到達。

うまい食い物が俺を呼んでるはず！

そして馬車の中をのぞき込みながら言い放った。

「それじゃあ、 いただきます！」

しかし俺はここで人生の教訓を学ぶこととなる。

よく考えてから行動するという教訓を。

なぜなら馬車の中には食べ物ではなく、 青い髪の毛をした美少

女がうずくまっていたからだ。

さて、 美少女に対して、 いきなりいただきますって発言はどうよ？

一発で不審者確定だろ？ おっさん悲しくなっちゃうよ？

こうなったのも全部あの男達のせいだ！ 高い商品って、 どんなもん運んでんだ！

こうなっては仕方がない、 ここから好印象を持たせるのは難しいが、 多少でも印象をUPさせておこう。

とりあえず……自己紹介からだだな？ うんきつとそうだし！
ということ即実行！

「あゝ俺は通りすがりの一般人の真治、 君は？」

少女は少し考えた後、不審に思いながらも返事をしてくれた。
「わ、私の名前はローラです」
さて、この後どうしましょうか？

くローラサイドく

急に馬車が動きを止めた。
町に着いたのだろうか？
もしそうなのだとしたら私はその町で、奴隷として扱われるの
だろう。

ただ働かせるだけならいいけど、悪いご主人様に買われたら、
私は女だから夜の相手をさせられてしまうかもしれない。
「いやだな」

最初は、本当に好きになった人とがよかったな。
でも奴隷として売られてしまったては、そんな願い叶うわけない。
そんな暗い想像をしていると外から怒鳴り声が聞こえてきた。

「くそ！ オルトロスの群れかよ！」
「やっぱり死の森を抜けようとしたのがまずかったんだ！」
「オルトロスの群れ？ 死の森？ 今私は死の森にいるの？」
私は震え上がった。

死の森と言えば、入れば必ず生きては帰れないといわれている
場所のはず。

そして現にいま、オルトロスの群れに囲まれている。
「まだ、生きたかったな・・・」
そしていきなり馬車が倒れる。

「きゃ！」
オルトロスが突進してきたのだろう。
「もう・・・いやだよ」

泣いてしまった、自分の最後を確信して。

「きれいな服も着たかったでしょ、もつとおいしい物食べたかったでしょ、それから・・・結婚もしたかったでしょ、赤ちゃんだって産みたかったし、それから」

自分の未練を口に出していると、外から男達の会話が聞こえてきた。

「おい！ 逃げるぞ！ この数相手じゃ食い殺されちまう！」

「でも、商品はどうすんだよ！」

「高く売れるだろうが・・・命には代えられねえ！」

どうやら男達は逃げてしまったようだ。

「このまま・・・食べられちゃうんだよね」

すると外からあの男達ではない叫び声が聞こえた。

「どうしてくれんだ犬ッコロどもが！」

威圧感のある声だった。

それに続けてオルトロス達が鳴き声をあげる。

が、そのすぐ後に、聞いたことのない乾いたような鳴き声？がした。

その鳴き声は、パン、パンと五回くらい繰り返されてから、やがてしなくなった。

そして静寂が訪れた。

周りには誰もいないのだろうか？

でも自由になってもここは死の森の中、生きて町までは帰れないだろう。

「どうしようかな？」

しかしそんな考えをしている暇はなかった。

「足音がする」

あの二人組が帰ってきたのだろうか？

もしそうならここでは死なないかもしれないが、奴隷として売られてしまうだろう。

そしてその足音は、馬車の前で止まった。

そして予想外な人物が、衝撃的な発言と共に現れた。

「それじゃあ、いただきます！」

え？ いただきます？ 私食べられちゃうの？

私も慌てていただろうが、相手の男の子はもっと慌てていた。やがて少々の沈黙。何か考えているみたい。すると少年は口を開いて言い放った。

「あゝ俺は通りすがりの一般人の真治、君は？」

自己紹介された、案外いい人なのかもしれない。

ここは大人しく、自己紹介しておこう。

「わ、私の名前はローラです」

そして考えた、この後どうなるんだろうって。

第八章 最悪な出会い（後書き）

やっとヒロインに会えました。

「ホニャララサイド」と書かれていない文が主人公視点です。
魔法はもうしばらく掛かると思います。

それでは感想などよろしく願います。

第九章 森の中で

どうしよう？

今日の前には、両手両足を拘束された女の子がいる。

さて、どう動いたものか？

その一 拘束を解いて、少しお話をする。

その二 そのまま放っておく。

その三 襲う。

うん、即決でその一だね。

その三の選択肢が出てきたのは、あっちの世界での青春があまりにもひどかったせいだろう。封印封印。

「あゝ今手錠とか外すから、動かないでね」
腰からナイフを取り出す。

「え？ あえ？」

慌てふためく動作、くっ！ めちゃくちゃかわいいぞこの子！
「いくぞ・・・ふっ！」

ナイフで手錠の中心を一閃する。

いやゝ鉄も切れるって・・・化け物だな。

親父に怒ればいいのか、ありがとうと言うべきか決めかねていと、女の子が話しかけてきた。

「助けていただきありがとうございます」

うむ、素直にお礼の言える子はいいいことじゃ。

「あ、ちよっと待って、今足の拘束も解くから」

手錠の時と同じように、ナイフを走らせる。

「本当にすごいですね、そのナイフ」

まあ、普通の人間が鉄を切れるなんて思っていないよなそりゃ。

「雷属性の属性付加をしてるんですか？」

雷属性？ 属性付加？ なんのこっちゃ。

「いや、こう普通にズバツと」

するとローラはものすごく驚いたような顔をした。

「まっ、そんな話は置いて、とりあえず出ない？」

「そうですね・・・ってやっぱり無理です」

「どうかした？」

「それが・・・腰が抜けちゃって」

まあ無理もないだろう、ただの素人が死に直面すればねえ。

でも歩けないときたか・・・ここは、仕方ないよね？

馬車の入り口で背中を向ける。

「ほら、おんぶしてあげるから」

しかし女の子は、少し警戒心を強めたようだ。

あゝいただきます発言があつたからねえ。

ここは誤解を解くところから始めますか。

「あのさっきのいただきますって発言なんだけど、実は・・・

この森をさまよっていたら、魔物？に襲われている馬車を発見。

援護をすべく馬車に接近。しかし男達は高く売れるだこのこ

うの言いながら退散。残った俺は、そこで倒れている魔物と交

戦。そして殲滅。馬車の中にうまい食べ物でも入っているだろ

うと思つて、掛け声と共に中を覗いたら君がいたってわけ、O

Kですか？」

するとローラは顔を真っ赤にして謝ってくれた。

「そんなこととは知らず、失礼な態度を取ってしまい・・・本当に

にごめんなさい！」

「よきかなよきかな、誤解は解けたみたいだしな」

そんじゃほら、と言つておんぶをするために、背中を向ける。

ローラは顔をさらに真っ赤にしてのそのそと動き出した。

「さてと、ここから一番近い集落がどこにあるか知ってる？」

こんなところじゃ落ちて置いて話しもできまい。

「あ、よくは知りませんが、大体の方角はわかります」

「んじゃ道案内ヨロ」

そして俺とローラは動き出した。

「たぶんこっちの方向であって」

パン！ パン！

「ん？ ごめん、何て？」

「いえ、こっちの方向であ」

パン！ パン！

ローラを背負って歩き出してから十分ぐらい経ったが、いつこ
うに森から抜け出せない。

「こっちの方向でいいんだよね？」

ローラは無言でコクコクと頷く。

「それよりさつきから気になっているんですけど、それなんなん
ですか？」

そう言ってローラは拳銃を指さす。

「あゝこれね、何て説明したらいいか」

とりあえず、俺の故郷の武器だと言うことにしておいた。

「すごいですね、オルトロスなんて魔法師でも倒せるかどうかで
すよ」

あたりを見回しながらローラが言った。

周りには、正確に頭を打ち抜かれたオルトロスの死体が転がっ
ている。

「また来ました！」

「はいはい」

適当に返事を返して、標準を定める。

今は片手しか使えないので、拳銃は二丁。

パン！ と乾いた音が鳴り響く。

さつきからこれの繰り返し。

最初はローラもばたばた暴れていたが、だんだんと落ち着いて
きた。

「あのー真治さん、私もう歩けると思っているので、下ろしてもらってもいいですか？」

「ん？ どうぞどうぞ」

ここで『いや背負わせてくれ！』なんて言ったら印象ががた落ちすること間違いなしなので自重。

「ついでにここいらで少し、休憩でも取ろうか」

俺はともかく、ローラの方が持たないだろう。

「わかりました」

二人でその辺に倒れている木に座る。

「さてと」

バックから、9mmパラベラム弾と・45ACP弾をとりだす。親父曰く、『お前は世界的に有名な殺し屋の一人息子だから、命を狙われる可能性があるから、拳銃と弾薬は持っておけ』とのことだった。

感謝するぜ親父、これのおかげで生き残れるかも。

ちなみにバックの中身は、9mmパラベラム弾と・45ACP弾が五十発ずつ位と、マガジンが五本ずつにカスタマイズパーツが少々、それから携帯電話に、応急処置セットが入っている

ちなみにこのバックは母さんが『戦場でめちゃくちゃ使えるバック』というコンセプトを元に設計した。

よって弾丸などの小物は大量に入るようになってる。

「さて、さっさと済ませるか」

マガジンに弾薬を詰める。そして装填。

「よし、それじゃあそろそろ行くか・・・ってあれ？」

ローラがいなくなっていた。

さて、どうしたものか。

第九章 森の中で（後書き）

次回はローラ視点からスタートです。
まだまだ森から抜け出せそうにない・・・。
次回もよろしくお願いします。

第十章 些細な出来事

「ローラサイド」

「ふんふふん」

私は今、食べられそうな果物を探しています。

シンジさんがなにやら、けんじゅうとか言う物をいじりだしたので暇になってしまったのだ。

「たしかこれは食べられたはず」

真っ赤な果実を袋の中に入れる。（袋は馬車の中から徴収）

「えへへ、これでシンジさんも喜んでくれるよね」

袋の中には、たくさんの果物。

「そろそろ帰らないとシンジさんが・・・心配してくれるよね？」
奴隷として売られそうなところを助けてくれたシンジさん。

魔物に食べられそうになったところを助けてくれたシンジさん。
「近くの集落まで行ったら・・・別れちゃうのかな」

できればこれからもシンジさんと一緒に旅をしていきたい。

「だって私はシンジさんのことが・・・す」

ガサツ、後ろの方から葉っぱが揺れる音がした。

まさかシンジさん？ 今の独り言聞こえちゃった？

顔を真っ赤にしながら振り向いたが、そこにシンジさんはいなかった。

代わりに、オルトロス達を統べるケルベロスがいるだけだった。
瞬間顔が真っ青になるのを感じた。

「あ、あ、あ」

驚きと恐怖で声が出ない。

ここは死の森、さっきまでシンジさんと一緒だったから気が緩んでいたのかも知れない。

ケルベロスがにじり寄ってくる。

「い、いやあああああ！」

叫んだのを決起にケルベロスが飛びかかってくる。

私は反射的に目を閉じた。

そして暖かい何かが私に触れたのを感じた。

おそろおそろ目を開けると私はシンジさんの腕の中にいた。

「ふ、ふえええ」

私はうれしくなつて泣いてしまった。

シンジさんは、私がピンチの時は助けに来てくれる。

そう思うと涙が止まらなかった。

「ごめんな、怖い思いさせて」

違うの、私が泣いてるのは怖かったからじゃなくて、シンジさんが助けに来てくれたからなんですよ、なんてこと言えるわけがなかった。

「ちよつと目をつぶつて、すぐ終わるから」

シンジさんは私を下ろすと、けんじゅうを二つ取り出した。

私は言われたとおりに目を閉じる。

「死ね」

パンパン！ と乾いた音が死の森に響き渡った。

「死ね」

ローラを泣かせたケルベロスに弾丸を放つ。

打ち出した弾は、標的の前足両方の関節を正確に打ち抜いた。

「#%”#&”\$’&”’」

「黙れ」

続けてもう二発後ろ足の関節に打ち込む。

ケルベロスは、立てなくなり地面にひれ伏す。

そして無言のまま、両端の頭にありつたけの弾丸を撃ち込む。

すぐに両端の頭は動かなくなつたが、真ん中の頭はまだ動いていた。

「・・・化け物め」

腰からナイフを取り出し投擲。

ナイフは頭を貫通して地面に突き刺さった。

今度は完全に動かなくなった。

「ふう」

ま、こんなもんでいいだろう。

すぐにローラの元へ駆け寄る。

「もう大丈夫だぞ」

ローラはおそろおそろ目を開ける。

「無事だったんですね、よかった」

ローラの目尻に涙が溜まっていく。

まずい！ ローラの涙は、戦術爆撃並の威力を有している！

「泣くなって、ローラは笑ってた方がいいと思うぞ」

「ッ！ あ、ありがとうございます」

瞬間的に顔が真っ赤になる、が放っておく。

「うん、それじゃあ日も暮れてきたし、そうだな・・・あの洞

窟で野宿するか」

そう言っって少し先の方にある洞穴らしき物を指さす。

どうせなら森のど真ん中で寝るよりも、洞窟の方がいくらかま

しだろう。

問題はローラがOKを出すかだが・・・。

「私はシンジさんが行くところに行きます」

問題ないみたいだな。

「んじゃ行こう」

異世界についてからの最初の夜は、美少女と洞窟で過ごすことになった。

第十章 些細な出来事（後書き）

誤字脱字などあったらご指摘よろしくお願いします。
主人公のオンオフの切り替えが露骨すぎないか？

第十一章 この世界のこと

（和也サイド）

「それではまずこの世界のことについてお話します」

俺達は召還された部屋を出て、大きな会議室みたいな部屋にいた。

「この世界には大陸が現在確認されている中で3つあります。そして我々が属している大陸はカスタリア大陸と言って、世界で最大の規模を誇っています」

「国の関係はどうなっているのですか？」

勇者として呼び出されるということは、何か問題があると言うことだろう。

「はい、この国は、魔国、セイーン、アルジア、合計3つの国に囲まれており、そして現在はアルジアと・・・」

姫様が何か言い淀んでいる。まさか・・・。

「アルジアと戦争をしているのですか？」

「はい、正確にはまだ表立った戦争は起こっていませんが、いっつ大規模な戦いが起こるか・・・」

やっぱりな、悪い予想は当たるもんだ。

「それで、戦力の方はどうなっているのですか？」

この国の勇者として呼び出された以上、やるしかないだろう。

「我がカスタロット帝国の兵士の数は約五万ほどで、アルジアの兵士は約・・・八万ほどです」

三万差！これだけ差があればすぐにでも侵略してきそうなものだが。

「これだけの差があって大丈夫なのですか？」

姫様はにこっと笑って言った。

「確かに人数差では負けておりますが、こちらは有能な魔法師が

たくさんいますので」

魔法ね、 やっぱりあったか。

「それにこちらには勇者様がいますしね」

勇者というのは俺のことだろう。

でも俺なんかが役に立つのだろうか？

「おれ、 いや私は魔法の魔の字も知らない一般人なのですが」

「心配はいりません、 召還された時にいろいろと力がついたはず
です」

「力・・・ですか？」

力といつてもいまいちぴんと来ない。

何が変わったのだろうか？

「主に肉体の強化、 魔力の無限化、 言語の理解と言ったところ
です」

肉体の強化に魔力の無限化その言葉を聞いた瞬間、 頭の中で何
かがはじけた。

「魔力というのは魔法を使うための源ですよね！？」

「え、 ええ」

「それじゃあ、 シンジが魔法を使ってあの森を抜け出せる、 と
いうことはないでしょうか？」

しかし帰ってきた返事は、 俺の希望を打ち砕くのは十分な威力
だった。

「魔力を持っていたとしても魔法の使い方を知らなければ意味があ
りません。 それに肉体の強化といつても生身ではあの森の魔物に
は太刀打ちできません」

「そう・・・ですか」

結局ダメ・・・か。

「そんなに悲しまないでください。 勇者様がそれではどうするの
ですか」

「そうですね」

俺が勇者としてがんばるから見守ってくれ。

「それでは、明日から訓練を開始したいと思います」
「わかりました」

見ててくれ、最高の勇者になってみせるから。

「一つ教えてもらいたいんだけどいいかな？」

現在俺とローラは洞窟の中で果物を食べていた。

「ふえ？ なんですか？」

どうやらOKらしい。

「拘束を解いてあげるときに、雷属性がとうたらこうたら言ってたけど、あれって・・・もしかして魔法だったりする？」

ローラは間髪入れずに返事を返してくれた。

「はい、この世界には魔法がありますが・・・シンジさんの国には無かったんですか？」

「ごあいにくね」

その代わり科学って奴がものすごかったけど。

「もしかして、使い方とわかつちゃう？」

もしそうなら是非ご教授頂きたい！

「魔法の仕組みなら知ってますけど・・・」

「YES！」

英語なんて伝わらないはずだが、ニュアンスは伝わったようだ。

「え」と確か、魔法とは奇跡を具現化する物であり、世の理を歪めさせる物、だつたような気がします」

「奇跡・・・ねえ」

正直それだけの説明じゃよくわからん。

「もっと具体的に言っと？」

「魔法を使うには魔力が必要ですが、大体の人が生まれたときから持っています」

ふーん、じゃあ俺にもあるんじゃない？

「使用するには、術者の強い想像力が必要不可欠だと言います」
「ふむふむ」

「私も簡単なものならできますが」

「マジで！ やってやって！」

「わ、わかりました」

ローラは、その辺に落ちていた木の棒を取ると、目を閉じながら木の棒を前につきだした。

やがてマツチに火が灯るかのように、木の棒の先端に小さな火の玉が生まれた。

「おお！ 魔法スゲー！」

ローラは照れたのか頭を掻いている。

「このように簡単なものなら誰にでも使うことができます。木の棒を使ったのは、その方がイメージがしやすかったからです」

ローラの説明によると何も無くても魔法は使えるが、木の先端に炎を灯す、剣に雷をまわせる等とイメージした方が成功率が上がるらしい。

「より具体的に想像できるしな」

「簡単な魔法は無詠唱で行えますが、強力な魔法を使うのには詠唱が必要になります」

「んゝそっちはいいや」

詠唱なんてやっている内に、殺られるなんてことになったら目も当てられないからな。

「説明はこれくらいですけど・・・やってみますか？」

「ん、そうしたいのは山々だけどそろそろ寝るか」

洞窟に着いてから結構時間が経っている。

俺はともかくローラの方が・・・ね。

さつきから非常に眠たそうにしている。

「俺が見張りをしてるから、安心して寝てていいよ」

「シンジさんに頼りっぱなしじゃ申し訳ないですう」

「わかった、じゃあ１時間交代でしょう。最初は俺がするな」

これで納得してくれたのかローラは、すぐに眠りについた。

「まあ、ウソだけどね」

この様子なら、起こさなければ朝まで寝続けるだろう。

「さて、魔法の練習でもするか」

この世界は退屈しなさそうだな。

そんなことを考えながら果物を一つ取った。

第十一章 この世界のこと（後書き）

魔法が出てきました！

説明が下手かもしれませんが、どうぞ読んでやってください。

次回！ 主人公の魔法が！

第十二章 魔法ってすごい

「さて、まずは」

俺は今洞窟の目の前で魔法の訓練をしています。

「イメージは、手のひらに火の玉が、火の玉が」

しかしいくら待っても火の玉は出てこなかった。

「イメージが弱すぎるかな」

ここで、さっきのローラの行動を思い出す。

「そうだ！俺も木の棒使おうか！」

幸い周りには木の棒がたくさん落ちていた。

それを拾い上げて、再びイメージをする。

「火のついたマッチ、火のついたマッチ」

すると木の先端に小さな（ピンポン球くらい）火の玉が出現した。

「うおおおお！すげえええええ！」

俺魔法使っちゃったよ！

「でも・・・これじゃあねえ」

たしかに火の玉は出てきたが・・・小さすぎる。

「もつといい方法無いかな」

早いとこ拳銃以外の防衛方法を身につけないと。

弾も無限じゃないし。

拳銃のことを思い浮かべた瞬間、俺はいいことを考えついた。

「これならピンポン球でも問題無いだろう」

そう言いながら拳銃を取り出す。

「拳銃の先端に火の玉、拳銃の先端に火の玉」

ぶつぶつ呟いていると、木の棒と同じように、M92Fの先

端に、ピンポン球くらいの火の玉ができた。

「おしっ！第一段階OK。次はこれを・・・」

拳銃の役割は、弾丸の射出。

今のこの拳銃の役割はこの火の玉の・・・。

「射出！」

そうイメージすると、目に見えぬ早さで、火の玉が射出された。

「YES！ YES！ これはいいんじゃないんですか？」

続けてM1911も取り出す。

「行くぜ・・・」

今度はすぐに射出するイメージを組み立てる。

「おらっ！」

両方の拳銃の先端から火の玉が飛び出す。

「小さくても早さがあれば、頭ぐらいは貫けるだろう」

これで弾の心配はなくなったわけだが。

「次は属性付加つてのをやってみるか」

拳銃をホルスターにしまい、代わりにナイフを取り出す。

「まずはやつぱり・・・雷から！」

ナイフに、電流が通うイメージをする、

案の定こっちの方は簡単にできた。

「なんか・・・すごいな」

ナイフがびりびり言ってる。

「これで、スタンガン内蔵ナイフになったのか？」

使い勝手を調べるため近くの木に軽く投擲する。

そして絶句。

「・・・半端なさ過ぎだろ」

軽く投げただけなのにナイフは木を貫通してしまった。

ナイフの柄の部分に糸を仕込んであるので無くしはしなかったが。

「切れ味も上がってるな」

魔法・・・便利すぎだろ。

「他にもいろいろやってみるか」

そんなことを考えているうちに夜が明けるのだった。

第十二章

魔法ってすごい（後書き）

これらは簡単な魔法ですが、炎を弾として打ち出すという発想が無いので、この世界の人たちは使っていません。
感想などよろしくお願いします。

第十三章

森を抜けて

「ほら、起きろ。おゝいローラ起きろ」

「むにゃ、交代ですか？」

「まさか、もう出発するぞ」

「出発って・・・えええええ！」

ローラが大声を張り上げる。

「なんで起こしてくれなかったんですか？」

「いやゝあんまり気持ちよさそうに寝てたもんで」

ちなみにこれは、四割本当で六割ウソだ。

「近くの集落まであとどれくらい掛かるかわかる？」

ローラは何を言っても無駄だと悟ったのか、大人しく答えてくれた。

「はあ、たぶん歩いてあと・・・2時間ほどだと思います」

「ん、じゃあ飯はそこで食うか」

ここでローラが訝しそうに俺を見る。

「2時間と言っても普通に歩いてですよ。途中で魔物に会ったらもつと掛かります」

「まあ大丈夫だって」

そうですかといってローラは歩き出す。

「？ 行かないんですか？」

こちらを向き言った。

「いや行くことは行くんだけど・・・」

喋りながらローラの前に移動、そしてしゃがむ。

「何してるんですか？」

「いや、おんぶするから乗って」

瞬間ローラの顔は真っ赤に染まった。

「い、いやいや。もう腰なら大丈夫ですよ！」

明らかに慌てるローラ。

「いや腰とかの話じゃなくて、こうした方が早く着くかな」と思
って」

「うーう」

結局承諾してくれたようだ。

ローラが背中に乗ったのを確認して立ち上がる。

「方角は？」

「こ、こっちです」

ローラは、右の方向を指さす。

「さて、これから走るけど・・・しっかりつかまってるよ」

「？ わかりました」

「それじゃあ・・・行くぜ！」

足に力を込めて大地を蹴る！

「にやにや」

ローラがかわいらしい悲鳴を上げる。

それもそのはず、現在俺は相当な早さで森の中を駆けている。

いや、駆けているというより、飛んでいるだな。

一度足を踏み出すたびに、六メートルくらい飛んでいる。

「いやあ、爽快爽快！」

「ふにや〜〜」

相変わらずローラはかわいいなと思った。

「見えてきました！」

そう言ってローラが指さす方向には村らしきものがあつた。

「うまい食い物があるといいな」

ちなみに洞窟を発してからおよそ十分くらい経過。

「それにしてもすごい身体能力ですね」

「いや、これ魔法だけ」

「魔法？ シンジさん魔法が使えるようになったんですか？」

「まあな」

昨日の訓練でやりたいことはほとんどできた。

「一晩中訓練したかいがあつたな」

「シンジさん一晩中訓練してたんですか！」

ローラが声を張り上げる。

「人間は生まれた時から魔力を持っていると言いましたが、それは魔術を使うためでもあります、生命維持のためでもあるんです！」

「へえ」

つまり魔力が無くなったら死ぬ、ということだろう。

「体は何とも無いですか？」

心配してくれるローラ。

「ああ大丈夫、すこぶる快調さ！」

どうやら安心してくれたようだ、続けて質問された。

「ちなみに・・・今どんな魔法を使ってるんですか？」

「風だよ」

「風・・・ですか？」

ローラの頭の上にクエスチョンマークが出現する。

「こうさ、風を丸めた球体を着地地点に発生させて、それをバネみたいにいて飛んでるんだよ」

「へえ、器用な使い方をするんですね」

身体能力が上昇する魔法も考えたが、うまくイメージできなかったので代わりに風の魔法を代用した。

「到着！」

話し込んでいる内に集落に着いたようだ。

「ほら、飯食いに行こうぜ」

「そうですね」

俺たちは、食堂を探すことにした。

第十三章 森を抜けて（後書き）

やっと森を抜けました。

次は集落でのお話です。

感想などよろしく願います。

第十四章 図書館で

「いらつしゃい！」

食堂に入った俺たちを迎えてくれたのは、元氣そうなおばさんだった。

「注文はどうするね？」

いきなり注文とか言われても決めようが無いんだが。

「すいません、俺たち旅の者なのでよくわからないんですけど」

「まあ！ 旅の方！ 珍しいねえ」

この言い方だと旅人は少ないようだ。

「おすすめの物を二人前お願いします」

ちなみにお金は、馬車の中から押収。

ローラが言うには結構な量だそうだ。

「はいよ！」

そう言い残しておばさんは厨房に駆けていった。

「さて飯食ったらどうする？」

今後の予定、それを決めておかなくてはならない。

「ちなみに俺は一晩ここで宿を取ってから、大きな町に向かうつもりだけど」

「わ、私は・・・」

「あゝ無理して、ついて行くなんて言わなくていいぞ」

ローラのことだから、心配してついて行くなんて言いかねない。

「わ、私シンジさんが行くところに行きたいです」

「？ なんて？」

「・・・」

無言のままこちらを睨むローラ。

やがて大きな声で言い放った。

「シンジさんが心配だからです！ 大きな町で問題でも起こされたらたまらないです！」

「お、おお、わかった」

そこでちょうどおばさんが料理を運んできてくれた。

「はいよ！ 二人前お待ち！」

目の前にハンバーグみたいな物が置かれる。

「それじゃあ、いただきます！」

とりあえず、食ってから考えるか。

「ふい〜〜〜疲れた」

「やっとゆつくり休めますね」

俺たちは食堂を出た後、宿を取って休むことにした。

ちなみに相部屋。

最初は二つ部屋を取ろうとしたのだがローラが『お金がもつたないです！』と言って聞かないので相部屋にすることにした。

「さて、俺はこれから、この村の図書館とやらに行ってみようと思うんだけど・・・ローラはどうする」

「私は生活に必要な物を買うに行きます」

そう言い残してローラは村の中心の商店にくりだしていった。

「俺も行くか」

そして俺も部屋を後にした。

「へ〜意外としっかりしてんな」

現在図書館の中で本を探していた。

探している本は、魔法についてのことが書かれている本。

「これなんてどうだ？」

手に取った本の題名は『ゴブリンでもわかる魔法入門書』・・・

まあいいか。

席に座って本を開く。

「これは・・・当たりじゃないか？」

この本、 題名こそふざけてるが、 中身は非常にしっかりした物だった。

「まずは、 目次と」

目次にはこんなことが書かれていた。

『目次

- 一 魔法とは何か
 - 二 魔力について
 - 三 簡単な魔法回路
 - 四 攻撃魔法について
 - 五 治療系魔法について
 - 六 無属性魔法について
 - 七 創造魔法について
 - 八 失われた魔法について
- 後書き』

「ふむ」

魔法の基本的な仕組みはわかっていたので、 詳しい説明が書かれている四章あたりから読むことにしよう。

「でも、 こんなに読んだら、 集合が遅れちゃうな」

よし、 どれか一つだけ読むことにしよう。

少々考えた末決定。

「んゝやっぱりこれだな」

俺は目次に従ってその項目のページを開いた。

第十四章

図書館で（後書き）

ぜんぜん戦闘が無いですね。
さてシンジはどの項目を読むのか！

第十五章

食堂で

『創造魔法とは、現代魔法の中で、もっとも困難なものだとされている』

俺は創造魔法のことについて調べることにした。

攻撃魔法はもういらないし、治療系の魔法も簡単なものなら扱えるようになっていたからだ。

『創造魔法には、大量の魔力、繊細なイメージが必要とされている。たとえば時計を創るとする。ここでイメージしなくてはいけないのは、時計の表面だけでなく、内側の構造まで繊細にイメージする必要がある。表面だけのイメージだと動かないハリボテができあがってしまうわけだ』

「・・・なるほどね」

『しかし、簡単なものなら、魔力しだい、創ることができる。たとえば剣。

このイメージは、鋭い刃をイメージするだけで、中の構造などイメージしなくてもいいからである。しかし、剣一本創るのにも大量の魔力を使うので、創造魔法はあまり実用的ではないと言えるだろう』

「ふむ」

どうやら創造魔法とやらを習得するのは大変そうだ。

「でも・・・使ってみたいよな」

よし！ 今日から訓練だ！

そんな決意をもとに、集合場所へと足を向けた。

「シンジさーん。こっちです！」

集合場所の宿の前には、両手いっぱい袋を持ったローラが立

っていた。

「待たせた？」

「いえ全然」

そんなやりとりをしながら、部屋に向かっていった。

「ふい、疲れました」

「ご苦労さん」

ちよつと考えたんだが、この荷物全部持ち歩くつもりなのだろうか？

まあいいか。それよりも目下の目標は。

「飯食いに行くか？」

「そうしましょう！」

向かうは昼飯を食べたあの食堂。

「お腹減ったですう」

相変わらずかわいいなと考えながら、食堂に向かって歩くのだ。
った。

「いらつしゃい！　ってまたあんた達かい」

昼間のおばさんが、大声で迎えてくれる。

「またご飯食べに来ました。　昼間と同じやつ二人前お願いします」

「はいよ！」

おばさんが厨房に駆けていく。

「何か興味のある本は見つかりましたか？」

「まあね」

「ちなみにどんな本だったんですか？」

「魔法の本なんだけど・・・創造魔法についてちよいとね」

「創造魔法！　すごいですね！」

ローラが尊敬の意を込めたまなざしを向けてくる。

「いや、使えるわけじゃないからね」

「でも属性魔法の時のように、　　すぐに使えるようになると思います！」

「ありがとう」

そんなやりとりをしている内に、　　おばさんがハンバーグもどきを持ってくる。

「へいお待ち！　　残さず食べるんだよ！」

「モチです！」

ハンバーグもどきを食べるために、　　ナイフとフォークと手に取った瞬間、　　食堂のドアが勢いよく開け放たれた。

「よお、　　くそババア、　　さっさとここから出て行ってくれませんかねい」

一目見てわかった。　　もとの世界で言うヤのつく人達だ。

「うるさいね！　　ないにされたって、　　ここを出て行くつもりはな
いよ！」

ふむ、　　どうやら立ち退きを要求されてるみたいだな。

関わるべきか、　　関わらざるべきか……。

面倒なことになるのはイヤだしな。

なにやらゴチャゴチャ言っているが……はあ、　　またこのハン
バーグもどきをまた食うためだ、　　一肌脱ごう。

ちよいちよい、　　なんだねえ君たち。　　と言おうとしたが、　　勢
いよく立ち上がったローラにかき消されてしまった。

「ちよっと、　　うるさいですよ！　　こっちは食事中なんです！」

一瞬食堂の時間が止まった。

そして、　　数秒と待たずに再び動き出す。

「おうおうなんだお嬢さん！　　俺らにけちつけようってか？」
ヤクザの一人がローラに詰め寄ってくる。

「こんなところで騒いでいたあなたたちが悪いんです」

ぷいっとローラはそっぽを向く。

「なんだとこら！　　って、　　お嬢さんなかなかかわいい顔してん
ねええ」

ヤクザがローラのほつぺたに手を触れる。

「っ！ イヤ！」

ローラがヤクザの手をはたく。

ヤクザは怒ったのか、額に青筋をたてる。

「生意気なガキだな！ おい！ こいつを連れて行くぞ！」

なんでそんな結論にたどり着くんか？ 甚だ疑問である。

「誰があんた達みたいなのに連れて行かれるもんですか」

ローラがあっかんべをする。

やべえ、あれ滅茶苦茶かわいいぞ！

と、そんなことを考えてる場合じゃないよな。

このヤクザ達の罪は、俺たちの食事を中断させたこと。それから・・・ローラの頬に触れたこと。

これだけあれば、少々手荒なことになってもかまわないだろ？

「おい、そのカス共、俺の妹に手を出すんじゃない」

警告をしつつ席を立つ。

「なんだとコラア！ 死にてえのか坊主！」

ヤクザはポケットからナイフを取り出す。

「ひっ」

声を上げたのはローラとおばさん。

「まずはてめえをスタボロにしてやるぜ！」

ヤクザAが勢いよく駆けてくる。

「無駄無駄」

人数は四人、獲物は全員ナイフだろう。

ホルスターから、M92Fを取り出し・・・ヤクザAに向かって放った。

パン！ という乾いた音と共にヤクザAの悲鳴が食堂に木霊した。

「うぎゃあああああ！」

着弾地点は太もも。

しかしそこからは、血は流れていない。

「やっぱ便利だなこれ」

今俺が撃つたのは鉛球でもなく魔法でもない、あっちの世界から持ってきたゴム弾だった。

続けてヤクザB、C、Dの太もにもゴム弾を打ち込む。

「「ぎゃあああああああ！！！！」」「」

「うるさいです！ 食事の邪魔です！」

その言葉を聞いた瞬間ヤクザ達は悲鳴を上げなくなった。

おそらく、ローラの言葉に逆らえば、また撃たれると思ったのだろう。

しかしそいつはきついですよローラさん、ゴム弾と言っても、至近距離なら骨を砕きますよ。

結局ヤクザ達は「覚えてやがれ！」と負け犬ムード満載の台詞を吐いてどこかに行ってしまった。

「これでゆつくり食べられますね」とローラ。

「あんた達・・・何者だい？」とおばさん。

はあ、説明が面倒くさいな。

「とりあえず、これ食ってからでいいですか？」

おばさんは首を縦に振ってくれた。

第十五章

食堂で（後書き）

拳銃最強です！

魔法なんて怖くないぜ！　って感じです。

さて、　シンジは創造魔法が使えるようになるのか？

そしてヤクザ達にまた出番はあるのか？

感想・・・欲しいです。

第十六章 やっかい事

「あんたら何者なんだい？」

「しがない旅人AとBです」

「そんなわけあるかい、 あんな魔法使う奴なんて見たことがないよ」

食後からずっとこの押し問答だった。

ついでにさっきの魔法って言うのは、 拳銃のことです（ゴム弾使用）。

「あの〜ところでさっきの男達はなんだったんですか？」

話が進まなそうだったので、 こちらから話題提供をする。

「む、 まあいいか。 あの男達は、 このあたりに根城を持つ盗賊みたいな奴だよ」

「盗賊ねえ」

俺の想像していた盗賊は、 ナイフを持って『金目の物を全部だしな！』的な感じの人達だと思っていたが・・・う〜んカルチャーギャップですな。

「この村の村長が一週間ぐらい前に魔物に襲われて亡くなってから、活発に行動するようになったんだよ」

「今この村に村長とやらいはないのですか？」

おばさんは首を縦に振った。

「村長がいたときはきちんとしてただけだね〜」

「早く次の村長を決めて、 しっかり取り締まればいいじゃないですか」

「それがね、 盗賊団の奴らが『村長になったやつは殺してやる』だとか言ってるね」

「なるほど」

盗賊団に殺されるのを恐れて誰も村長にならない。

そして村長がいない村で暴れまくる。

なかなか考えてるじゃないか。

「ところで物は相談なんだけど・・・」

おばさんが何か言い淀む。

この流れは・・・まさか！

「あんた達で盗賊の奴らを懲らしめてくれないかね」

はい！ 来ました！ お決まりの台詞！

しかし返事はもちろん！

「無」

「わかりました！」

「理・・・って、え？」

急にしゃべり出したと思ったら、 ローラさん、 何言ってるんですか？

「そうかい！ そりやありがたい！」

おおおい！ 何勝手に決めてんだ！

「ローラ、 よく考えたのか？」

ローラは胸を張って言い放つ。

「もちろんです！ 困っている人は助けてあげないと、 ですよね！」

ローラが笑顔でこちらを見つめる。

おそらく、 あの森の中でのことを思い出しているのだろう。

そんな瞳で見つめられたら断れまい。 恐るべき眼力。

「・・・はあ、 わかりました。 できる限りの事はします」

おばさんが滅茶苦茶喜んでいる。 俺のやつかい事が増えるのが
そんなにおもしろいか！

「じゃあ今から詳しい話を聞かせてください」
「まかせな」

と、 その前に。

「ローラ、 お前は先に宿に戻つてろ」

「なんでですか？ 私も話聞きたいです」

「ダメだ、 子供は部屋に戻ってなさい」

そう言いながら、ローラを食堂の外へ追いやる。

「ぷっ、早く帰って来てくださいよ」

どうやらあきらめてくれたようで、宿の方へと駆けていった。

「さてと、話を戻しましょう」

「そうさいね」

テーブルに向かい合って座る。

「まず、連中の根城がどこにあるのか知ってますか？」

まず場所がわからないと、どうしようもないからな。

「確か連中、この村からちょっと東のところにある洞窟を根城に
してるらしいさね」

「ふむ」

洞窟ねえ、やっと盗賊らしくなってきたぞ。

「相手の規模は？」

「確か、一般人が十人ほどと、それと魔法使いが二人ほどで、
計十二人だよ」

アウト！俺の想像では、盗賊に魔法使いはいないのだ！

「次に、盗賊団の奴らがしてきたことを教えてください」

「村の商店を襲ったり・・・」

おばさんが下を向いて黙り込む。

次の言葉は検討がつく、が、あえて質問する。

「人殺しはしてないのですか？」

「村の男を・・・四人ほど」

四人・・・ねえ。

そしてこの様子だと・・・。

「うちの亭主も殺されたよ」

ビンゴ、最悪の予想が当たったな。

でも俺は慰めの言葉なんて持っていないし、持っていたとしても、
どうこうなる問題じゃない。だから話を続ける。

「わかりました、では最後に一番大切な質問です」

「なんだい？」

おばさんが疑問の表情でこちらを見つめる。

そして少々の沈黙の後、冷淡な声で言い放つ。

「村の男達を殺した連中は、生け捕りにしますか？ それとも・

・皆殺しにしますか？」

おばさんが目を見開いてから、少し考えるように目を閉じる。

さて、どんな答えが返ってくるかな？

第十六章 やっかい事（後書き）

本当にすみませんでした！

受験生なもので、勉強してたら、更新が遅くなってしまいました。

今後ともこのようなことがあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

第十七章

準備

「ただいま」

「シンジさん！ 私に魔法を教えてください！」

「は？」

おばさんとの話も済んで、宿に帰るとローラが一も二もなく言い放った。

「だから私に魔法を教えてください！」

ローラが必死の形相で訴えてくる。

「一応聞くけど・・・なんで？」

ちなみに、『盗賊を懲らしめるためです！』なんて言ったら却下。

「もちろん盗賊の人達を懲らしめるためです！」

「はい却下」

ローラを無視して、ベツトに飛び込む。

「なんでですか、なんでですか」

ローラは、隣のベツトでごろごろ転がり始めた。

「そりゃあ、ローラが魔法なんか使えなくても、俺が一人で何とかできるから」

今さらりと、俺最強です、と言った気がするが気にしない。

「えっ！ シンジさん一人で行くつもりなんですか！？」

「もちろん」

ついてくる気だったのか・・・でもさすがに一緒に行くのはまずかるう。

身の危険もあるし、なにより・・・見ちゃいけないことなんかが起こるかもしれないから。

「お願いします！ 私も連れて行ってください！」

「なんでわざわざ危険な場所についてくるの？」

俺がいるとしても、ローラが絶対安全というわけではない。

「盗賊団の人達に言いたいことがあるし・・・シンジさんが心配だからです！」

いや、心配なのはこっちなんですけど。

しかし、このままだと本当についてきそうだな。

だったらここは。

「わかった、盗賊団を懲らしめに行くのは明後日にして、今日は魔法のことについて話したげる」

「ありがとうございます！」

ローラはごろごろモードから、正座に移行。

「魔法を教えるって言っても、ほとんど・・・いや全部俺のオリジナルだけど、問題無い？」

「ぜんぜん問題無いです！ よろしくお願いします」

「うむ、では俺の魔法の持論を話そうではないか」

意味は無いが、長老モードに移行。

「よろしくお願いします！ 長老！」

おお！ なんてノリがいいんだ！

「あの森の中でローラは、想像した現象が起こることが魔法、と言ったのう」

「言ったような、言わなかったような・・・」

「うん、魔法ってこれだけ」

はい、長老口調疲れたツス。 よって通常モードに移行！

「ズバリこれとは？」

「だから想像するだけ」

何気ない口調で言ったのだが、ローラは納得できないようだった。

「想像するだけなら私もできます！」

そう言い放つと、人差し指の先端に、炎が灯った。

「でもこれをどうすればいいかわからないんです」

確かに、人差し指の先端に炎が灯っても誰も臆さないだろう。「だから、魔法ってのはね、想像するだけでいいの」

「この場合どんな想像ですか？」

ローラは人差し指を突き出す。

「簡単なことだよ。ローラはこの炎をどうしたい？」

「前に放ってみたいです」即答。

「それでOK。今度は、炎が灯った後、どうなるかも想像してみてください」

「わかりました」

ローラは人差し指の先端に灯っていた炎をいったん消す。

そして再び火を灯す。

その火の玉は・・・。

「やりました！」

見事に前方に射出されていた。

が、十センチ位進むと消えてしまった。

「あう」

肩をすくめて落ち込むローラ。

「いやいや、最初にしては上出来だって」

「本当ですか？」

途端に顔を輝かせるローラ。

「うんうん」

「ありがとうございます」

「お礼はいいからさ、今日はもう遅いし、もう寝ようか」

天井のランプに手を掛けながら言った。

「わかりました、明日も魔法のこと教えてくださいね」

そう言うところローラは、毛布にうずくまりすぐに眠りについた。

作戦成功・・・だよな？

「ごめん」

俺はベットからおりて、部屋にあったテーブルに座る。

「創造魔法とやらをやってみるか」

図書館で見た本の内容を思い出す。

「確か大量の魔力、それと繊細なイメージが必要だったけ？」

まあ、魔力とやらの方は大丈夫だろう。　なんか魔力量多いらしいし。

「とりあえず・・・ナイフかな」

目をつぶって、手のひらにナイフができるイメージをする。目を開けるとそこには。

「おゝできる」

手のひらには、俺の持っているナイフにそっくりなナイフが創造されていた。

「やっぱり、俺の持論はあつてみたいだな」

俺の持論、それは元々いた世界で言う、プログラムだ。

何が発生して、どのように動く、それをプログラミングした物が通常魔法。

物の細部をプログラミングして、その物体を発生させるのが創造魔法。

プログラミングする、という発想に気付いてからの成長速度はすさまじかった。

炎の弾丸なら、拳銃の先端に炎を出現させてそれを高速射出するよう脳内でプログラミングする、　たったそれだけのことだった。時計でたとえるなら、時計が動くのは誰でも知っているだろう。では時計の設計図はどうなっている？　と聞かれればほとんどの人が答えられないはずだ。

つまり俺の持論とは、創りたい物の詳細な設計を、脳内でプログラミングさせてそれを創り出す。それが創造魔法の正体。

「これなら・・・アレも創れるんじゃないか？」

設計図は母さんが持っていたやつが、そのまま頭に入っているからな。

「いくぞ」

ゆっくりと目を閉じ、ある物体の設計をプログラミングする。プログラムが完成すると、一気に魔力を放出する。

そして目を開けると、そこには。

「まじかよ・・・」

日本の自衛隊等が制式採用している89式5・56mm小銃があった。

他の物も創ってみたいが、時間がないので必要最低限の物だけを創ることにした

「まずは弾かな」

早速創ろうとしたが、ある事を閃いた。

「一応やってみるか」

弾丸とマガジンの設計図は頭に入っているので創造、ついでにいくつかのプログラムを組み込んでおいた。

「これができたら、本気で最強だな」

部屋にあった紐を89式に取り付けて、肩に掛ける。

「さて、俺は俺のやるべきことをしないと」

ローラに気づかれないうちに、音を立てないようにして部屋を出る。

向かう場所は東にある盗賊団のアジト。

そして目的は・・・。

第十七章

準備（後書き）

89式は作者の趣味です。

次回、89式が火を噴きます！

よくわからない説明だったかもしれませんが。反省。
こんな文ですが感想などよろしくお願いします。

第十八章

洞窟で

「ここだな」

宿を出てから風の魔法を使って高速移動した結果、目的地の洞窟にはすぐに着くことができた。

「見張りは・・・無しと」

警備がぬるいんじゃないか？

「まあいいんだったら好都合ということだ」

現在の装備は、拳銃二丁、89式が一丁、それからナイフが一本。

「とりあえず、奥に進むか」

洞窟の中は一本道なので、迷うということとはなかった。

少し歩くと、前方にある曲がり角のあたりから、なにやら男の話し声が聞こえた。

「で？ お前明日どうすんだよ」

どうやら明日の予定を聞きあっているようだ。

こちらには気付いていない。

なら一瞬で片づけてやる。

「そりゃあもちろん、あの村に行って、適当に金を巻き上げてくるさ」

「ははっ、そりゃいいな」

「楽しそうな会話だな、俺も混ぜてくれよ」

「おう、明日あの村に行って、つつ！」

声を掛けられた盗賊団の二人が驚いて俺を見る。

「なにもんだ！」

そう言いながら盗賊団の奴らは、懐からナイフを取り出す。

「気付くの遅いんだよ」

「なんだとこのガキ！」

盗賊の一人がこちらに向かって直進してくる。

「少し眠ってる」

シヨルダーケースに収納していたM92Fを取り出し、盗賊の一人に向かつて放つ。

男は叫ぶことなく眠りに落ちた。

「貴様、魔法使いか！」

まあ、拳銃を知らない奴がこれを見れば、魔法と思うのも無理はないだろう。

「いいや違うね、あえて言うなら・・・文明人かな？」

「は？ 文明じ「はい黙れ」」

男は文明人と言い終える前に眠りについた。

「おやすみなさうい」

男達からの返答はない。

「まあ、当然か。それじゃあ次行ってみよう」

男達がいた角を曲がると、奥の方から大人数の声が聞こえてきた。

どうやら奥の方は広場になっているようで、そこで宴会でも開いているようだった。

「俺もちよいと宴に混ぜてもらおうとしますかね」

忍び足で身を隠しつつ、宴を開いている広場に向かう。

「うわ、酒臭いな」

どうやらこの世界でも、酒は臭い物らしい。

「さあて、どいつからおねんねしてもらうか」

リーダーとは話があるので最後で。

「あいつにするか」

男達の輪の中心で裸踊りをしている男を見据える。

それと同時に肩に掛けていた89式を構える。

一応構造は知っている、つまり創造魔法を使い、スコープを創ることはできるのだが、

「こんな近くにいるんだから気がつけよ」

連中との距離はおよそ二十五メートル。スコープがなくても十

分射撃可能だ。

しかしこの距離でもどんちゃか騒ぎをしているのでこちらには気付いていない。

「それじゃあ・・・グッナイ」

男に向かって引き金を、引いた。

同時に乾いた音が鳴り響く。

裸踊りをしていた男は、バタリと倒れた。

周りにいた盗賊は驚いて目を見開く。

「敵襲か?!」

「ザツツライト」

でも気付くのが遅すぎたな。

慌てて臨戦態勢をとろうとする男達を撃ち続ける。

「敵は一人だ! 野郎共やつちまえ!」

「無理無理」

男達は馬鹿正直に直進してこちらに向かってくる。

パン! と乾いた音と共に、盗賊達が倒れていく。

「気をつける! 襲撃者はおそらく、魔法使いだ!」

男達は、俺が魔法使いだと推測すると、俺から離れていった。

「貴様・・・何者だ」

リーダーらしいごつい体つきをした男が話しかけてきた。

「俺か? 俺はそうだな・・・シン、でいいかな」

「で、そのシンは何のようでここに来たんだ?」

「こんなよう」

リーダー（推測）の隣にいた男を撃ち抜く。

男は音を立てて床に崩れ落ちた。

「なるほど、ならば死んでもらわなければな」

男は右手を俺に突き出す。

そしてその手のひらから、バスケットボール位の炎が生まれた。

「あんたか、魔法使いの一人つてのは」

「貴様に答える必要はない、なぜなら・・・ここで死ぬのだから

な！」

ワオ、よくまあそんな臭いセリフを堂々と。

そんなくだらないことを考えていると、男の手のひらから炎が放たれる。

「でも届かないんだよね」

水の壁が目の前に出現するイメージを脳内でプログラミングして、魔力を放出する。

瞬間、俺の目の前に水の壁が出現する。

それは火の玉と接触すると、水蒸気となって霧散した。

「水属性の魔法か、相性が悪い」

「そりゃよかった」

警戒しつつ男達を見据える。

残り人数は・・・八人くらいかな？

「魔法使いは二人って聞いてたんだけど・・・もう一人は？」

「ここだ」

声が聞こえるのと同時に後ろから雷撃が放たれる。

が、紙一重でそれを避ける。

「ほう、なかなかやるな」

雷撃を放った男は、にやりと笑った。

「ここにいるので全員？」

俺はリーダーの男に問いかける。

「・・・そうだ」

おお！ 答えてくれた。 てつきり無視するのかと思ったけど。

「ならいいや、お前ら全員眠れ」

まず後ろにいる雷撃男に照準を合わせる。

が、雷撃男は、

「ません！」

そう叫ぶと雷撃男の前に、ほぼ透明な盾が出現した。

「これはあらゆる魔法を遮断する盾だ。お前ごときには貫けん」

雷撃男は自慢げに語りだした。

「ああ、これ魔法じゃないから」

雷撃男の腕を撃ち抜く。

「かつ」

雷撃男は前のめりに倒れた。

「まっ、これもお前達からすれば魔法だけだな」

関係ないか。

そう呟きながら、残った男達を撃ち続ける。

乾いた音が洞窟内に木霊したが、すぐにやんだ。

「さて残るはあんただけだが」

「そのようだな」

リーダー男は周りを見ながら答える。

「あっ、言つとくけど全員生きてるよ」

おばさんとの約束だからな、誰も殺さないって。

「どういうことだ？」

疑問を口にしつつリーダー男はさっきと同じく炎弾を放つ。

が、すべて水の壁によって防がれた。

「お前にはちよいと痛い目に遭ってもらっぜ」

89式を下げ、M1911を取り出す。

こちらには麻酔弾ではなく、実弾が込められている。

そしてそれを、男の右足の太もみに放つ。

瞬間、リーダー男の顔が歪む。

「へえ、叫ばないんだ」

続けて左の太もにも実弾をぶち込む。

「ぐああ！」

「お、やっと叫んだ」

リーダー男の額からは、滝のように汗が噴き出ている。

「まっ、たぶんすぐは死なないから」

まあそれは置いといて。

「あんたに話があるんだ」

これからのことを決める大事な話が、ね。

第十八章

洞窟で（後書き）

展開早いかな？

次回で盗賊のお話は終わりにしたいと思います。

感想、 批評などお願いします。

第十九章

大切なお話

「まず、なぜあの村を襲った？」

M1911を突きつけながら、リーダー男に質問をする。

「村を襲う？ 何の話だ？」

リーダー男がなんの話かわからないという表情をする。

「何言ってるんだ、お前だろ？ あの村を襲うように言ったのは」

「違う！ 私はそんなこと命令してはいない！」

リーダー男が、声を張り上げて反論する。

「じゃあなんて命令したんだ！ 返答次第では頭ぶち抜くぞコラ」

M1911を眉間に突きつける。

「私は、あの村に近寄る魔物を退治せよと命令していた！ なぜそれが村を襲うことになるのだ！」

「どういうことだ？」

「あの村の近くには、死の森があり、そこから出てきた凶悪な魔物が村を襲わないようにと警備をさせていた」

村の警備をさせていた？ それじゃあおばさんと言っていたことが全然違うじゃないか。

「いや、だまされないぞ。 実際お前の部下が食堂を襲っているのを目撃した」

「何だと！」

リーダー男が拳銃で撃たれたときよりも大きな声を張り上げる。

この反応・・・本当に知らなかったのか？

「おい、お前は実際にあの村に行ったことがあるか？」

「・・・警備を初めてすぐの頃はちよくちよく言っていたが、死の森から出てくる魔物が多くなり、最近はそのらの討伐に行っており、村の方へとは行っていない」

なるほどね、だいたいわかってきたぞ。

「お前が死の森に行っている間、村の警備のリーダーは誰に任せ

ていた？」

「あそこで倒れている魔法使いだ」

「OK」

M1911を下げ、雷撃男に馬乗りになる。

「おい起きろ」

頬をパシパシとたたくが反応がない。

麻酔が効いているのだろう。恐るべき現代科学。

「しかたねえな」

雷撃男の撃たれた腕に手のひらを乗せる。

「貴様、治療魔法が使えるのか？」

「多分な」

俺が思うに、治療魔法とは、この世界で一番簡単な魔法だ。何せ頭の中で行うプログラムが非常に簡単だからだ。

ただ、怪我をする前の健康な体をイメージするだけでいいのだから。

即死でなければ、腕が吹き飛ばせば腕があつたときのイメージをすればいいだけだし、風邪を引いたのなら、風邪を引く前の姿をイメージするだけだ。

今回は、体内に麻酔が入っているので、それが無いときのイメージをする。

プログラムが完成するやいなや、右手から淡い光が出現する。それと同時に雷撃男が目を覚ました。

「！？俺は生きてたのか」

「まあな、眠ってただけだし。まあそんなことは置いてお前に聞きたいことがある」

雷撃男は訝しそうに俺を見る。

「お前か？あの村を襲うように言っただのは？」

瞬間、雷撃男とリーダー男は目を見開く。

「な、何を言っているんだ！俺はそんなこと指示していない！」
雷撃男は必死にごまかしているようだが態度でバレバレだった。

「なんでそんな指示を出したんだ？」

「だから私は何も指示して「嘘つくなこの野郎」」

このままではちがあかないと判断したため右太ももを射撃。

瞬間、雷撃男の絶叫が響いた。

「本当のことを言わないと、次は・・・頭を吹き飛ばすぞ」

俺の目を見た雷撃男は、冗談ではないと悟ったのか、ぼそぼそと語り出した。

「俺たちが必死に魔物達から村を守っても、報酬の一つももらえないなんておかしいだろ？ だからちよいとお小遣い稼ぎをさせてもらったわけだよ！」

「馬鹿者！ 人助けは、見返りを求めてする物ではない！」

ヒュー、いいこと言うねえ。さすがリーダー。

「うるせえ！ いざという時のためにお前は生かしておいたが、今死ね！」

雷撃男の手のひらから、雷を垂直に放ったような一撃が放たれる。

が、俺の発現させた土の壁によって防がれる。

「くそ邪魔するんじゃないか！」

今度はリーダーではなく俺めがけて雷撃が放たれる。

「あのなあ、それ効かないから」

再び土の壁を発現させる。

「くそつ！ とつとと殺しやがれ！」

最後の攻撃を防がれた雷撃男が、なにやら叫び始めた。

「いや、お前にはもう一つ聞きたいことがある」

お前のこれからのことを決める質問が。

「・・・なんだ？」

「なぜ、村の男を殺した？」

少々の沈黙。そして雷撃男がにやりと笑って言った。

「なぜって邪魔だったからだよ、文句あつか？」

「いいやないね」

その返答を聞いた俺は躊躇無く、

M1911の引き金を引いた。

第十九章

大切なお話（後書き）

すいません、また更新が遅れました。
今回のお話は書くのが難しかったです。
それゆえ変な話になっているかもしれませんが、
よろしくお願いします。

第二十章

村に帰って

「で、リーダーはこれからどうすんの？」

洞窟から出た俺とリーダーは村に向かって歩いていった。

「むう、村の人々には迷惑を掛けたのでな、とりあえず謝ろう
と思っている」

ついさっきわかったことだが、死の森へ魔物を討伐に行っていたのはリーダー一人らしく、そのほかのメンバーは、雷撃男にそのかされて村を襲っていたらしい。

「いい心がけだな、さすがリーダー。それよりもう走れるよな？」

リーダーの撃たれた両太もを見る。

「うむ、大丈夫だ。シンの回復魔法で、何とか動くようにな
った」

「そりゃよかった」

洞窟を出る際に、どうするか考えた結果、まさかおぶっているという愚行を行うわけにもいかず、無難に回復魔法を施すという結論に行き着いた。

「それよりも、シンの魔法は凄いものだ。是非教えて欲しいのだが」

リーダーが、肩に掛けている89式を指さして言った。

「んー、気が向いたら教えてやるよ」

魔法じゃないけどな。

「それよりほら、村が見えて来たぞ」

正確な時刻はわからないが、太陽らしき物が昇り始めているので、元の世界で言う朝になるのだらう。

そうこう考えている内に村の入り口までたどり着いた。

「まずはおばさんの所に行くか」

「・・・」

リーダーからの返事はない。

「あんま気落ちするなよリーダー、リーダーが百パーセント悪いってわけじゃ無いんだから」

食堂に向かって歩きながら、そんな会話をする。

「・・・そうか、ところでそのリーダーって言うのは何なのだ？」

「あだ名だよ、リーダーの。そんなことより・・・行くぞ」

「・・・うむ」

勢いよく食堂の扉を開け放つ。

「南無三！」

ちなみにこの、南無三に意味はない。

けどこの言葉って響きがいいよね。

「いらつしゃい！ えゝと・・・」

誰だい？ と言いたかったのだろうが、その言葉はリーダーによつて掻き消された。

「本当に申し訳ない！ 私の管理能力不足でこの村に迷惑を掛けてしまったのはこの私です！」

「ちょ、ちょっと。誰なんだい？ この男は」

「まんまだよ、こいつが盗賊団・・・いやこの村の元警備団長の、えゝとえゝと、そう！ リーダーだ！」

そつえば名前聞いてなかったな。まあいいか。

リーダーはリーダーよ！

「詳しく説明してもらえないかねえ」

「・・・わかりました」

かくかくしかじか、リーダーがことのあらましを説明し始めた。やがてリーダーの説明が終わるとおばさんは勢いよく立ち上がった。言った。

「なるほどね、大体の事はわかったよ」

「それじゃあ今後のことなんだけど・・・」

どうしますか？ と聞こうする俺をおばさんが制した。

「その前にしなくちゃいけないことがあるだろう？」

おばさんはそう言うリーダーの前に立った。

「あんたが全面的に悪いってことじゃないのはわかった。でもあなたのせいでもないと言うわけでもない。だったらけじめは付けないと」

おばさんは、リーダーを思いっきりの勢いで殴り飛ばした。

「ぐっ」

テーブルやいすを巻き込んで派手に転がるリーダー。

「これで良し」

おばさんがにこつと笑顔を見せる。

「で、これからどうするんだい？」

「やべー、ローラのこと忘れてた」

結局あの後、リーダーとおばさんは食堂で今後の村のことについて話をする事になったので、俺はおいとまさせてもらうことにした。

「まだ寝てればいいけど」

やがて俺たちの泊まっていた宿が見えてきた。

と、ここで早起きだった家族のことを思い出す。

「親父と母さん元気でやってるかな、とくに親父。無理矢理母さんの料理食べさせられたりしてないかな」

母さんの料理はすさまじいものがある。親父でさえ昇天は間違いない無しだ。

「そつえば和也は元気にしてるかな」

俺がこの世界に呼び出された時に和也も一緒にいたはずだ。となると和也もこの世界に来ている可能性が高い。

「あいつのことだから生きてれば、勇者でもやってるんだろうな」

剣を持った和也・・・滅茶苦茶似合うな！

「そんでもって美人のお姫様に出会って、 いちゃついたりするんだろうな」

くそう！ うらやましいぜ！ まあ想像だけど。

「しかしこれが現実のことになるうとは誰が想像しただろう」

聞いている人はいないが、 ナレーション口調で喋ってみる。

「まあこっちはこっちで楽しく過ごすとするか」

俺は宿の扉を開けて、 ローラの眠る部屋へと向かった。

～和也サイド～

「はあああ！」

当たらないとわかりつつも、 木刀を横風振るう。

「動きが単調すぎです、 それではすぐにやられてしまいますよ！」

俺の一撃をいとも容易く避けた女性は、 お返しとばかりに、

こちらの心臓めがけて木刀で突いてきた。

「危なっ！」

その突きを紙一重で避ける。

今の当たってたら、 怪我どころじゃ済まなかったぞ！

「戦闘中に喋るものではありません！」

「セリアさんこそ喋ってるじゃないですか！」

しかし喋りつつも隙を見せることはない。 さすが王国一の騎士

様だな。

なぜ俺が朝っぱらから、 木刀で模擬戦をしているかというと、

『カズヤ様には一刻も早く強くなってもらわなければなりません』

とかアリアが言い出すので、 一も二もなく戦闘訓練が開始され

たのだった。

しかも俺の訓練に当てられたのは、 王国一の強さを誇るという

セリアさん。

「今度はこちらから行きます！」

アリアさんが木刀を縦に振るう。

さつきからこの攻撃を受けていてわかったのだが、セリアさんの一撃は早いし重い。

「くっ」

だからその攻撃を受け止めようとはせずに、流すようにして木刀を振るう。

「いつまでも防御しているばかりでは、私には勝てませんよ！」

セリアさんが、しびれをきらしたのか、今まで以上に大きく振りかぶる。

「っ！ 今だ！」

この隙を見逃してやるつもりはない！

渾身の力を込めて、木刀を前に突き出す。

が、木刀は宙を切った。

「なっ」

「隙あります」

俺の頭に浮かんしたのは、罨という一文字。

セリアさんは、俺の持っていた木刀を下から切り上げた。

「あ」

「試合終了・・・ですね」

「・・・そうですね」

俺が呟くのと同時に、俺の手から離れた木刀が地に着いた。

「セリアさんは強すぎです！」

「その方が成長も早いでしょう？」

「そうですね、カズヤさんは確実に強くなっています」

上から、俺、アリア、セリアさんの順。

訓練も一段落ついて、今は休憩中だ。

「剣の訓練もいいですけど、魔法の方はどうなんですか？」

そう！ なんとと言っても魔法！ 一度でもいいから使ってみたい！
「魔法の方は、完全に才能がなければ使えませんかと思いますが・・・」

・聞きますか？」

「もちろん！」

「では、まず基本的なことから説明させていただきます。現在確認されている魔法の属性は、火、水、土、雷、風、氷などがあります」

「他にも種類があるの？」

「どうもアリアの、現在確認されている、という言い方が気になる。

「魔法とは想像の力、なので想像の仕様によっては新しい魔法が生まれるかも、ということですよ」

「なるほど」

「他にも、治療系魔法、無属性魔法、創造魔法、それに失われた魔法なんて言うのもあります」
「まるつきりRPGの世界だね。」

「まあ後の二つは、最近では見ませんけどね」

「後ろの二つというと、創造魔法と、失われた魔法って言うやつですか？」

「そうです、まずその二つの魔法を行うには大量の魔力が必要となります」

「これはたぶんクリアしてるだろう。」

「召還されたときに魔力が無限になるようになったらしいしな。」

「他は？」

「創造魔法を使うには明確なイメージが必要となります。誰もそのイメージができないのです」

「なるほどね」

「失われた魔法については、何も言えることはありません。ただ魔力を大量消費する、ということはわかっていますが」

「大体の事は理解できた。」

「それじゃあ、俺は火の魔法とかを覚えるとするか」
「立ち上がり、そう宣言する。」

「そうですね、簡単なものから覚えていきましょう。私が教えてさし上げます」

「お願いします！」

最高の勇者になるため今日もがんばるぞ！

第二十章 村に帰って（後書き）

冬期講習が始まってしまった・・・。
まあ作者は夜行性なので大丈夫でしょう。
それと更新遅れてすいませんでした。
感想などよろしく願います。

第二十一章 みんなのこれから

「・・・よし、物音はしないな」

扉に耳をあてて確認をするが起きている気配はない。

「行く・・・か」

物音をたてずに扉を開ける。

「・・・よかった」

予想通りローラはベットですやすやと眠っていた。

ついでに下の階で、飲み物らしき物を買っていた。

お金のことはよくわからなかったが、あの森で怪しい奴らから取ったお金を適当に払っておいた。

悪い顔はしていなかったので問題は無いだろう。

ベットの横に立ち、ローラの寝顔を眺めることおよそ三分。

「起こして・・・いいんだよね？」

正直、起こすのをためらわせるくらい、気持ちよさそうに寝ている。

「まあいいか、おゝい起きろ、ローラ」

「ふぎゅうううう・・・」

・・・起きない、これが親父とかだったら、たたき起こすだろうが、ローラは寝言がかわいかったので免除。

「起きろつてば！ローラ！」

「ふなゝふぬゝふにつ！」

ぐはっ！ なんだこの三段活用は！ 威力が高すぎる！

「ふええ、起きてたんですか？」

「ん、一応な」

返事をしながら飲み物を手渡す。

「ん？ ありがとうございます」

二人でベットに腰掛けながら飲み物を飲む。

「ふう、で？ いつ盗賊さん達を懲らしめに行くんですか」

「ああ、それなんだけど・・・盗賊団の人達、いやリーダーがさつき村に来て、みんなに謝ってたから、お咎めなしになった・・・と思う」

「そうですか、自分から謝りに来るのはいいことです」
「そうだな」

まあ自主的になるのかな？

俺が行動を起こさなきゃ来なかっただろうけど。

「で、ローラ。今日の午後から、東の方にある大きな町に行こうと思うんだけど」

盗賊団のアジトに行ったときに、もうちょっと東の方に町らしき物があったのは確認している。

「ローラも来るんだよね？」

「もちろんです！」

即座に返してくれたので、ちょっとうれしい。

「じゃあ飯でも食いに行くか！」

「はい！」

俺たちのこれからことは決まった。

「あつちはどうなってるかな」

「何か言いましたか？」

「いや、何も」

まあ、なるようになってるだろう。

「じゃ、行こうか」

俺たちは泊まっていた部屋をあとにした。

「うーす」

「いらっしやい！ おやあんた達かい」

前と同じようにおばさんが大きな声で迎えてくれた。

「この前と同じやつ二つ」

「あいよ！」

おばさんは注文を受けると厨房に駆けていった。

そして待つことおよそ五分くらいで、ハンバーグ（もう何でもいいよ）を持っておばさんが戻ってきた。

「ほら食べな！」

「「いただきます」」

俺とローラが食事を始めるとおばさんは、向かいのいすに座った。

「そういえば、まだあんた達の名前を聞いてなかったね」

「あつ」

すいふんと大事なことを、さらりと言うな。

まあこっちは、おばさんって呼ぶから問題無いんだけど。

「私の名前は、ノア・ロッドって言うんだ、これからもよろしくね」

「俺の名前は、神代真治。シンジって呼んでくれればいいです」

「えーと、私の名前は、ローラ・クリスアです。ローラって呼んでくれればうれしいです」

おばさんが俺とローラを見比べる。

「で、あんた達はどんな関係ないんだい？」

「ふえええ！ なんですかいきなり！」

そんなに驚く質問ではなかっただろうが、ローラだけは大声を上げて驚いている。

「旅の途中で出会って、それから一緒に旅をしているんです」

「ということは・・・恋人同士かい？」

この目・・・明らかにおもしろがっている。

「あわわわわ・・・」

ローラは相変わらず挙動不審になってるし。

「違いますよ、ただ気があったんで一緒に行動しているだけです」
これ以上聞かれるのも面倒なので、こっちから新しい話題を振るか。

「ところでリーダーはどうしたんですか？」

「ん？ あいつならたぶん、村のみんなに謝ってる途中だろうね」
「許してもらえるといいですね」

そうさねと相槌を打つおばさん。

「ついでに、リーダーはしばらくこの食堂で住むことになったよ」
「へえ」

ここ驚くとこなの？ 違うよね？

「俺たちは午後から、この村を出ようと思ってたんですよ」

「またこの村に戻ってくるのかい？」

「それはわからないですけど・・・」

どこに住んでも変わらないけど、できれば情報が多く集まるところに住みたい。

大きな町の方が、情報は集まりやすいだろう。

「そうかい、気が向いたら戻ってくるんだよ！」

「そうです」

ローラの皿を見ると、すでに空になっていた。

「じゃ、そろそろ行きますね」

俺とローラは席を立つ。

「できればリーダーに挨拶していつてやってくれないかい？」

「そうです」

食事の代金の支払いをローラに任せて、一人で店の外に出る。

「リーダーどこにいるんだろうな」

見える範囲で村を見ると、見事にリーダーを発見できた。

「噂をすれば影がさす、今この言葉の意味を感じとった気がする」

リーダーもこちらに気付いたのか、近寄ってきた。

「おお、シンか。どうかしたか？」

「いやどうもない。そっちこそ調子はどうだ？」

「うむ・・・」

リーダーは今までのことを話し始めた。

村の人達の家はあらかた回り終えたこと、みんなに許してもら

えたこと、この村に住み始めると言うこと等。

「そうか、まあがんばれよ」

話の途中でローラが食堂から出てきた。

「ん？誰ですかこの人？」

「リーダー」

端的かつわかりやすい説明だったと思う。しかしローラには伝わらなかったらしい。

「んゝもういいです」

頬を膨らませるローラ。

あきらめ早いなあ。

「急なんだけど、俺たちもうこの村をでるんで」

「そうか・・・」

ちよつと残念そうなリーダー。

「まあお前だったら何とかなるって、リーダーらしくこの村の村長でもやれば？」

「考えておこう」

リーダーが、リーダーをする。なんだこれ？

「まあいいか、じゃあなリーダー！また会おうぜ！」
「うむ！」

そして、俺とローラは村をあとにした。

第二十一章 みんなのこれから（後書き）

さりげなくローラのフルネームが明かされました。
次回からは、大きな町でのお話になると思います。
感想など、 よろしくお願いします。

第二十二章 道の途中で

「ところで、首都に行つて何をするんですか？」

「ん？ 俺たちの向かつてるところって首都だったの？」

「ええ、たしかそうですね」

「そりゃ好都合だ。俺のことも何かわかるかもしれないからな。」

「で、何をするんですか？」

「とりあえず、いろいろな情報を集めてから、何か商売でも始めるかな」

「私も手伝います」

「助かる・・・って懲りない奴らだな」

「ふえ？」

ローラが不思議そうに首をかしげる。

「ほら、森の中にいたあのワン公共」

後ろを見ると、そのワン公共がこちらに向かって走ってきた。

しかしローラは動じる様子はない。

もちろん俺も。

向かつてくるのを見ながらばーっと突っ立っていると、ワン公共に囲まれてしまった。

現在俺が所持しているのは、M92FとM1911の二丁のみ。89式は移動の邪魔になるので、消してある。

ここで説明しておくが、創造魔法で創った物は、創った人の意志で簡単に消せるということがわかった。

しかも、一度創った物は精巧なイメージをしなくても、ある程度のイメージで創り出せることもわかった。

「戦意むき出しだな」

ワン公共は今にも飛びかかって来そうな状態だ。

「さあて、どうするかな？」

余裕ぶっこいているが、実はちょっときつい。

相手の数がおよそ・・・十五匹くらい。
対してこちらは、戦闘要員が俺だけ。

ローラには戦闘能力皆無だし。
守りながら戦うしかないか？

ローラは完全に俺のこと信用しきっているしな。

「やるっきゃないか」

肩に掛けてある拳銃二丁じゃ役不足だろうな。

「いっちょ新しい武器でも創るかな？」

89式を創ってもいいが、ワン公共は威嚇の段階なので時間が
ありそうだ。

「小回りがきいて、連射性がある物・・・アレにするか」

頭の中で、ある銃の設計図を組み立てる。

ついでに、ある機能も追加しておく。

「あとサプレッサーも創っておくか」

この前で学習したが、サプレッサー無しでは、ローラの話
をまともに聞くことができなかったしね。

「よし、こんなもんだろ」

設計図は完成した。

あとは魔力を込めて・・・。

「ふっ、・・・・・・やっぱすごいなこの魔法」

俺の両手にはしっかりとVz.61スコープオンが握られていた。

「まあサブマシンガンだし、正確に狙う必要もないだろう」

スコープオンの名前の由来となったストックを伸ばす。

「じゃ・・・殺るか」

呟くのと同時に、一匹のワン公が襲いかかってきた。

「遅いんだよ」

スコープオンの引き金を引く。

サプレッサーを付けているので、少しはましだった。

「次っ！」

両脇から二匹、でも関係ないな！

スコーピオンの銃口を、左右に向ける。

同時に低く、命を奪った音が轟く。

ついでに言うておくが、この銃の問題の弾切れは心配ない。

創造魔法で、マガジンにある機能を付けておいた。

それは、弾丸の自動創造。

この機能によって、マガジンには常時弾丸が装填されるので、弾切れの心配はないし、マガジンを取り替える心配もない。

「やっぱり数多いな」

でもワン公共は距離をとって、近づこうとはしてこない。

「びびってんのか？」

今の戦闘を見て、命の危機を感じとったのだろう。

「なら、無駄な殺生をする必要はないな！」

スコーピオンの銃口を、ワン公共の目の前の地面に向ける。

同時に射撃。

ビスビスビスと弾丸が、地面にめり込んでいく。

「次は当てちゃうよん」

ワン公共の目の前の地面に向けていた銃口を、ワン公の体に向け直しながら言い放った。

逃げなければどうなるのか、予想がついたのだろう、ワン公共は一目散に逃げ出した。

「ふゝ、何とか終わったぞ」

隣でうずくまっているローラに声を掛ける。

「ふえ？ 相変わらずシンジさんは強いですね」

「ん、まあね」

呟きながら、両手に持っていたスコーピオンを消す。

「じゃあ、行こうか」

「そうですね」

再び歩き出したところで、ある考えが頭をよぎる。

「ローラも武装しといた方がいいかな？」

俺がついていれば、少しは安心できるだろうが、なにせよこ

の世界、魔物？　とのエンカウント率が半端ない。

武装しておいて、悪いことはないだろう。

「女性、それもローラでも扱えそうな銃・・・アレかな」

目を閉じ、ある銃の設計図を組み立て、魔力を放出する。

「できてるね」

手のひらには、長さ8？ほどの銃ができあがっている。

「ウルサーPPK、これならローラでも使えるだろう・・・うん。」

もちろんマガジンにも、細工済み。

「ローラにこれ渡しとく」

「なんですかこれ？」

「ウルサーPPK」

「????」

俺も今の説明はなかったと思う。

なので詳しく説明開始。

「これはな、ローラを守ってくれる武器だ。これがあればさっ

きの犬っころ位なら二秒で殺れる」

「ええええ！　それって私にも使えるモノなんですか？」

「たぶん」

ローラがPPK（これからこう表記）を手にとってまじまじと観察している。

まあ、セーフティが掛かっているので暴発はないと思うけど。

「やっぱりちよっと訓練しておくか」

「お願いします！」

幸いここは広いし、誰もいないようなので訓練にはもってこいだろう。

「まずは、使い方を教えるから」

「はい！」

やけに気合い満々だな。　まあいいけど。

「まずこの銃は、安全装置を解除してからは基本的にはダブルアクションでの射撃になるんだ」

けど、とは言えられなかった。

「ぜんぜんわからないです！」

わずか三秒での挫折宣言。

「え！ うそぉ！」

俺もM92Fを撃つときに、親父からこんな感じの説明を受けただけですぐ理解できたぞ。

「仕方ない。ここは大幅に課程を省略だ」

創造魔法で、ローラの持っているモノと同じ銃を創り出す。

「まず、セーフティーを解除します」

ローラも見よう見まねでセーフティーを解除する。

「で、できました！」

「うむよろしい、本当なら他にすることがあるんだけど、ソレは特別な銃だから省略」

まあこっちの方が、扱いやすいだろう。

「続いて射撃の方に移ります」

「はい！ 何するかわからないけどがんばります！」

「その意気やよし！ 見てなさい！」

創造魔法で、前方十メートルくらいの所に、土でできた人形を創造する。

「まず狙いを付けて、標準があつたらこのレバーを引く！」

レバーと言ったのは、引き金と言っても理解できないと思ったからです。

表記飛ばしたけど、弾丸は土人形の額にヒット。

「わかった？」

「わかりました！」

ローラが自信満々でPPKを構える。

「言い忘れてたけど、基本的にレバーは二回引いてね」

これは基本。確実に相手を仕留めるための。

「行きますよ・・・えい！」

パンという音と共に聞こえたのは、なぜかローラの痛がる声だ

った。

「暴発!？」

いやそんなはずはない！ 設計図にはミスはなかったはず。
しかし答えはものすごく単純なモノだった。
リコイルショックで拳銃を支えきれなくなって、 おでこにゴチンしたと。

まさかこれほど非力だとは。

「まあ落ち着けて」

そう言った瞬間、 俺の頭の真横で何かが高速移動した。
つまるところローラの放った弾丸である。

「ふにゃゝ二回引かなくちゃゝ」

ローラは目をくらくらさせてへたり込んだ。
どうやらPPKが顔面にヒットして、 視界がぼやけているよう
だ。

でも許すのこれ？ もう少しで俺の顔面に弾丸ヒットしてたんだよ？
死んでたかもしれないんだよ？

「・・・・・・ローラ、 何か言うことは？」

「えゝと、 私うまくできてましたか？」

ローラが、 屈折なく微笑みながら尋ねる。

その笑顔を見ると、 起こるに怒れまい。

「・・・・ああ、 初めてにしては上手だったぞ」
こうして俺は今世紀最大の嘘をつくのだった。

第二十二章

道の途中で（後書き）

出てくる銃はみんな作者が撃つてみたいと思っている銃です。
誤字脱字などあった場合はご指摘お願いします。
感想などお待ちしております！

第二十三章 いざ首都へ

「広いな」

「そりやこの国の首都ですからね」

今俺の目の前には大きな壁がある。

それも半端じゃない大きさの。

「どっから中に入るんだ？」

「あそこじゃないですか？」

ローラの指さす方向には、兵士らしき人が槍を持って立っている。

「そうっばいな」

門番がいるってことは、何か検査があるのかな？

「すいませ〜ん」

門番の人がこちらに振り向いた。

「何か用かね」

「この中に入りたいんですけど」

ああ、そんなことが、と言って門を開けてくれた。

「ゆるゆるすぎだろ、門番なんていらんじゃないか？」

まあ何もなければ、それでもいいんだけど。

「とりあえず中に入るか？」

「そうですね」

俺が先頭、ローラが俺の後ろにつきながら門をくぐる。

まず中を見て驚いたのが人の量。

「半端ないな」

「すごいですね」

しかも町の中央あたりに、大きな城みたいのがある。

「まあいいか。それより寝床探そうぜ」

見たところ宿はたくさんありそうだし。

「じゃあ行きましょう」

俺とローラは人混みに紛れて歩き出した。

「ここなんてどうですか？」

「別にいいんじゃないか」

結局見つけたのは、町の中央にあるけっこう大きな宿屋だった。

「こんちわ」

「いらっしやい」

店の中を見るとまず中が妙に荒れているのに気付く。

隅の方のテーブルなどが倒れている。

「なにかあったんですか？」

「おう、それがよ、さっきここで喧嘩みたいのがあったんだよ」

「喧嘩・・・ですか」

「それもすげえのよ。何がすげえってまずこの国のお姫様が来たのよ」

「お姫様がアレをやったんですか？」

荒れたテーブルを指さす。

「違う違う、お姫様の付き人がやったんだよ」

「付き人がねえ」

「しかもただの付き人じゃねえんだ、めちゃくちゃイケメンだったのよ」

「イケメンは全滅すべきですね」

「まあな、でもいい奴だったぞ。俺の命の危機を救ってくれた」

おっさんは、言葉だけでは足りないのか、ジェスチャーでも表している。

ここで俺は親友だった和也を思い出した。

あいつならこんなことするんだろうな。

かわいい女の子をかばって、『この娘に何をした！』とか言っ

ちゃってよお。

俺もそんなフラグ立ててみてえ！

「さらにさらになんとその付き人、今年の武道大会に参加するらしいんだよ」

「そうなんですか」

「兄ちゃんも出てみないか？ 武道大会」

「いや遠慮しておきますよ。俺みたいのがそのイケメンさんと当たったらいやですし」

本音は、ただ面倒だからなんだけど。

武道大会なんて名前からして、疲れるだけだろう。

「で、おっさん。・・・二人部屋空いてない？」

シングル二つって言ってもローラが怒るだろうしな。

「空いてるけど、銅貨十枚ね」

「ローラ頼むぞ」

「はい」

ローラがポッケをこそごとと漁り、小袋を取り出す。

「！！！！！！」

小袋の中を見たローラが明らかに動揺している。

「どしたの？」

「それが・・・お金が足りないんです」

「なんだって!？」

それじゃ宿に泊まれないよな。

「どうしよう・・・」

俺は野宿でもいいけど・・・さすがにローラにはな〜。

「兄ちゃん、金が無いのかい？」

「そうみたいで・・・何とかありませんか？」

「そんなの簡単だ」

「無料で泊めてくれるんですか？」

よかった！ プランBの路地裏にいる奴の財布を奪う、
は廃案
になりそうだ。

「ああ、 武道大会に出てくれば」

「よっしゃあ？ ん？ 今なんて言いましたか？」

「武道大会に出る」

「なんで？」

それがここで泊まれるのどう関係があるんだ？

「毎年行われるこの武道大会は、 国が主催していて他の地域からも参加者が来るんだ。 それで国が参加者の宿代を負担するわけさ」
「なるほど、 なら出ます」

大会に参加するって言うておいて、 当日棄権すればいいだろう。
それで万事OKだ。

「わかった。 それでペアは隣のお嬢さんでいいのか？」

「は？」

「ふえ？」

俺とローラ、 同時に疑問符。

「まさか、 これって二人一組でないといけないんですか？」

「そうだが、 なにか問題があるのか？」

なに言ってるんだよこのおっさん。 ローラに戦闘能力があると思
っているのか、 ええ！

「私いいですよ。 武道大会出ます」

「んゝローラがそう言うならいいか」

よくよく考えればどうせすぐ棄権するんだし。

「ならエントリーお願いします」

「おう、 兄ちゃん達名前は？」

「こっちは、 シンでお願いします」

「私はローラで」

「おう、 エントリーしておくぜ。 部屋は二階の五号室を使って
くれ」

おじさんが部屋の鍵を差し出してきた。

「ありがとうございます。 ついでなんですけど、 大会っていつ
なんですか？」

「ん？ 明日だけど」

「ふーん・・・ってまじでか！」

「これじゃあ準備できないじゃないですか！」とローラ。
いや違う！ これじゃあ一日しか滞在できないじゃないか！

「ふう、 まあいいか。 じゃあ部屋借ります」

おっさんから鍵をもらって、 部屋へ向かった。

「お金、 どれくらい残ってるんだ？」

「銅貨三枚です」

「それって物に変えるとどのくらいになるの？」

「銅貨一枚でリンゴが一つくらいですから、 リンゴ三つぶん位です」

「ふーん」

そういえばお金のことローラに任せっきりだからな。

俺もいっちょお金のこと覚えとくとするか。

「ローラ、 悪いけどお金のことを教えてくれない？」

「いいですよ。 現品はないですけど、 この国には硬貨が四種類あります。 銅貨、 銀貨、 金貨、 白銀貨の四種類です」

「それってどれくらい価値があるの？」

「そうですね、 銀貨は銅貨が百枚分です」

「ちよつと待った！ それじゃあぜんぜんわからない！」

自分で言っただけどこの手のことは弱くてね、 どうするか、

・・・あ、 そうだ！

「お金の単位さあ、 リンゴで例えてくれない？」

「リンゴ・・・ですか？」

こっちの方がわかりやすいと俺は思う。

「わかりました。 まずさっき言いましたが銅貨一枚でリンゴ二つです」

「ふむふむ」

「銀貨一枚でリンゴが百個、金貨一枚でリンゴが千個、白銀貨一枚でリンゴ一万個です」

「なるへそ！」

「やっぱりリンゴ式は簡単だね。」

「それよりご飯食べに行きませんか？」

「気付けばもう日が暮れていた。」

「そうだな」

なんと大会に参加すれば宿に泊まれるだけでなく、
「ご飯も無料
で食べさせてくれるらしい。」

やる気ないのに、 なにか申し訳ないな。

「まあいいか」

俺とローラは階段を下りて一階の食堂に向かった。

第二十三章 いざ首都へ（後書き）

更新遅れました。

やっと大きな町に入れました。

次回はカズヤの話からです。

第二十四章

宿屋で（前書き）

このお話は、真治が宿に来るちよつと前のお話です。
よろしければ続きをどうぞ。

第二十四章

宿屋で

「いきなりですけどカズヤさん、 武道大会に参加してみませんか？」

「本当にいきなりですね」

訓練が終わったあとアリアが唐突に言い放った。

でも武道大会か、 おもしろそうな響きではあるけど。

「俺みたいな弱い奴が出てもいいのか？」

現に今さつき、 セリアさんにこてんぱんにやられたばかりだ。

俺みたいになへなちよが出たら、 大会の空気がぶち壊れだろう。

「お言葉ですが、 カズヤさんは弱くはありませんよ」

「え？」

「そうです！ 比べている対象が悪いんです！」

「そうなのかな？」

セリアさんは、 王国一の騎士だって言うけど。

「カズヤさんは確実に強くなっています」

「実感はないけど」

「そうですよ！ 魔法も使えるようになってきましたし！」

なんか褒められるといい気分だな。

「うーん・・・わかりました出ます」

「さすがです！ カズヤさん！」

出るだけでさすがって言うのは、 なんだかな。

「ではパートナーには私が出ます」

「ええ、 お願いするわ。 優勝してきてよねセリア！」

「あの、 パートナーってなんですか？」

「言ってなかったですけど、 この大会は二人一組でないと参加できません」

「それでもう一人がセリアさんだと」

「なにか不満ですか？」とセリアさんが尋ねてきた。

「いやまさか！ そんなことありませんよ！」

むしろセリアさんだと、頼もしすぎるくらいだぜ！

「そうと決まれば早速申し込みに行きましょう。いいですよねセリア？」

「もちろんです」

こうして俺とアリアとセリアさんは町へとくりだすのだった。

「ここで申し込みをするんですか？」

「そうです、ここは国の中で一番旅人さんが集まるところですから」

今俺の目の前には、けっこう大きな宿がある。

「じゃあ入りましょうか」

セリアさんに続いて、アリア、俺の順で中に入る。

「店主、大会の申し込みをしたいのだが」

「お、ねえちゃんが出るのかい？」

「そうだ」

このおっさんは、顔を見てねえちゃんと判断しているのではなく、声色で判断しているはずだ。

今セリアさんとアリアはどうかいフードをかぶって顔を隠している。

なんでも姿を見られると大騒ぎになるかららしい。

ちなみに俺はしていない。

「パートナーはこっちの兄ちゃんでもいいのかい？」

「そうです」

「じゃあ名前を教えてくださいねえかい」

「自分はカズヤでお願いします」

「私はセリアで」

「わかった。カズヤとセリアだな・・・ん？ セリア？」

おっさんは訝しそうにセリアさんを凝視する。

「店主、悪いんだが急いでいるんだ」

と、急かすセリアさん。

セリアさんの正体がばれても面倒なことになるらしい。

「ん？ ああ、悪かったな……よしもう大丈夫だぞ」

「ありがとう店主」

どうやら申し込みは終わったようだ。

「じゃあ帰りましょう、あれ？ アリアは？」

隣を見ても、さっきまでいたはずのアリアの姿が見えない。

「まずっ！」

まさか勝手に出て行っちゃたとか？

しかしその懸案は三秒でかき消えた。

「なにやってんだ？」

アリアが店の隅っこの方で男達となにやら話し込んでいる。

「どうしますか？ セリアさん」

「行くしかあるまい」

ずんずんとセリアさんが歩き出す。

「お前達！ 何をしている！」

びくつと男達がこちらに振り向く。

「ってなんだよ、女かよ」

男達がそういうのも、セリアさんはいつの間にかフードを取っていた

「聞いてください！ この人達が、『女が出るのか？ この大会も墜ちたもんだな』とか言ってたんです！」

「それでこらえきれずに、文句を言ったと」

「そうです！」

「は、そんな単細胞の奴の相手なんかする必要なんてないって」
「んだとこらあ！」

一人の男が、いすを蹴り上げて勢いよく立ち上がる。

「いい度胸だなあ、兄ちゃんよ！」

立ち上がった男が、腰に掛けているロングソードに手を掛ける。

「剣をぬきな！」

「自分は喧嘩はしま「やっちゃってください！ カズヤさん！」・・・
わかりました」

セリアさんが腰に下げている剣から手を離す。

「どうやら俺に一任するようだ。」

「やれやれ」

でも俺は剣を持っていない。

「いくぜ！」

そんなことを考えているうちに男が突進してきた。

剣を鞘から抜きだしてないので、殺す気はないようだ。

「まあ当然か！」

初撃の一閃を軽く避ける。

鞘から抜いていないと言っても、当たったら骨折くらいするか
もしれないからな。

「ちっ！ ちょこまかと」

続けてくりだされる攻撃を避け続ける。

「はあはあ、くそやろう！」

男が剣を大きく振り上げる。

「うらあ！」

「当たらないよ！」

振り上げられた男の剣が床に突き刺さる。

「くそっ！」

「ふっ！」

男のがら空きになった懷に潜り込む。

「なっ！」

「遅いんだよ！」

剣があつても懷に入ればこっちのもんだ！

「くらえ！」

去年あたりに授業で教えてもらった背負い投げを！

「ぐえ」

男が隅の方にあつたテーブルにたたきつけられる。
そつえばこの技も真治に教えてもらつたんだよね。

「凄いですカズヤさん！」

「なかなかだ」

「ありがとうございます」

隅の方を見ると、投げられた男が何とか立ち上がるところだつた。

「くそつたれ！ 大会でまってやがれ！」

男達が慌てて店から飛び出していく。

「じゃあね」

「べーだ！」

あいつらも大会に出るのか、あたつたらやだな。

「兄ちゃんすげえな！」

カウンターに立っていたおっさんが急に話しかけてきた。

「まあぼちぼちですよ」

真治も凄いつて言ってくれたな。

と、ここでアリアが得意げにしゃべり出した。

「そりやそうです！ カズヤさんはこの私の従者ですから」

「従者がいるつてことは、お嬢さんどこかのお偉いさんかい？」

「ええ、この国の第一王女ですけど」

「ばっ！」

「お嬢さん、そんなこと言つてたら、不敬罪で拘束されちまうぜ」

要するにこのおっさんは、こんな所に王女様がいるわけないと思つてゐるわけだ。

でもヤバイよこのおっさん、マジでこの人第一王女だよ。

あんたが不敬罪になるよ。

「アリア、フード取つたら？」

「？ わかりました」

アリアが厳かにフードを脱ぐ。

「わっはっはっは……っておい嘘だろ」

フードを取ったアリアを見ておっさんは絶句した。

「俺こんなことで死ぬのか？」

どうやらおっさんには、処刑台が見えているらしい。

「あゝおっさん、俺から謝つとくから大丈夫です」

「本当か？」

「任せてください」

おじさんがへなへなと床に崩れ落ちる。

「た、助かった」

「それじゃあ俺たちは行くんで」

「あ、ああ」

おっさんが力なく返事をする。

かわいそうなおっさんだなあ。

まあ兎にも角にも申し込みを済ませたしいいか。

「そつえば大会っていつなんですか？」

「明日です」

「うっそお！」

早すぎでしょ！ 準備とかできないじゃん！

「大丈夫です！ これから準備すればなんとか間に合います！」

「ひでえ」

こんな話をしながら城に戻っていった。

第二十四章

宿屋で（後書き）

前の章と話がかみ合っていると思うんですが・・・。

気になる点があったら、ご報告ください。

次回はたぶん戦闘になると思います。

違ったらごめんなさい。

感想などお待ちしております。

第二十五章

お金は大切

「やっと来ましたね、この日が！」

「ああそうだな」

この日と言うのも、今日は武道大会当日である。

「ローラはやる気満々だな・・・」

「もちろんです！」

ローラがPPKをぶんぶん振り回している。

もちろんセーフティーはしてあるけど。

「ローラ、むやみに振り回すなって言ってるだろ」

「そうでした」

結局あの殺人未遂の後、丁寧に教え込んだ結果、一応撃てるようになった。

「でもすぐ棄権するぞ」

「え！　なんでですか！」

どうやら本当に出る気だったようだ。

「だってそんなもんに出て、疲れれるだけだろ。宿屋にも泊

まれたし万々歳だろ」

「・・・そうですね」

なぜそこで落ち込む！

「そんな出たかったのか？」

「・・・はい」

「なんで？」

「・・・ゴニョリ」

ん？　今何か言ったよな？

「ローラ今何か言った？」

「いいから出ます！　私一人でも出ますからね！　シンジさんは隅の方で見ててください！」

「あ、ああ。わかったよ」

結局、大会に本気（主にローラ）で参加することになった俺だった。

「うわ、なんか蒸し暑いな」

今俺たちは、町の中央にある闘技場の中の選手控え室に来ている。

ここで大会が行われるらしい。

「それはシンジさんが変なモノ付けてるからですよ」

「そんなこと言うなって」

ローラが言う変なモノというのは、頭に掛けているゴーグルのことだろう。

それと茶色のローブを着ている。

姿を覚えられるのは得策じゃないからな。なんとなく。

「ローラも付けとけて」

俺の手のひらには、同じゴーグルが握られている。

もちろん魔法で作成。

「相変わらず凄いですね・・・」

「たぶんな」

受け取ったところを見ると一応ゴーグルは付けてくれるみたいだ。

ローブは別にいいだろう。

「なんですかこれ！ 見にくいです！」

「すぐ慣れるよ」

このゴーグルは黒のカラーレンズを使用していて、サングラスの役割も果たしている。もちろん本来の役割も果たすが。

「あとこれも」

ローラにPPKのゴム弾の入ったマガジンを差し出す。

「ん？ たま〜とか言うのは無限じゃなかったんですか？」

「いいから、入ってるマガジンと取り替えておいて」

「わかりました」

ローラがPPKのマガジンを取り替えていく。

余談だが、PPKを渡したときにレグホルスターも渡してある。

「それじゃあ行きましょう！」

「ああ、そうだな・・・」

さっき入場するときに聞いた話だが、この大会の参加者数はなんと二百人オーバーらしい。

よほど宿代タダが効いたのかな？

「最初は五十人での勝ち抜き戦らしいですよ」

「そうらしいな」

参加者数が多いのか、最初の試合は闘技場で五十人での勝ち抜き戦をするらしい。

「本戦に上がれるのは確か・・・何組ですか？」

「一試合ごとに二組だ」

ということは本戦に上がれるのは、大体八組くらいだろう。

「まあがんばってな」

「もう！ わかってますよ！」

棄権するのかと思ったが本当にやる気らしい。

「行きますよ！」

「はいはい」

こんなやりとりの後、俺たちは会場へ向かった。

「さ～～～、とうとう始まります！ 待ちに待った武道大会！」

今年は誰が優勝するのでしょうか！」

観客席から思い思いのヤジが飛んでいる。

まあこの感じは嫌いじゃない。

「さ～～～、ここで軽くルールのおさらいをしておきたいと思い

ます。　まず殺しは無し！　これは基本中の基本のルールです！
これを破ると国から罰されるのでお気を付けください。　勝ち負け
の判定は気絶が基本、　他には戦闘が続行できないと判断した場合
も失格となります」

うん、　これはいいルールだな。

これで間違ってもローラが死ぬことはないだろう。

「そしてこの大会の参加条件は二人一組ということですが、　片方
が失格になっても続行です。　両方が失格になった場合に退場です」
え？　じゃあローラがもしも失格になっても続行ってこと？
それは面倒だな。

まあローラが失格になることはないだろう。

俺がいるし、　誰にも触れさせねえよ。

「それではルールの説明はこれくらいにしておきましょう！　それ
では武道大会第一ブロックの試合を始めたいと思います！　それで
は・・・始め！」

「ローラ！　こっちに来い！」

「ふえ？」

もう！　とろくさいな！

「いいから！」

しょうがないなあ、　ここは・・・。

「おんぶしかない！」

「え？　え？」

ローラに近寄り、　強引におんぶの態勢をとる。

「い、　いいですよ！　自分で動けます！」

「いいから！　早く！」

「・・・わかりました」

ローラは渋々俺の背中に乗った。

「よし！　行くぞ！」

ローラが俺の背中に乗ったのを確認してから、闘技場の隅に走る。ものすごいスピードで。

思っていたより戦いが白熱している。
一対一ならともかく、この人混みでは後ろからズブリといかれるかもしれないからな。

「ここで人数が減るまで待ってるんだ、いいな？」
「わかりました」

「ああ、向こうから来た場合はやっちゃていいぞ」
と、そんな話をしているうちにも二人組の男がこちらに突っ込んできた。

「ヒヤッハー！！ 女だろうと容赦しねえぜ！」
「もちろんだぜ！」

人数は二人、武器はロングソードと、ナイフが二本。
おそらくペアだろうがこれなら大丈夫だろう。

「ローラ、やっちゃいなさい」
「もちろんです！」

ローラが自信満々でレッグホルスターからPPKを取り出して構える。

「なんだそりや！？ まあ関係ねえか！」
「そうだ！ 関係ねえ！ やっちまおうぜ！」
「えいつ」

ローラがPPKの引き金を四回引いた。
かわいい動作だったがそれで十分だった。

「ぐぎやああああああ！」
「いてええええええええええ！」
「おお、さすがだなあ」

「えへへ、ありがとうございますう」
ローラが放った弾丸は二人の両足の関節にヒットしていた。
「いつの間にか上達してるんだなあ」
「練習してましたから」

本当は褒められたことじゃないんだけどな。

この世界では別、ってか。

「ん？ まだ二十人くらい残ってるなあ」

闘技場を見渡せば、立っている人数は二十人くらいになっていた。

減るペース早いほうなの？

「この半分くらいはやり合って失格になってほしいな」

つまり十人くらいになって欲しいってことだ。

「まあここらで突っ立ってればいいだろう・・・って言うてるそばから」

「・・・困まれちゃいましたね」

気付けば残った人数の半分くらい、つまり十人くらいが俺とローラを取り囲んでいた。

「へっへっへ、人数は一人でも減る方がいいからな」

「連携して弱い奴から潰すことにしたんだよ」

本当に弱い奴が思いつきそうな作戦だな。

「まあまあ、そうカッカすんなって」

「うるせえ！ いま危機的状況だってことがわからねえのか！」

この状況はローラ一人では対処できないだろう。

「わかってるよ、じゃあここらへんで俺たちき「おおっと！ や

はり優勝して金貨三十枚を手にするのはダン兄弟なのか！」・・・」

こちら側にいないもう半分のグループの方で動きがあったようだ。

「ダン兄弟とやらは置いといて、・・・優勝したら賞金があるのか？」

それも金貨三十枚だと？ リンゴ三万個じゃねえか！

「おいローラ、予定変更だ。全部俺がやる」

「ふえ？ 何か言いましたか？」

ローラがかわいく呟いた瞬間、俺の両手にはスコールピンが二丁。

「全部俺がやる？ なに格好つけてんだよ！ やっちまえ！」

「お前達には、この世界で生きるための礎になってもらおう（お

金の)」

スコープオンに装弾していたゴム弾を、一番に突っ込んできた奴に撃ち込む。

「ぐああああ！」

「次！」

この状況を見ても突っ込んでくる馬鹿が何人かいた。

相手の獲物もわかってないのに突っ込んでくるなんて考えられん！

「まあ結局、全員やるけどね！」

とりあえず突っ込んできた馬鹿共も始末するか。

足の関節狙うなんてことはしないでいいだろう、てかこの銃だと狙いにくい。

サブマシンガンなんだから、弾をばらまくことにしよう。

「そうと決まれば！」

スコープオンのストックを伸ばし、腰の位置で固定する。

「死ねえ！（もちろん嘘）」

苦痛に歪んだ声を上げながら男達が倒れていく。

「お次はどいつだ・・・って魔法か！」

俺たちを取り囲んでいた何人かの手には、バスケットボールくらいの炎の玉ができあがっていた。

「くそっ！ ローラ動くなよ！」

俺がローラを引き寄せるのと同時に、炎の玉が放たれた。

どうする？ 避けるか？ いや無理だ、まさに四方八方から放たれてる。

なら防ぐしかない！

そうと決まれば、自分の周りに薄い膜ができあがる様子をイメージする。

用途は防御で、魔法攻撃すべての消滅。

「ふっ！」

プログラムが完成して魔力を放出すると同時に、炎の玉が着弾する。

「やったか？」

「やってねえよ」

スコーピオンを構え、残った男達に向けて射撃

「……………終わりかな？」

とりあえず、俺たちを取り囲んでいた奴らの始末は終わった。

「凄いですシンジさん！」

「金の魔力だ」

さてと、残った奴らを殲滅するか。

しかし、会場を見渡しても立っているのは二人しかない。

それもどうやらペアのようだ。

「試合終了です！ 本戦出場はダン兄弟と、えー、誰だあいつら？」

えっ？ 勝ったのにこの扱い？ 参加者把握できてないよ。

「はいはいはい、シン＆ローラペアです」

会場からはブーイングの嵐が飛び交っている。

「どうせ隅の方で縮こまってただけだろ！」

「運がよかったな兄ちゃん達！」

どうやらさっきの俺の戦いは、あまり見られていなかったらしい。

みんなあのダン兄弟とか言うやつでも見てたのかな？

そんなことを考えていると、そのダン兄弟とやらが近寄ってきた。

「これで本戦に出場できるね」

「そうだな」

おお、案外好青年じゃないか。おっさん素直な子は嫌いじゃないぞ。

「兄貴、そんな運だけで生き残ったような奴ら放っておけよ」

兄貴と言うからには、こいつは弟の方だろう。

それにしてはしつけがなってないなあ。

「こら、なんてこと言うんだ、謝りなさい」

「うつせえ」

そう言い残すと弟は、会場から出て行ってしまった。

「すいませんね、うちの弟が」

「いえいえいいんですよ、それよりお互い本戦がんばりましょう」
そう言い残して俺とローラも会場を後にした。

第二十五章

お金は大切（後書き）

遅くなりました。

誤字脱字、文法の間違いなどあったら、報告お願いします。

感想、批評、疑問（答えられる範囲なら）なんでもお待ちしております。
おります。

第二十六章

第二ブロック（前書き）

このお話は、
ではどうぞ。

真治の試合が終わった後に行われた試合です。

第二十六章

第二ブロック

「早くしてくださいカズヤさん！ これでは間に合わなくなるかもしれない！」

「ちょ、セリアさん足早すぎです！」

現在俺は、試合会場となる闘技場の中を走っている。

「もう私たちの試合が始まります！」

「まじすいません！ 本当にすみません！」

こう遅刻しそうになっているのも、俺がぎりぎりまで鍛錬したい、と言つて城にこもつてたせいだ。

「あそこが私たちが出場する会場です！」

セリアさんの指さす方向からは歓声が聞こえてくる。

「間に合つてくれよ！！」

二人で会場につながる小さな門をくぐり抜ける。

「はあ、どうやら間に合つたようですね」

会場を見渡しても、まだ始まっている様子はない。

それにしても観客の量が半端ないな。

会場自体も滅茶苦茶でかいし。

「さ〜〜〜それでは第二試合を始めます！ 用意はいいですか？

まあよくなくても始めますけどね。 それでは・・・始め」

アナウンサーの質素？ 簡潔な号令によつて、選手達が一斉に動き出す。

「うわっ！ いきなり始まつた！」

「来ます！ 構えてください！」

そりゃあ、筋骨隆々の男が突進してきたら脊髓反射で構えますつて！

武器は昨日用意した。とりあえず木刀二本だ。

でも構えるのは一本、二本同時はまだあまり慣れていない。それでも一応持つておくことにした。

まあお守り代わりってことで。

ちなみに木刀をチョイスしたのは、これなら相手をそれほど傷つける心配はないし、木刀の扱いは慣れている。他の武器に比べたらだけどね。

ちなみに木刀の扱い方も真治に教えてもらった。

懐かしいなあ、真治めっちゃ強かったなあ。

「わりいな坊主！潰れてくれ！」

「っ！」

たくっ、感傷に浸る余裕もないな。

初めての实战、木刀を握る手に汗がにじむ。

男の獲物は大きなハンマー、さすがにこの木刀で受け止めるのは酷だな。

なら避けるしかない！

「おらあ！」

男がハンマーを振り抜く、が。

ただ振り下ろすだけの動作、そんな攻撃当たるわけがない。

「謝るのはこっちだ！ごめんなおっさん！」

しかも攻撃した後にも隙がある。

打ち込んでくれと言わんばかりの体勢だ。

この隙を見送るはずがない。

「ふっ！」

「ぐぬ」

攻撃を受けたおっさんが膝についてゆっくりと崩れ落ちる。

「ふう、なんとか終わったな」

「こっちも大丈夫です」

セリアさんが急に声を掛けてきた。

「いきなり現れないでください、びっくりするじゃないですか」

「まあまあ、それより次です。試しに魔法を使ってみてはいかがでしょうか？」

魔法かあ、使って見たいけど。

「怪我とかしませんか？（相手が）」

「大丈夫・・・です、まあ私がお手本を見せます」
言い終えるとちょうど一人の男が突っ込んできた。

「ふっ！」

セリアさんが腰に下げてある剣を抜く。

「こうするんです！」

セリアさんの抜いた剣の長さは大体八十？くらい、突っ込んでくる男との距離はおよそ五メートルくらい。

どう考えても振ったところで当たるわけがない。

でもそれは元の世界での話だ。

セリアさんが剣を振るうと男が足を抱えながら倒れ込んだ。

「・・・すこ」

漏れたのはそんな言葉だけだった。

よく見るとセリアさんの剣の先端から何か透明なモノが伸びている。

それは元の世界にあつた鞭を想像させた。

「水の魔法の応用です、このように切ったり燃やしたりするだけでなく、叩いたりすることにも使えます」

セリアさんが剣を振ると、透明な何かがしなやかに動く。

「ではがんばってください」

そう言い残すとセリアさんはどこかに行ってしまった。

「信頼されてるんだよね？」

とりあえずそう考えておこう。

「それじゃあがんばりますか」

木刀を握る手に力を込めて、そう呟いた。

「まずいなあ」

セリアさんと別れ、何人かの男を倒したところで、四人の男

に囲まれていた。

「兄ちゃん悪いなあ」

「せめて一発で気絶させてやる」

男達の獲物は左から、 ロングソード、 槍、 ナイフ、 それと・・・杖、 かな？「おらあ！」

まず槍を持った男が頭めがけて槍で突いてきた。

「くっ」

四人いるが、 同時にはかかってこなかった。

逃げ道をふさいでるのかな？

まあそんなことは置いといて、 とりあえずは槍男からだ。

「避けてるだけか！」

と言われてもなあ、 槍相手じゃ分が悪い。

なんせ木刀が届かない。

脳裏にセリアさんが勧めてきた魔法が浮かび上がる。

「・・・やるしかないか」

ここ数日で多少の魔法は覚えた、 でも覚えたのは、 物を燃やすための炎の魔法だ。 ここで使えば怪我じゃ済まないかもしれない。いい。

だったら他の魔法を使えばいい。

「頼む！ うまくいってくれよ！」

魔法のイメージを行いながら、 二本の木刀を縦に振るう。

「そんなん当たらない、 ってうわ！」

言葉とは裏腹に槍男が勢いよく後ろに吹っ飛んだ。

思わずガッツポーズ。

「これは使えるな！」

俺がイメージしたのは風だ。

剣を振るうと強烈な風が吹く、 といった具合でイメージした。

「次だ！」

再び木刀を振るう。

ロングソード男、 ナイフ男が真後ろに吹っ飛ぶ。 もちろん風

の魔法で。

しかし杖男だけが平気な顔で立っていた。

「なかなか、だが私には効かないな！」

杖男の杖から、テニスボールくらいの炎が五つできあがっている。

「いけ！」

男の掛け声と共に炎の玉が、一直線にこちらに放たれる。

「危な！」

一つ避けて、二つ避けて、三つ、四つ、五つ！

「ほう、なかなかやるな」

「まあな」

余裕ぶっこいているが滅茶苦茶危なかった！

もう一度来たらまずい！避けきれないかもしれない。

「そんな攻撃俺には効かないな」

強気で押すしかない。

「ふむ、そうか。なら他のでいくぞ！」

杖男が杖を地面に突き刺す。

今思っただけで、この世界の魔法ってちょっと怖い？って
いうか不便だ。

元いた世界だと、『くらえ！ファイヤーボール！』とかあるじゃん？

ファイヤーボールって言われれば、『あつ、炎の攻撃が来るな』
とかわかるけど、この世界じゃ前動作がないんだよなあ。

だから今、この杖男が何をしようとしているのか全くわからない。

ちなみにこの間およそ二秒。

「いけ！」

「……杖からは何も出てこない。

「……不発？」

「ノーコメントで」

杖男がにやりと笑う。

この顔、魔法は絶対成功している。

ならどこから来る？ 前？ 後ろ？ 左右？ 上？ いや・・・
下か！

下を見るとなにやら地面がめりあがってきた。

「やばっ！」

地面からかよ！ そりゃないぜ！

「間に合え！」

瞬間的に後ろに飛び退く。

するとさっきまで立っていた場所から、土が槍になったような
物が突き出ている。

「助かったあ！」

「甘い！」

別地点に着地すると同時、 またもや土がめりあがってきた。

「くそ！」

今度は真横に飛び跳ねる。

「しつこいな！」

立つ場所立つ場所に土の槍が突き出してくる。

しかもだんだん杖男から離れていつてるし。

「ほらほらほらあ！」

しかし杖男はお構いなしに杖を地面に突き続ける。

「これじゃあ・・・」

今は避けきつているが、 このままではマズイ！

何がマズイって足がぶるぶる震えてきた！

このままだとやられる！

風の魔法は届かなかつたし、 炎の魔法は使えない、 てか使
いたくないし・・・。

木刀でいくしかない。

だったら次で決める、 本当に足がマズイ。

「おらあ！」

杖男が杖を持ち上げる。

しびれをきらしたのか、　今までよりも大きな動作を取る。

「ここしかない！」

風の魔法を使って、　飛翔をイメージする。

俺を、　杖男の前まで運んでくれ！

一歩強く踏み出して走り出すと、　体がほわっと軽くなった。

「なっ！」

杖男が驚愕、　なんせ杖男が目の前にいたから。

杖男が近づいたのではない、　俺が近づいたのだ。

杖で防御しようとするが、　遅い！

「ここで決め「試合終了！　本戦に上がれるのは、　カズヤ&セリ

アペアと、　カイト&ボアペアです！」・・・えっ？」

「すみません、　全員片づけてしまいました」

後ろから暢気なセリアさんの声。

どうやらこの人以外はセリアさんが倒してしまったようだ。

ペアが失格になっても、　平気って聞いたからな。

この人のペアも本戦出場ってことか。

「どうやらセーフみたいだな」

「そうみたいですな」

尻餅をついている杖男に手をさしのべる。

「悪いな」

「いえいえ」

まあ俺も本戦出場らしいし。

「本戦で決着をつけましょうか」

「おうよ」

杖男との会話はそれで十分だった。

第二十六章

第二ブロック（後書き）

うん、 とくに書くことがない。
まあよろしくしてやってください。

閑話

昼飯騒動（前書き）

シンジとローラの試合後のお話です。
本編とはあまり関係ないと思います。
短いですがどうぞ。

閑話 昼飯騒動

「飯はどうする？」

「私は何でもいいですよ」

さつきからこの押し問答だった。

予選が終わってすぐに会場を出て昼飯を食おう、
　　という話になったのだがローラは自分の意見を言おうとしない。

「だって何でも食えるんだぜ」

ローブのポケットから一枚の紙を取り出す。

何でもこれがあれば、
　　どんなに食事を取ってもタダになるらしい。

もちろん大会期間限定。

「じゃああそこの屋台で済ませちゃうぞ？」

大通りの端にある屋台を指さす。

「シンジさんがそこでいいなら、
　　いいですよ」

ローラが屈強無く微笑む。

「・・・じゃあ行くか」

屋台に向けて歩き出す。

「いらっしやい」

「・・・いらっしやいました」

「注文は？」

「おすすめふたつで」

「支払いは？」

「これで」

「はいどうぞ」

「はいありがとう」

「ありがとうございます」

「ユアーウェルカム」

品物を受け取り屋台からでて思った。

なんと無機質な会話だっただろう。

それはたぶん今俺が持っているコレのせいだ。

まずホットドッグのようなパン、これはいい、これはいいんだ！

でも挟まっている具材、コレがおかしいんだ。

パンにでつかいミミズが挟まってやがる。しかもまだ生きてる模様。

屋台ののれんをくぐったときに目に入ったのが、でかいミミズだ。

さすがに固まったよ。そんでおすめがコレだ。

でもアレか？ 食ってみると案外いけるってやつか？ いや異世界に限ってそれはない。

「あれ？ ミミズサンド買ったんですか？」

「NO！」

それを聞けば最後、俺はコレが食べられなくなる。

あ、ちなみにこの世界も元の世界も、物の名前はほぼ同じだ
ってことがわかった。まあ同じような進化をしてもおかしくない
いな。

科学か魔法、それだけの違い。

「・・・俺はいいからさ、食べるか？」

「二つもですか？ シンジさんに悪いです」

「いや、言い方を間違えた。食べてくださいお願いしますマジ
無理なんです」

頭を下げて懇願。

一応食べ物らしいから捨てるわけにもあるまい。

「そこまで言うなら・・・食べますよ」

「マジすか！」

ミミズサンドをスイツと差し出す。

「それじゃあ、頂きます」

ローラがミミズサンドを口にくわえる。

ムギヤ

「ん？ 何か聞こえたような？」

「何も聞こえませんか？」

再び口へ。

ムギヤア

「それだあ！ー！ー！」

ローラの持つている食べかけのミニズサンドにM92Fの銃口を向ける。

「うわゝ、マジ半端ねえ生きてるよムギヤだって俺もうホットドッグ食べねえよ」

「新鮮でいいじゃないですか」

何事も無く一つ目のミニズサンドを食べ終える。
「では」

そのまま二本目へ。

ムギヤ、 ヌギヤ、 ムニヤガア。

「うぎゃああああ！」

「ごちそうさまでした、 じゃあシンジさんの昼食でも買いに行きますか？」

「・・・いゃい」

そして何も食べぬまま本戦を待つのだった。

閑話 昼飯騒動（後書き）

PVが十万を超えた記念です。

自分で言うのもなんですが、 けっこうおもしろいと思います。

シンジの口調が早まる場所がありますが仕様です。

次回はたぶん本編です。

・・・こういう話書くの、 おもしろいなあ。

第二十七章 昼飯を抜くことのつらさ

「あゝ、腹減った」

「だからシンジさんの分も買いに行きましょうって言ったのに」

昼飯騒動からおよそ一時間。

本戦1回戦の開始時刻だった。

しかも運の悪いことに1回戦の出場選手というのが俺たちだった。なので現在所在地は、予選が行われた会場だ。

「さつさと終わらせて、飯買いに行くか」

「がんばります！」

ホルダーからPPKを取り出すローラ。

見たところ相手の中に魔法使いがいるな。

杖持ってるし。

「まあ、銃があれば瞬殺は間違いなしなんだけど・・・保険を打つとか」

そのためのゴーグルだし。

「ローラちよつと耳貸して」

「ふえ？ どうぞ」

「ごによごによごによ。」

「・・・わかりました」

「よろしい」

軽い打ち合わせってやつだ。

「さ〜〜〜て、始まります！ 武道大会本戦が！ 1回戦はまぐれで勝ち上がったシン&ローラペアVS昨年準優勝ペアのライト&ボアペアです！ 私正直この試合を見るのが辛いです！ おそらく瞬殺となるでしょう！ しかし時間は待ってくれない！ それでは始めましょう、本戦1回戦・・・始め！」・・・好き勝手言うてくれるじゃねえか。

お望み通り、瞬殺にしてやるよ。

「ポーズ！」

そう叫ぶと、相手の選手は各々の武器を構えた。

・・・いや、相手に言っただんじやないよ。

もちろんローラだよ。

いや、そんなことはどうだっていい。

俺は手に持っていたそれを適当に放り投げる。

相手が対処するよりも先にそれは起動した。

瞬間、会場内が光によって埋め尽くされた。

目が眩むほどの光量。

ま、普通にされてられるのはゴーグルをつけた俺とローラくらいかな。

やがて光が引き、観客全員が会場中心に注目した。
なんてことは無い。

俺とローラが立っているだけだった。

く和也サイドく

「予選お疲れ様でした」

「まあ、ほとんどセリアさんだけだね・・・」

予選が終了してから、相手選手の視察をしようと観客席に座ることになった。

「で、どうですか？どっちが勝つと思います」

「順当に行けばカイト&ボアペアだと思うが・・・あの少年からは、並々ならない何かを感じる」

セリアさんが言っている少年とは、あのゴーグルをしてロープを羽織っている少年のことだろう。

「考え過ぎじゃないですか？」

「・・・そうだな」

ここからでは何も見えないが、女の子の方は何かを取り出した。
おそらく杖の類だろう。

「あんな小さな女の子が戦うの？ 危なくない？」
心配顔をするアリア。

「見た目がどうであれ関係ありません」

と、 厳しい評価を下すセリアさん。

「さ〜〜〜て、 始まります！ 武道大会本戦が！ 1回戦はまぐれで勝ち上がったシン＆ローラペアVS昨年準優勝ペアのカイト＆ボアペアです！ 私正直この試合を見るのが辛いです！ おそらく瞬殺となるでしょう！ しかし時間は待ってくれない！ それでは始めましょう、 本戦1回戦・・・始め！」 「始まつちゃった」

俺らの意に介せず、 試合が始まってしまった。

先に動いたのは先程言っていた少年だった。

右手を掲げて何かを叫んでいる。

しかしここからでは何も聞こえなかった。

そして何かをひょいっと投げた。

それだけだった。

それだけで変化が起きた。

会場内が光で包まれたのだ。

「きゃ」

「くっ」

「うわっ」

三者三様の驚き。

しかしその光は一瞬で引いた。

「なんだった？」

「あつ、 あれ！ 見てください！」

アリアが指さす方向には、 少年と少女がなんてこと無かったかのように突っ立っていた。

第二十七章 昼飯を抜くことのつらさ（後書き）

すいません！ 本当にすいません！

いいわけを言わせて頂けるのなら、 叫ばせて頂きます。

高校受験の馬鹿野郎――！

ふう、 少し落ち着きました。

しかし終わったのは私立受験。

作者の進学希望は公立高校。

・・・つまり作者の戦いは終わっていないと言うことです。

またまたしかし！ こんな状況でも更新は続けていきたいと思っています。

離れていつてしまった読者様。 戻ってきてください。

それでは長文失礼いたしました。

これからよろしく願います。

あ、 ちなみに私立の方は合格間違い無いです。

第二十八章 それぞれの思惑

「うひょー、飯だ飯だ」

「まあ、お菓子ですけどね」

本戦1回戦が終了して早30分。

今は、決勝戦の視察を兼ねて観客席に座っている。

ちなみにポップコーン（推定）を装備。

無料だったので、二ついただいた。

「それよりどっちが勝つと思いますか？」

ローラが会場の中心を指さす。

「んー、あんましょく見えないけど、たぶんあっちの方じゃないかな？」

俺の指さす方向には、俺と同じ歳くらいの少年と、少し年上であろう女性がいた。

この二人も俺たちと同じように、ゴーグルをつけていた。

おそらく俺が使った閃光手榴弾の対策だろう。

まあ相手は魔法を使った、と思い込んでるだろうけど。

「相手の方も、強そうではあるけど、女の人の方から半端じゃない殺気を感じる」

「私には全然わかりません」

と、ここでお決まりのアナウンスがかかった。

「さー！ 長らくお待ちいたしました！ これより本戦2回戦を始めます！

どちらが勝つか想像もつきません！ それでは・・・始め！」

先に動いたのは、予想通り女性だった。

しかし半端じゃないほどスピードが速い。

腰に下げたある剣を抜き、相手に向けて振るった。

それだけだった。

それだけの動作で、対戦相手の男達が地面に倒れた。

「えっ？ 何が起こったんですか？」

わけがわからずあたふたしているローラ。

「魔法だよ、 たぶん」

女の人が抜いた剣の先端から何かが伸びているのが見えた。

おそらく魔法で鞭みたいなのを創ったのだろう。

「私たち、 勝てますでしょうか？」

心配顔で尋ねてくるローラ。

「まあ多分な。 なんせこっちには銃があるし。 持つ者と持たざる者の違いってやつかな」

才能云々の話もあるが、 それを吹き飛ばしてしまうほど銃は理不尽なほどの強さを誇る。

「シンジさんがそう言うなら安心です」
「うむ」

しかし保険を打っておく必要はあるな。

閃光手榴弾は使えなさそうだし。

一瞬さえ隙があれば終わりなんだが・・・。

「・・・あつ」

いいこと思いついた。

この方法なら、 相手も目を閉じてくれるだろう。

「ローラ、 耳貸して」

「またですか？」

そう言いながらも、 耳を傾けてくれるローラ。

普通に話してもいいのだが、 それでは雰囲気が出ない。

「ごによごによ、 ってわけ。 出来るな？」

「出来ます！」

一も二もなく即答。

「うむ、 いい返事じゃ。 さればこれを渡そうではないか」

ぎゅっと拳を作り、 創造魔法を実行する。

なに、 今回創る物は簡単だよ。

よって創造するのには時間はかからなかった。

「ありがとうございます！ 早速つけてみますね」

そう言ってローラは、耳にある物をはめた。
ん？ 何かって？

そりゃあ、ただの耳栓だよ。

（和也サイド）

「カズヤさん、今回は全力で行かせて頂きます」

「ど、どうぞ」

予選本気じゃなかったのかよ、というツツコミは放棄。

こうなったのにもきちんと理由がある。

先程の1回戦のことだ。

光が引いたと思ったら、倒れている選手。

セリアさんは、『少々本気を出さねばいけなくなるかもしれない』と言った。

決勝戦からいきなり全力を出すと、体がついて行かなくなる可能性があるらしく、一つ前の試合で体をほぐすという算段らしい。そしてお決まりのアナウンスが流れる。

「さー！ 長らくお待たせいたしました！ これより本戦2回戦を始めます！

どちらが勝つのか想像もつきません！ それでは・・・始め！」

それからのセリアさんの動きは速かった。

剣を抜いたかと思うと、相手の選手が倒れだした。

「な」

「ふう、こんなものですかね」

つ、強すぎだろ。

「体の方もいい感じでほぐせました。おや？ どうかしましたか？」

「・・・いえ」

とりあえず、相手選手に手を合わせておいた。
次もこうなっちゃんだろうな、と思いながら、
会場を後にした。

第二十八章

それぞれの思惑（後書き）

更新遅かったですに、また短いです。
また暇があれば更新したいと思います。
それでは。

第二十九章

決勝戦

「さあー！ 始まります！ なにがって？ 武道大会の決勝戦ですよ！」

瞬間、会場に歓声が響き渡った。

それにしても司会者テンション高すぎるだろ。

「出場選手は、セリア&カズヤペア。どうやらこちらの方にチップが集中している模様です！」

おい、この試合賭が行われてるのかよ。

「対するシン&ローラペアにも、僅かながらチップが賭けられています」

僅かかよ。

「まあそんな御託はどうでもいいです！ それでは始めましょう！ 武道大会決勝戦！ 始め！ それからセリアペアがんばれ！」

最後に私情混ざってるぞ。

と、そんなことに気を取られている暇は無い。

前回同様にある物を地面に叩きつける。

相手ペアは閃光球の対策なのか黒いゴーグルを掛けているが、関係ない。

今回は光ではなく、音だ。

瞬間会場内に轟音が響き渡った。

おー、相手ペアも耳を押さえとる。

それにいきなり轟音が響くと、反射的に目をつぶっちゃうものなんだよな。

でもこっちは耳栓してるから、平気なんだけどね。

それじゃあ勝負を終わりにしよう。

打ち合わせ通りローラの肩を二回叩く。

耳栓を取ってもいいという合図だ。

「行きますー！」

ローラがPPKの狙いを男の方に向ける。
そして俺はM92Fの銃口を女の方へ。
これで、

「「フィニッシュ！」です！」

パンパンと響く銃声。

しかし倒れたのは、男の方だけだった。
そして女の方が口を開いた。

「やりますね。今度は音ですか。どうやらカズヤさんは倒れて
しまったようですが、私は立っています」

「みたいだな」

そう喋る女の目の前には、水で出来た障壁のようなものが展開
されている。

その中には、俺の放った弾丸が。

「これでしたか。あなたが使っている武器は」

女はそう言いながら、障壁の中で止まっている弾丸を手につ
た。

「ご名答。でもこれは、防げない。あなたがどんなに強くて
も」

「そうですか。なら先手必勝です！」

バツと女がこちらに駆けだしてきた。

しかも滅茶苦茶早い！

「ローラは下がれ！俺がやる！」

「は、はい！」

そんな短い会話をしているうちに、女がこちらの懐に入っ
てきた。

「っ、この！」

すぐさまM92Fの銃口を向けるが、

「どうやらその穴から何かを高速射出しているようですね」

そう言って銃口から逃げるように動き出した。

確かにいい動きだ。

拳銃相手と戦うときは、弾丸を避けようとするのではなく、銃口を避けるようにして動くのがベストだ。

しかし常人相手なら、狙いをつけるほうが早くあまり関係がないのだが、この世界では違うようだ。

「動き早すぎるだろ！」

こちらが狙いを定める前に次の位置へ移動するので、狙いが定められない！

「そこです！」

女が腰の剣を抜いて、こちらに振り抜いてきた。
しかも魔法付きだ。

前回の試合同様に鞭のような物が伸びている。

そしてそれは俺のM92Fを正確に弾いた。

「つて、やるなあんだ」

「これでも王国一強いと言われているので」

さて、次の一手は、どうする？

M1911を抜くか？

いや、これだけ強い相手だ。

そう会うことも出来ないだろう。

なら、

「ちよいと俺の鍛錬に付き合ってもらっぜ」

第二十九章

決勝戦（後書き）

すみません、本当にすみません。
更新めっちゃ遅れました。

でもおかげで受験は終わりました。第一志望合格です。
これで更新がもう少し早くできると思います。

でもこれだけ遅れたのにも、理由があります。

そう、他の作品を書いていたのです。しかも長編。

一応UPしますが、2011/02/26日の23時59分に削除します。

ぜひそちらもよろしくです！

第三十章 近接戦闘も大事

「セリアサイド」

「ちよいと俺の鍛錬に付き合ってもらっぜ」

目の前で立っている少年がそう口を開いた。
だがしかし、

「強がらなくても結構です。 体術は得意ではないのでしょうか？」
あれだけ強い得物を使っていたのですから、 体術には自信がないということでしょう。「棄権するなら今ですよ」

私がそう促すと、 少年は皮肉っぽく笑った

「ははっ。 あんたなら俺の力量を計れると思ってたんだが」
そう言いながら少年は、 腰から刃渡り十五？ほどのナイフを取り出した。

やれやれですね。

「子供がそんな物を使うと怪我をしますよ。 特にあなたのような細い体つきの人は」

「ぶ、 はははっ！ 忠告ありがとう。 でもこっちも生活がかかってるんでね」

・・・どうやらやらなければならないようです。

「わかりました」

私が剣を構えると、 少年もナイフを構えた。

「そんじゃ、 こっちからいくぜ！」

そして再び戦いが始まった。

「そんじゃ、 こっちからいくぜ！」

心配された女の人にナイフを向けるのは少々気が引けたが、 仕方無い。

リンゴ三万個がかかっているのだ。

「リ、ン、ゴッ！」

俺がそう掛け声をあげると、女性は剣をしっかりと構えた。ふっふっふ。

「いや、この掛け声に意味は無いんですけ」

ど、と言いつつ終わる前に女性は緊張体勢を解いた。

ただの会話だと思って油断したのだろう。

だが、甘い！

「ど！」

言いつつ終わるのと同時に、一気に駆けだした。

「なっ！」

おー、驚いてる。

でもそれも無理はない。

なんせ動いているスピードが半端じゃ無いからだ。

そしてそのスピードを、そのままナイフに乗せて振り下ろした。

「らああ！」

さあ、どう動く。

もしそのまま振り下ろされるようなことがあれば、幕引きだ。

そして結果は・・・。

「・・・えげつない攻撃ですね」

受け止められた。

細めの剣を使い片手でだ。

やっぱりこの人滅茶苦茶強いな。

「えげつないと言っても、俺は師から基本戦略は奇襲と教わったからどうしようもありません」

「そうですか、それは仕方無いですね！」

ガキンと音を立てながら女性の剣が振り払われる。

そしてお互い軽快なステップを取りながら距離を取った。

「しかしよほど良い師に恵まれたのでしょうか。動きだけは達人並みですね」

「確かに、師匠の動きは半端じゃ無かったですね！」

喋りながら手に持っていたナイフを投擲する。

頭を狙うのはシャレにならないので、右足の太ももを狙う！
なんて生やさしい考えは持たなかった。

「狙うなら頭だろ！」

ナイフはそのまま真っ直ぐと飛び女性の眉間を、通り越した。
女性が最小限の動きで避けたのだ。

そして当然ナイフは飛び続け、会場の壁にぶち当たった。

「……………」

両者沈黙。

俺が沈黙した理由は、案外あっさり避けられたことにあるんだが、何故この女性が沈黙しているんだ？

俺がそんな戦闘とは関係のないことを考えていると、女性がおもむろに口を開いた。

「……何をしているんですか？」

何言っちゃるんだこの人は？

「何と言われても、ナイフを投擲しただけだが、それも眉間を狙って」

「……そうですか？」

言い終えて女性は、会場の隅のナイフをちらりと盗み見た。

そしてまた静かに一言。

「……取りに行きますか？」

なんてこと、やさしさで涙がこぼれそうだが。

大方武器が無くなったと思っているのだろう。

この人騎士道精神とか大切にしてそうだな。

お互い武器が無いと戦わないとか思っちゃてるに違いない。

俺と親父なら、やっほい！ 相手は丸腰だあ！ と喜んだに違

いない。

でも心配してくれたところ悪いんだが、

「結構です、 ナイフはまだあるので」

嘘なんだけどね。

まあすぐに創り出せば、 嘘にはならないけどな。

腰の後ろに提げてあるナイフの鞘に両手を伸ばす。

そして、 ナイフを創造。

「ほらまだこんなに」

取り出したナイフをくるくると手のひらで遊ぶ。

女性はかなり驚いている。

まあ扱ってるナイフの数が桁違いだからな。

して十本。 ジャグリングのように宙を舞っている。

「そのジャグリングの技術、 凄いですね。 いや、 それ以前に

そのナイフどこから取り出したんですか？ あなたの職業はサーカ

スの団員ですか？ それとも手品師ですか？」

「ふむ、 それも考えておきましょう」

そういえばまだ職業も決めてなかった。

不本意だが、 もう少しこの世界に留まることになりそうだからな。

まあしばらく金には困らないだろうけどなあ！

とりあえず、 どす黒い欲望は抑えて、

「それじゃあ、 始めましょうか！」

第三十章

近接戦闘も大事（後書き）

・・・お久しぶりです。 作者です。

すっかりこっちの作品を書くのをサボってしまいました。

でももう一つの作品は完璧に仕上がったのでOK牧場です。

それじゃあ、 まあUPし始めたいと思います。

感想など待ってます。

第三十一章 終幕

どんなにたくさんのナイフを使ってジャグリングをしていると言っても、手にもっているナイフの数は最大二本だ。

ということで手に持ったナイフを片っ端から女性に向けて投げつける。

十本全部だ。

この数なら回避行動に専念せねばなるまい。

さすがにマズイと感じたのか、今度は剣を使って回避行動をとった。

「ふっ！」

一本、二本とかわし危なくなっただ場合は剣を。

結局傷一つ負わせられること無くすべて避けられてしまった。

「凄いな」

女性の足下に落ちているナイフを一瞥しながら言った。

「それで、降参ですか？」

・・・またそれかよ。

「もしかして、さっきから武器の心配をしてくれているのですか？」

「ええもちろんです。私は武器を持たぬ者とは戦えませんので」

ビンゴ！ やっぱりか。

「それなら大丈夫です。さっきも言いましたが武器はまだたくさんありますので」

再び両手を腰に回し、ナイフを二本創造する。

どうせ投擲したところで、簡単に避けられてしまうだろう。だから接近戦だ。

「・・・もう何も言いません」

「結構です！」

ナイフ二本を逆手で持ち、一直線に駆け出す。

途中に魔法で創られた鞭が飛んできたが、軽く避ける。

女性もそれで勝負がつくとは思っていなかったのか、そのまま第二撃が放たれた。

「そらっ！」

普通に全部避けきって、女性の元へたどり着いたのでこちらも一撃。

右手で殴り掛かるようにして右手を振るった。

何度も言うようだが、頭を狙ってた。

まあ結局頭を反らすだけで避けられてしまった。

「やはりいい動きで」

「戦闘中に喋るのは関心出来ないな！」

振り切った右手を引き戻す際に、ナイフを持ち替えまた不意打ち。

「うっ」

女性はそれをしゃがんで避けたが、これで終わりか。

「その体勢じゃあ、フィニッシュだ！」

こっちはまだ得物が残っている。

そして躊躇うことなく、左手のナイフを、振り、ぬ。

「危ないセリアさん！」

「なっ！」

俺がまさに左手のナイフを振り抜こうとした瞬間、気絶していると思っていたモヤシ青年の方向から、バスケットボールくらいの炎の塊が飛んできた。

「くそっ！」

そのまま女性の前にいると、ローストチキンになってしまつこと間違いなしなので、仕方無く離脱。

ちらりと青年の方へ目をやると、木刀を杖にして立ち上がろう

としているところだった。

くそ、モヤシ青年め。

「ローラ！ とどめを刺せ！」

「はいっ！」

忘れかけていたが、ローラは会場の隅の方に立っているし、拳銃も持っている。

なのでモヤシ青年一人気絶させるくらい造作も無いことだ。

そして響く銃声。

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

・・・おい、まだ撃ってるぞ。

「ロ、ローラもういいって」

俺がそう促すと、ようやく銃声がやんだ。

マガジンの弾を無限にしたのが間違いだったのか？

まあゴム弾だしたぶん・・・生きてるだろ。

「はい！ やりました！ 確実に気絶させることが出来ました！」

ニコニコ満面の笑みを浮かべながらローラが口を開いた。

「・・・ああ、よくやったからあの青年の見張りをしてくれ」

はいっ！ と元気な返事を響かせながら、とてとてと青年の方

へ駆けていった。

ふう、これであの青年は確実に脱落だな。

目が覚めるようなことがあっても、そのまま気絶した振りをす

ることをお勧めする。

もしピクリとでも動けば、ローラの至近距離からの一斉掃射が

お見舞いされるだろう。

「それじゃあ邪魔が入りましたが、始めますか」

「・・・そうですね」

結構怒ってるなあ。

無抵抗の味方が、ああもバカス力撃たれたら怒るのは当然だろ

う。

まあこつちも早めにケリをつけよう。

ポップコーンもどき食っただけなので腹が減ってきた。

というのは言い訳で、 ナイフだけではきついと思ったからだ。

スコープオンを創った理由は。

今度は包み隠さず、 スコーピオンの創造シーンは衆目に晒した。と言つても見えたのはセリアさん、 とかいう女性だけだろうが。

「なっ！！！」

やはり凄く驚いてる。

でも、 もう終わるけどな。

「それじゃあ、 g o t o h e a v e n !」

第三十一章 終幕（後書き）

はい、またUPです。今回は早かったですね。
これからもこんな感じで行きたいと思います。
では。

第三十二章 戦いの後で

「ここいかがでしょうか？」

「うん、 安いから良いんじゃないか。 なあローラ」

「私はどこでも良いですよ」

そんな会話が繰り返されたのは、 首都の町外れにある寂れた家屋の真ん前だ。

現在俺とローラは寢床の売買の交渉をしている。

ずっと宿屋を借りるよりも安く済むと考えたからだ。

「そんじゃあ、 ここでお願いします」

「はいっ！ 承りました！」

そう言って売り手の男の人がバックをがさごと漁り出す。

「それではお支払いの方なのですが、 何回払いで？」

男が取り出したのは分割払い時に書かなくてはならない書類のよう
うだ。

確かこの家屋の値段は、

「金貨十五枚です。 どうしますかシンジさん？」

・・・ローラとは話さずとも少しいの意思疎通は出来るよう
になっているな。

まあ悪いことじゃないからいいんだけど。

「金貨十五枚なら、 現金一括払いで良いんじゃないか？」

なんつたってこっちには、 賞金の金貨三十枚があるからな。

「わかりました。 ではそうしますね」

そう言ってローラは麻布でできた袋から、 金貨十五枚取り出し
た。

「なっ」

男の人は口をあんぐり開けて驚いている。
まあ当然だろうけどな。

「し、 失礼ですが、 こちらは本物で？」

「・・・そうですよ」

男はローラから金貨を受け取ると、なにやら手のひらで重さを量ったり、金貨同士を打ち合わせて音を確かめている。

そして三分位して、

「た、確かに本物です。売買は終了いたしましたので、わ、私はここで」

そう言つて男はそそくさと立ち去ってしまった。

「ふう、んじやとりあえず中に入るか」

「そうですね」

俺たちが買った家の大きさは、元いた世界で言う普通の家屋と同じくらいの大きさだ。しかしこの世界の一般家屋には、二階が無いことが多いらしい。

二階部分を作るのには、多大な時間と、繊細な技術が必要になるので金額がものすごく高くなつてしまつらしいからだ。

そして今買った家も例外ではない。

「家具が残つてつて助かりましたね」

「まあな、全部買いそろえるのは面倒くさいしな」

前の住人が家具を残してくれていたので、家具を買う必要は無くなつたわけだ。

「それにしても、本当に優勝しちゃいましたね」

「何言つてるんだ。ローラが勝ちたいつて言つたからだろ？」

「それもそうですが、あの人は大丈夫でしょうか？」

あの人達、決勝戦で戦つた奴ら・・・か。

「女の人、凄かったですよね」

「まあ、な」

相棒の青年はたいしたことは無かったが、女性の方は凄かった。何発受けたんでしょね」

「少なくとも、30発くらい」

そう、撃つても撃つても女性には倒れず、こちらにじりじりと寄つてきたのだ。

そして俺の前に立つと、『こちらの、負けです』と呟いてから
やっと倒れてくれた。

すぐに救護班の人達が二人を運んでいってくれたから、大丈夫
だろう。

「まあ大会に出場したんだから、覚悟くらいはできてるだろ」

「そうですよね、うんきつとそうです！」

そう言ってローラはお皿などの家具を物色し始めた。

「うん、お皿はみんな使えるみたいです」

「なら良かった。料理とかは俺が作るうか？」

「シ、シンジさんの手作りですか？ 食べてみたいです！」

「はっはっは、俺の手作りは美味いぞ」

ここですぐに食材を買ってきて、調理を始めたところだが。

「ちよつと埃っぽいなあ」

台所らしき所はあるが、何か埃っぽい。

しばらく手入れされていなかったのだから当然と言えば当然なの
だが。

「こんなところで料理を作ったら、埃被りまくっちゃうなあ」

「それなら大丈夫です！ 私が掃除しておきます！ シンジさんは
食材を買いに行ってください！」

「お、おお」

ローラがやたら急かすので、断る暇も無かった。

まあ断らないんだけどね。

「いってらっしゃいーです」

「おう」

そして買ったばかりの家を後にした。

第三十二章 戦いの後で（後書き）

特に書くことはありませんねえ。

と言っわけでこのへんで失礼したいと思います。

では、感想など待ってます。

第三十三章

回想

「ただいまー」

「お帰りなさい」

新婚ホヤホヤの夫婦のように円滑な挨拶を交わす。

「材料買ってきたぞ」

パツと見、どれもわけわからない品々だったが、とりあえず見た目が良さそうな食材を買ってきた。

ローラがポケットに金貨を入れておいてくれたみたいなので、支払いには困らなかった。

「何買ってきたんですか？」

「わかんね」

実際何を買ったのかわからないので仕方がない。

まあたぶん大丈夫だろう。

「台所きれいになりましたよ」

「サックス」

さっそく台所の台に買ってきた物をぶちまける。

「たくさん買ってきましたねー」

「そっちこそ、だいぶきれいに掃除したなあ」

元の世界で言うリビングの床には、ゴミやら本やらが積み上げられている。

あれは、絵本かな。

「それって絵本か？」

「？　そうですよ。　銀太郎です
・・・・・・。」

「もしかして読んだことないですか？」

「ああ。　でも似たような物語は知っているような気がする。　どんな内容なんだ？」

ローラは少し考える素振りを見せて、説明を始めてくれた。

「魔物達と稽古をしたりして、最終的には勇者になるお話です」
「へえ」

やっぱりな。この世界でも元いた世界でも同じような文化の進化を遂げている。

まあ若干内容が違うけど。

「銀太郎を読んだことがないなんて、それじゃあ幼少時代は何をしてすごしていたんですか？」

「一応読書かな？あの頃はまだ身体ができてなかったから、そんなに厳しい訓練はしなかったからなあ」

しかし今考えてみると、それが幸いなのか、不幸だったのかはわからない。

だって俺が読んでいたのは、ちゃらんぼらんな絵本ではなかったからだ。

（NOサイド）

「賢人！152冊目の絵本が作れたぞ！」

「やったあ！新しい絵本だあ！」

そんな歓喜の声が響くのは、どこにでもあるような一軒家。

そしてその会話を繰り返しているのはまた、どこにでもいそうな父と子だ。

しかし決定的に普通と違う点もあった。

それは、絵本の内容だ。

「うわー！このバレットM82A1っていう銃かっこいい！」

「はっはっは、そうだろう？それはお父さんも仕事で使うことがあるぞ」

少年が指さしたのはアンチ・マテリアル・ライフル、つまり対物ライフル。

二？ほど離れた人間も切断することができる威力をもつ物も存在

する。

幼稚園児の少年には似つかわしくない内容の本だ。

「よく見ておくんだぞ。いつか必ず役に立つからな」

父親が指しているのはM82A1外面ではなく、M82A1の設計図だ。

それは事細かに記されている物だった。

「わかった！ 僕覚えるね！」

そう言って少年はM82A1の設計図と睨めっこを始めた。

その目は父の言うことをすべて信じ切っている目だ。

だが普通に生活していれば、そんなもの絶対に役に立つ機会はない。

つまり、この少年は半分騙されている。

しかし、半分は騙されていないかもしれない。

「よしと、それじゃあお父さんは仕事に行ってくるかな」

そう言って父親が担いだのは、普通のゴルフバックだ。

しかし中に詰まっているのはゴルフボールを打つための道具が入っているわけではない。

中には、L96A1、イギリス軍の制式採用狙撃銃、つまり人を撃つための道具が入っている。

「がんばってねお父さん！」

「はっはっは、心配はいらないぞ」

そう言い残して父親は家を後にする。

これが少年の普通だった。

「どうしたんですか？ ぼーっとしてるみたいですけど」

「ん？ ああ、父の日にあげた肩叩き券より価値のない回想をしてただけだって」

「よくわかりません」

まあな、 たぶん日本人特有の文化だろうし。

もうあんな愚行は犯さないだろうな。

「それよりできたぞ」

我ながら良いできた。 未知の食材で作ったとは思えないな。

「何を作ったんですか？」

「鶏肉に限りなく近い何かと野菜をあえたサラダと、 地中海風シエフの気まぐれパスタだ」

後半の方はなぜか言ってみただけなので気にしないでもらえるとうれしい。

「そんじゃあ早速頂くか」

「はいっ！」

そして両手を合わせて、

「いただきます！」

第三十三章 回想（後書き）

ライフルはレミントンのM700とL96A1で迷ったんですが、デザインに惹かれたので後者にしました。まあ本文にはあまり関わってこないと思います。 でわ

「んで、 今後はどう動くか？」

「うゝん」

俺たちはテーブルで何かのお茶を飲みながら、 今後の方針について話し合っていた。

「家は買っちゃったわけだし、 しばらくはここに住むとしても、
ねえ」

家は買ったが、 いずれ金も尽きる。

なので何かしらの行動を起こさなければならない。

「それじゃあ、 ここで何かのお店を開くっていうのはどうでしょうか？」

「お店か」

まあそれも悪くない案だとは思う。

流通経済については母さんにみっちり知識を詰め込まれたので、
それなりに自身はある。

それにお店を開けばたくさんの人がやってくるからな。
いろいろな情報が手に入るかも知れないし。

「そんじゃあ、 お店を開くか！」

「はいっ！」

まだ金貨が余っているので、 それを元手にしよう。

よし、 具体的な行動案は決まったな。

「いきなりなんだけどさ、 ローラはこの世界、 いや、 この地域ではどんな商売が儲けられそうか知ってる？」

「うゝん、 やっぱり討伐屋ですかね？」

何だその物騒なワードは。

その三単語だけで何をする職業かわかってしまったじゃないか。

「一応確認するけど、 それってけっこう危ない仕事だよな」

「そうですけど、 高収入ですし、 なによりシンジさんは強い」

で大丈夫だと思います！」

「あのなあ」

確かに俺一人なら何とかなるかもしれないが、ローラも一緒だからなあ。

「さすがにローラにはきついだろ」

「きつくはないです！ クーちゃんがいれば平気です！」

ちなみにこのクーちゃんとは、PPKのことを表す。

メインカラーが黒だからクーちゃんらしい。

「でもなあ」

なんだかこうやって娘のように心配をすると、ローラは意固地になって不機嫌になる習性がある。

大会の時だってそうだった。

「でもありません！ シンジさんがやらないなら、私一人でやります！ シンジさんは・・・隅の方で見守っていてください！」

おおう、一応俺もついてくパターンだね。

しかしこのまま話していても埒があかないなあ、ここは一つ。

「わかったよ、じゃあ何でもやるってことにしよう。それなら討伐の仕事もできるし、商売もできからな」

うん、これはなかなか良い案だ。

「・・・わかりました。何でもやるってことでいいです」

「ヒヤッホウ！ それじゃあ決定な！」

適当にテンションを上げたところで、壁掛け時計が鳴った。

見ればローラは欠伸をしていた。

俺の鍛え抜かれた体内時計調べによると、元の世界で言う午後十時くらいだな。

今の時代小学生だって起きてるぞ。

ま、でも大会のこととかもあって疲れたんだろう。

「んじゃ寝るか」

「はい・・・」

ベットは二つあったので非常に助かった。

でも何かもさもさしてるから、明日干さなきゃな。

「そんじゃあおやすみ」

「くう」

そして俺も、未来のビジョンを想像しながら眠りについた。

「ペンキと大きな筆、こんなもんでイイだろ」

PM7:00（もちろん元の世界で）、俺は街の商店街を彷徨いていた。

ローラは、寝ている。

「やっぱり看板は作らなきゃダメだよな」

そう、俺は看板に必要な物を買いに來ていた。

大きな木の板は家の裏手に落ちていたので、買う必要は無かった。

「ちょちダツシュかな」

左手にペンキ、右手で筆を握って、家に向かい駆けていった。

「なんて書こうかな？」

やっぱり『雑草抜きから人殺しまで何でもやります！』かな？

よし、決定だ。

「さて、って」

ありゃ？日本語で書いてもわからないんじゃないか？

「仕方無い、ローラを起こすか」

まだ字を書くことはできないので、仕方ない。

「ローラ、起きてくれ！」

「・・・にゃ」

まるつきり猫の鳴き声をあげて、ローラがもそもそと起き上がった。

「にゃんですか？」

「・・・お店の看板書いてくれ」

「・・・わかりました」

寝ぼけているので滅茶苦茶不安だが、まあいいか。

俺が固唾を？んで見守る中、ローラが筆を動かした。

そして、

「できました」

「おお」

・・・結局読めん。

「なあローラ、なんて書いたん？」

「・・・ぐう」

「ほう、ぐうとな」

・・・その割には何か長い文章のような。

「つて、いやいや」

それはきついだろう。

「なあ、書き直してくれないか？ その名前はちょっときついぞ」

なあ、と再び声を掛けるが、返事が無い。

「もしかしてまた寝たのか？」

・・・どうやらそうみたいだな。

まあ、店の名前は起きてくれた後聞けばいいだろ。

とりあえずできあがった看板を、家の扉の上に打ち付ける。

それなりに様になってるな。

とりあえず暇になったし、訓練でもするか。

そう思い、家の外へ出た。

く NOサイドく

パンツパンツと乾いた銃声が新居の裏手にある庭に木霊した。

M92FとM1911から放たれた弾丸は、真治の創り出した土人形にヒットした。

どれも人間でいう急所にだ。

しかしそれを喜ばうとせず、 淡々と次弾を放っていく。

真治と真治の父曰く、 拳銃を上手く扱いたいなら毎日撃ち続けることだ、 らしい。

さて、 ここで視点を変えると、 打ち付けてある看板の下でぐうぐうを寝息を立てているローラが目視できる。

そして、 看板に書いてある文字についてだが、 日本語に訳すと『シンジとローラの幸せのお店』だ。

意味はよく理解出来ないし、 書いた本人も寝ぼけていたので半分ジョークみたいな感じで書いていたのだろう。

しかし、 どんなに恥ずかしい店名であっても、 おそらく直すことは無い。

理由としてローラの身長では届かないという点である。

それならシンジに看板を取ってもらえばいい、 と考えるかもしれないが、 それは苦肉の策である。

看板を取って欲しいと頼むと、 何か問題でもあったのか？ と疑われいろいろなことを聞かれるだろう。

すると当然店の名前がシンジに明かされる。

これらの理由により、 看板のことについては今後触れることはないだろう。

シンジはもう看板のことは忘れていようなので。

看板のお話はここでおしまい。

さて、 これからどうなるかな？

第三十四章

店名（後書き）

うつす、 果樹園です。

なんだかNOサイドの内容が天の声みたいになってますね。

まあ書きやすかったので仕方無いです。

それでわ。

じゃない、 もしかしたらのもしかしたらで新作があがるかもしれ
ません。

おやつさん（シンジの父のこと）と似たようなキャラが出てきます。
それでは本当に、 でわ。

第三十五章

お久しぶり

「誰も来ないなー」

「そうですねー」

「はあ」

店を開けてから早三日。

しかしお客は一人も来ることは無かった。

「なんでお客さんが来ないんだ？」

「・・・さあ。わかりません」

ローラは入り口の上の辺りを見つめてからそう答えた。

「？ まあいいか」

客が来ない理由なんてローラに聞いたってわかるわけ無いし。

「でも暇だなあ」

とにかく暇なのでテーブルに突っ伏す。

するとローラがぴょんと椅子から跳ね上がる。

「ど、 どうした？」

「ノアおばさん！」

「は？」

ノアおばさん？ 人の名前か？

「なあ、 ノアおばさんって誰だ？」

「えっ！ シンジさん忘れちゃったんですか？ 食堂のおばさんです！」

「食堂・・・あつ、 思い出した」

最初に行った集落にいたおばさんか。

そういえば最後に自己紹介してたな。

「まあノアおばさんってのは思い出した。 それでなぜ今そのワードが出てきたんだ？」

「そっいえばシンジさんはお会計の時にはもう外に出てましたね。」

お会計の時にノアおばさんと落ち着いたら挨拶に行くって約束したんです」

「そうか。それって俺もついていった方がいいか？」

「当然です！」

まあそつだよな。

道中危険なことが無いとも限らないし。

「よし、それじゃあ三十分後に出発！」

どうせ誰も来ないだろうから店番はいらないだろう。

「イエーイ！ それじゃあ外出用の服に着替えてきます！」

そう言つてローラは仮自室に駆け込んでいった。

「まあ女の子だから身だしなみには気を遣うのかな」

ついでだが俺の服装は、ローラに買ってきてもらった目立たない色の動きやすいシャツと長ズボンに、長い丈のコートを羽織っている。

そんなに暑くないので問題は無し。

「さて、外でちよいと遊んでるか」

コートを少しめくり拳銃を取り出して、家の外に出た。

「準備できました！」

「おお」

一旦土人形に狙いを定めるのをやめ、顔をローラに向ける。

そして服装だが、

「普段と変わってないんじゃないか？」

ローラの服装は、いつもと（と言っても首都に到着費した日辺りからだが）さほど変わらない明るい色主体の半袖シャツと、膝の上辺りまでくらいまでのスカートをはいている。

「何言ってるんですか！ 全然違います！」

「そつかそつかそつだったな。じゃあ行くか」

『じゃあどこが違うか言ってみてください!』と叫んでいたが無視して歩き続けた。

だってどこが変わったかわかんないんだから仕方無い。

「そして到着」

「ですね」

結局ここまで来るのに二時間ほどかかってしまった。

首都の方で馬のレンタルがあったが、ローラの一存により却下なのでてくてくと歩いてきたわけだ。

「それにしても活気があるなあ」

俺たちが最初に訪ねたときよりも随分人が多かった。

「そんじゃあまず食堂だな」

「はいっ」

ローラが少し小走りで前を進む。

そのペースに合わせて歩くと、すぐに食堂に着くことができた。

「こんにちわっ!」

そして食堂の扉を勢いよくローラが開け放つ。

「いらっしやい!」

勢いよく声を掛けてくれたのは、ノアおばさんだった。

「おやあんた達かい、久しぶりだね」

「ノアおばさんこそ元気そうでよかったです」

「どうもご無沙汰です」

三者三様の意を、しかし確実に歓迎の意を表した会話だった。

「それでどうするんだい? ご飯を食べてくのかい?」

「うーん、とりあえず遠慮しておきます」

今の時刻は元の世界で言う午後四時。

こっちの世界でも時間軸はだいたいあってるので、今は昼飯時でもなく夕食時でも無いので断ることにした。

「そうかい。 ならお茶でも淹れようかね」

「あつ、 お願いします」

そう言うなりおばさんはいつもの如く厨房に駆けていった。
そしてそれから3分ほど経つと、 お店の扉が開いた。

「ふう、 公務もやつぱり疲れるな」

「あつ！」

声を上げたのは、 俺。

そこに立っていたのは、

「リーダー！ 久しぶりだな！」

「おお、 シンではないか！ 久しぶりだな！」

背が高く、 がっちりした体格、 うんリーダーだね。

俺は歩み寄って握手をしたが、 ここである事に気付いた。

「公務つて、 どういうこと？」

確かにリーダーはここに入ってくるときに公務で疲れたってばや
いてたよな？

「ああそのことが。 私はこの村の村長になったのだ」

「えっ！」

本当に村長になっちゃったのか。

まあでもリーダーにはカリスマ性がありそうだから大丈夫だろう。
一時期ごろつきもどきの頭をしてたしな。

悪の頭領でもリーダーシップが取れなきゃ誰も着いてこないもん
だ。

「そうかそうか。 やっぱリーダーはやる男だと思ったよ、 い
やマジで」

「まあな」

「「はっはっは」」

そして男同士二人で笑いあった。

「なんでこの二人笑いあってるんですか？」

「さあ、 私にもわからないなあ」

声のした方向に振り向くと、 ローラとノアおばさんがお茶を啜

つてるのが見えた。

「・・・俺たちもお茶飲むか」

「・・・そうだな」

すこし恥ずかしながら俺とリーダーは席に着いた。

第三十五章

お久しぶり（後書き）

はいお久しぶりの作者です。

この章でやるお話が、この作品を思いついたときから暖めていたお話です。

それではがんばって書きます。

第三十六章 武具選び

「カズヤサイド」

「……はあ」

「二人とも溜息なんてつかないでください。こっちの気も滅入ってきます！」

「そんなこと言われなくても」

大会が終わった翌日、俺とセリアさんはずっとこんな調子だった。

特にセリアさんの落ち込みようは半端じゃ無かった。

「私が今までやってきたことは何だったのでしょうか」

「ああ、引きこもりたい」

「もうっ！ 訓練です！ 訓練をします！」

アリアは俺とセリアさんの腕を掴みずんと歩いて行く方向からして訓練場に向かっているのだろう。

まあ、いつまでも落ち込んでるわけにはいかないか。

「わかりました。やりますよ」

そう言った瞬間、アリアの顔が輝いた。

「あの試合で負けたのは武具の差です！ だから自分に合った武具を探すんです！」

俺とセリアさんが剣術の訓練をしている最中にアリアが言った。

俺もセリアさんも動きを止め、アリアの話に聞き入った。

「セリアの方は大丈夫かもしれませんが、カズヤさんの方は別です」

「そうかもしれませんがね」

セリアさんは腕組みをしながらうんうん頷いている。
まあ俺が使ってるのって適当に選んだ木刀だからな。

「それじゃあ武器庫の方へ行きましょう！」

行くとも言っていないがアリアは構わず歩き出した。
でも武具をしっかりと選ぶことは、大切だと思う。
とりあえずついて行った方がいいな。

セリアさんも同意見らしく大人しくアリアについて行った。

「ところで俺、どうやってやられたんですか？」

移動中暇ができたのでそんなことを聞いてみた。

「それが、よくわからないんです」

歯切れが悪そうに答えたのはセリアさんだった。

「セリアさんにもわからなかったんですか？」

以外だ。セリアさんにもわからなかったなんて。

「ええ。おそらく魔法ではなく、見たことも無い武器を使っていた。
でも似たような武器は知っているのですが」

「どんな武器ですか？」

離れた場所から敵を的確に攻撃する武器。

俺の知ってる限りでは、

「銃です」

「・・・やっぱりか」

どうやらこの世界でも銃という兵器は存在するみたいだ。
やっぱり同じような進化をしてるな。

「こっちの世界の銃の性能はどんな感じなんですか？」

「こっちの世界、と言うとカズヤさんのいた世界にもあったんですね」

「まあ、ありました」

実物は見たこと無いけど。

「話が逸れました。この世界の銃の性能でしたね。試作品ができたのはつい最近で、まだ剣や弓矢の方が実用的です」

「へえ」

元いた世界では銃は何百年も前から使われてたんだっけ？

無駄な所だけ発達してるな。

「着きましたよ」

俺とセリアさんが話をしていると、いつの間にか武器庫に着いていた。

セリアさんは一番に武器庫に入ると、中から一本の棒のような物を持ってきた。

アリアは一人で武器庫の中を物色し始めていた。

「これがその試作品です」

「うーん」

セリアさんに渡されたのは、大部分が木でできた長さ一メートルくらいの棒だった。

「これで弾を射出できるんですか？」

「一応できるとの報告は来ていますが、精密度という点では、問題ありですけどね」

「そうですか」

まあ見た目からして性能悪そうだしな。

無駄に重いし。

「それにしても、何か見たことあるような気がするんだよな」

元いた世界で真治が得意げに語ってたような・・・。

「あつ、思い出した。九九式小銃だ」

「きゆうきゆう、何ですか？」

「この銃が元いた世界の九九式小銃っていう銃に似てるんです」
前に真治の家に遊びに行ったときに見せてもらったんだ。

『親父の部屋からかっぱらってきた。長く鑑賞できても十分が限界だ。それ以上伸ばすとばれて殺されるかもしれん』とか言うて興奮してたっけ。

そういえばやけにリアルなモデルガンだったよな。
傷とかも付いてたしずっしり重さもあつたし。

最近のモデルガンって全部そんなもんなのかな？

「九九式小銃ですか。性能はどうだったのですか？」

「確かボルトアクション式の銃だそうだから、連射性能はそこま
で凄くなかった、らしいです。でも威力と射程と精度はなかな
かだったらしいですよ」

全部真治の受け売りだけだね。

あいつ銃の話をするときだけは目を輝かせてたなあ。

『今ここで九九式の設計図書いてやるよ！』とかも言ってたな。
さすがに設計図をまるまる覚えるなんてガンオタでも無理だろ。
と言うより設計図なんて手に入られるもんなのか？

まあ、いい思い出だったな。

「すいません。この銃お借りしてもいいですか？」

「？ それを使うのならまだ弓矢の鍛錬をした方がいいと思われま
すが」

「いいんです」

これを持つてれば真治の嬉しそうな顔を忘れることはなくなる、
と思ったが口に出すのは恥ずかしいので言わないでおこう。

「そこまで言うなら、いいですよ持って行ってください」

「ありがとうございます」

さて、これからもがんばるか。

第三十六章

武具選び（後書き）

こんにちは作者です。

今回は久しぶりに和也が出てきました。

でもこっちの話作るのが難しい。

次回からは真治のお話に戻ります。

感想など待ってます。

第三十七章

お仕事

「で、リーダーの最近はどうよ？」

「こちらは、その・・・まあまあだな」

「何だよ。美味しいお茶飲んでるつてのに歯切れが悪いな」

あの妙なテンションも一旦落ち着き、二人でお茶を啜っているところだった。

ローラとノアおばさんは二人して厨房にこもり始めた。

なんでも料理を教えてもらうためらしい。

まあ女の子は拳銃なんて握ってないで、ナイフ（料理用のに限る）を握っている方がいいだろう。

「そこでその歯切れの悪さの原因はなんだ？ 俺とリーダーの中な

んだから、できることならしてやるぜ？」

「むう、そうか。なら話そうではないか」

「どんとこい」

リーダーはこの世界で一番にできた一番の話し相手（男に限る）だから相当な親近感が湧いていた。

リーダーはリーダーで、あの一件から俺のことを信用してくれているのだろう。

「その、魔物が、な」

「魔物ねえ」

あの犬ッコロみたいなやつのことか。

「最近魔物の発生率が非常に高くなっているのだ。有志で自警団を募っているのだが、結果は芳しくない」

「ふうん」

あの犬ッコロ一匹倒すだけでも苦労するってローラが言ってたしな。

「それで、な」

「魔物退治を手伝ってほしいと」

「・・・うむ」

さて、どうするか。

手伝ってもいいんだけどな。

でも魔物退治ってなったら、相当な時間が掛かるだろう。

「そうなる」と店の方がな」

「店、とは何のことだ？」

「あ、そうだ。まだリーダーには言っていなかったっけ」

リーダーの村長就任が衝撃的すぎて話すのを忘れていた。

「俺たち首都の方でお店を始めたんだ。何でも屋で言葉の通り依頼なら何でもやる」

「おお、それはめでたいな」

「まあな。でもまだ一人も客が来ないけど」

寂しいような寂しくないような。

いずれ金も尽きちゃうだろうから、依頼は来た方がいいに越したことはないけど。

俺が将来のビジョンを想像していると、不意にリーダーが言った。

「それではこの魔物退治をシンの店に依頼することはできないだろうか？」

「あーその発想は無かったわ」

依頼かあ、それならいいかもしれないな。

「ちよつと待ってる。ローラの意見を聞いてくる」

俺一人のお店じゃないから、俺の一存で決定させるのは間違いだろう。

リーダーもその辺はわかっていたようで「頼んだぞ」と言って目をつむった。

さて、ローラはなんて言うかな？

「おいローラ。ちょっと話があるんだけど」

要件はもちろんリーダーの依頼のこと。

『ふえ？ なんですか？』と柔らかい声が返ってくると思っていたが、返って来たのは怒声だった

「シンジさんはしばらく引っ込んでいてください！ 私は今忙しいんです！」

「わ、悪かったな」

ローラはこっちの方を一切見ずに、大きなフライパンのようなもので何かを和えていた。

「悪いねえシンジ。ローラは今料理の修業中だよ」

「はあ。修行ですか」

修業って、そんなに本格的にやってたのか。

「で、その修業とやらはいつ終わるんですか？」

まあどうせ夜ぐらいまで続くだろうから、夕食の時に聞けばいいだろう。

という考えはあまりにも早計だった。

「そうさね、早く終わって一週間てとこだね」

「ぶっ！ い、一週間？」

今日の夜には終わると思ってたが、予想の遙か上をいったな。

まあ・・・好都合か。

「それじゃあローラに一週間自由行動って伝えといてください。

一週間経ったらこの食堂に集合で。ここには毎日ご飯を食べに来ることにしますんでよろしく願います」

「わかった。ローラは一週間私の家に泊めるよ」

「ありがとうございます」

まあノアおばさんの所に泊まるのなら安心できるな。

「それじゃあ俺これから予定があるので、これで」

「そうかい。それじゃあご飯時に待ってるよ」

そして俺だけで厨房を出た。

「それじゃあこっちの兵力を教えてください」
「うむ」

ノアおばさんに言伝をしてから俺とリーダーはすぐに食堂を出た。
そして今は自警団の人達がいるらしい場所へ向かっている。

「男が十人ほど。それから女が一人」

・・・人数少なすぎるだろ。

愛村心が足りないな。

「ふむ。それで兵士一人一人の力量は？」

「それは、見て判断してくれ」

バツが悪そうに言うリーダー。

こりゃ、期待しない方がいいか。

と俺が不安を募らせていると、目的地に着いた。

「おお」

たどり着いたのは元の世界にあった校庭を少し小さくしたような
広場だった。

「皆はあの宿舎にいる」

リーダーが指さす方向にはこれまた元の世界でいうアパートらし
きものが鎮座していた。

「じゃあとりあえず全員集合させてくれないか？」

「うむ」

リーダーはそう言って宿舎の方へ駆けていった。

「はあ。思ったより大変なことになりそうだな」

溜息をついてリーダーが帰ってくるのを待つ俺だった。

「シン。これで全員そろったぞ」

「おう。ありがとな」

先ほどまで閑散としていた広場には、いつの間にか何人かの人が集まっていた。

「みんな聞いてくれ。臨時でこの自警団に入団してくれることになったシンだ。皆よろしくしてやってくれ」

「・・・・・・」

みんな無反応。

そんなの寂しすぎないか？

リーダーもその空気を悟ったのか話の進行をしてくれた。

「この男は私の、戦友でな。腕はまさに本物だ」

「いやー照れるなー」

・・・・・・せつかく俺も明るめのノリに合わせたってのにまた無反応かよ。

「み、皆、何か質問はあるか？」

リーダーがおずおずと聞いたが、またもや無反応だった。

これは・・・暗に帰れと言っているのか？

俺が真面目にそう考え始めていると、リーダーが俺に話を振った。

「皆の方から質問は無いようだから、シンから何かあるか？」

「えー、ここで俺に振るのかよ」

正直困った。

昔から人前に出るの避けてたからな。

それに話題もないし。

話すことなんて無いよ、と言おうとしたがふとみんなが腰に提げていた剣が目止まった。

みんな剣を提げているが、その種類はばらばらだった。

しかし皆一様に、

「ひでえな」

「ん？ 今何か言ったか？」

「ああ言ったね」

口に出して言ってしまったようだが問題あるまい。

「武器が酷すぎる。　そのお前」

「お、俺か？」

俺が指名したのは身長160センチくらいの小柄な男だ。

「そうお前だ。　そして問題なのはお前の得物だ。　なぜその小ぶりの身体でグレートソードを使う？　体格負けだろ」

今指摘した奴とは違う奴らも各々勝手な武器を持っていた。

斧、弓、レイピア、体型に合っている武器もあれば、見当違いな武器もあった。

「リーダー。　こいつら實力以前の問題だって。　武器選びからなつてない。　もっとしっかりした武器を選ばなきゃ」

「そうなのかもしれないが、その、我々には余裕が無くてな」
「なーる」

金が無いから満足な武器が買えないと。

仕方無い。　ここは俺が一肌脱いでやるか。

その方が仕事も早く終わるだろうしな。

「リーダー。　今なら俺が科学の粋を集めた最新鋭の武器を、　そうだな、　今日の夕食を奢ってくれたら提供してやる。　どうだ？」

もちろん売りつけようとしているのは、銃。

魔法で創るのだから金は一切掛からないから問題は無い。

まあ心配するとすれば、　この世界に銃が流出することだが、それも問題無いと思う。

毎日数を数えれば流出問題はOKだし、　任務が終了したら消せばいいだけの話だ。

たぶん依頼が終了する頃にはこの辺一帯には魔物はいなくなっているだろう。

「どうするリーダー？」

俺が再びそう促すと、　リーダーは。

「交渉成立だな」

そして握手を交わした。

第三十七章

お仕事（後書き）

このお話は何回か書き直しました。
たぶんこれが最善です。

いや違うかも。

でもまあこれからもよろしく願います。

「AK-47だ。新しいってわけじゃないが信頼はできる得物だな。んで持ち方はこう」

口で言っても理解しにくいと思うので、自ら持って実演。

弾を無尽蔵に創造する魔法のマガジンは抜いてあるので、引き金を引いても問題は無い。

「むう、よくわからんな」

そう言いながらリーダーが手にしているのソビエト連邦が開発した1947年式カラシニコフ自動小銃だ。

もちろん俺謹製。

みんなの前で創るのはさすがに問題ありと感じたので一度宿を取って、そこで創ることにした。

持ち運びは台車を使って俺とリーダーで行った。

「これを使って数日間訓練すればあの犬ッコ口でも簡単に殺せる」

「おお、それはありがたい」

「ほら、お前らも持ってみてみる」

俺がそう促しても誰もこちらには寄ってこなかった。

なぜだ、なぜ誰も寄ってこない。

「皆どうした？」

リーダーも不審がって尋ねたが、みんな顔を合わせるだけだった。

そしてしばらく黙りを決め込んでいたが、とうとう声が上がった。

しかも噂の女性兵士だ。

「それでは代表してみんなの意見を言わせもらいます」

む、やっと出た意見だ。

慎重に扱わなければなるまい。

「どうぞ」

「それでは。 そんな物が何の役に立つというのですか？ 見たところ刃も付いていないようですし、 鈍器のようにも見えません」
「・・・まあそうでしょうね」

たしかに初めて見たらすぐには信用できないよな。

そういえば昔銃が日本に伝わった時もこんな対応だったそうなんだがな、 すぐに信用させてやる。

「確かにこれは指して使う物でも叩いて使う物ではありません。 ・

・ 無理矢理やればできなくもありますが、 ともかくこれは、 遠距離から対象を破壊するための物です」

「??? 何を言っているのかよくわかりませんが」

「まあ、 今から見せますから」

ふっふっふ。 驚くなかれ。

「それじゃあいくぞ」

まず両手を合わせて一拍。

俺の動向に注目して静まりかえった広場にパチンと乾いた音が響く。

そして次の瞬間には、 前方二十メートルほどに土人形が創造された。

「なっ！」

驚く一同。

でも驚いて欲しかったのはここじゃないんだけど。

おそらく創造魔法が使えるということがばれたかもしれないが、 この際だ。

「どうして土人形が？」

「まさかこいつが？」

静かでいい雰囲気だったのに一気に騒がしくなってしまった。 黙らせるか。

「お前ら静かにしろ」

静かにそう促して、 A K - 4 7 の 7 ・ 6 2 x 3 9 弾を上空に向けて、 放つ。

三十発。 マガジン一本分だ（普通のなら）。

まあ、みんなはただの音を響かせるだけの物と認識しているだろうが、それでも十分だ。

そして一瞬で広場はまた静まり、 視線は俺に注がれた。

「い、 今何をし」

「黙れ」

言い終える前にもう十発。

今度は完全に静まりかえった。

「よし。 説明は途中途中挟んです。 そしてそのお前、 剣を抜け」

「わ、 私ですか」

そう言いながらも指名された兵士は渋々剣を抜く。

しかし失敗したな。 つい勢いで女性兵士を指名してしまった。

それもきつい口調で。

まあ・・・仕方無い、 訓練中だからな。

「それではその抜いた剣で、 あの土人形に攻撃を加えろ」

「わ、 わかりました」

女性は自前のグラディウス（推測）を携えて土人形に歩み寄ろうとするが、

「ちよつと待て。 そこから一步も動かずだ」

「一步も動かずですか？ お言葉ですがそれは無理です」

女性が持つグラディウスの長さはほんの少し長めの80センチほどだが、 当然届くはずもない。

「まあそうだろうな。 俺から言わせれば半端な大きさの剣は役立たずだ。 刃物の長さは秘匿して持ち運べる長さの15センチが限界だ」

つまり俺の持つてるナイフがぴったりだな。

親父もそう思ったからこれを俺にくれたんだろう。

「結構な言い方ですが、 ではそのえーけーとか言うのならできるのですか？」

女性がグレイデウスでAK-47を指しながら挑発的に言った。
やれやれ、さっき説明したのにな。

「もちろんです。これはそのための武器ですから」
言いながら、構える。

そして宣言。

「カウント3。 3 , 2 , 1 , ファイヤー！」

第三十八章

訓練（後書き）

もう四十部になってしまいました。

その割にはあまり話が進んでないような気がします。

もう少し一話掲載分を長くした方がいいでしょうか？

そして作中に出てくるAK-47ですがAKMとどちらにするか迷いました。

でもやっぱり有名所を選びました。

興味のある人は調べてみてください。

第三十九章

カルチャーショック

「おい7番。 さっきも言ったが構え方が違う。 ストックを肩にくっつけて構えるんだ。 そうしないと衝撃を殺せない。 それから10番。 左手で抑えるのはマガジンじゃなくてハンドガードだ」俺がそう注意すると、 はいっ！ と威勢のいい返事が返ってきた。

現在AK-47を使つての訓練の最中だ。皆ぎこちない格好で小銃を支えている。

最初は疑心暗鬼のみなだったが、 AKで土人形を射撃した後は流れるように話がスムーズに行うことができた。銃の威力をわかつてくれたからだと思う。

「よし。 それじゃあ実射の訓練に入る。 各々セーフティを外せ」

そう言うとはお互いの顔を伺い合いながらセーフティを外した。銃を構成する部品の説明は最初に済ませてある。

「それじゃあ二度目だが俺が手本を示す。 参考にするように」言ってからすぐにAKを構えた。

サイトを少し見た方が良かったのかもしれないが、 この世界に来てからすでにアサルトライフルは数発撃っていたのですでに射撃の感覚は掴んでいる。

それに距離も近いし。

「カウント3。 3 , 2 , 1 , ファイヤー！」

最初とまったく同じ掛け声をかけて引き金を引く。そして轟音を伴いながら土人形は崩れ落ちた。

「こんなもんだ。 それじゃあ次はみんなの番だ。 まず一番からさっきから言っているこの番号は、 みんなの名前を覚えるのがきつかったので一時的につけた呼び名だ。

「はいサイトで狙って、 いけ！」

俺がそう促すと一番は怖々と引き金を引いた。
撃ち出したのは一発。

土人形には当たらなかった。

なので撃ったという気がしなかったようだ。

首を傾げて不思議そうな顔をしている。

まあ銃の概念を知らないのだから仕方がない。

「リコイルショックが強いから何とかして殺すように。 それじゃあ二番」

「は、 はい」

指名されたのは少し気弱そうな、 俺と同年くらいの少年。

しかし体格が俺よりも小さい。

持っているAKがとても大きく見える。

「よし、 それじゃあ撃ってみる」

「わかりました」

そう言ってAKを構え、 撃った。

ドガガガガ！ と轟音を立てながら7・62×39弾が正面ではなく、 真上へ。

その瞬間、 ローラにPPKを持たせたときのことを思い出した。
リコイルショックを抑えきれなくなつての、 照準の大きなずれ。
しかし今回はそんなものでは無かった。

真上からだんだんと照準がこちらへ。

弾が有限ならばこちらに照準が反対側にいる俺たちに合わさる前に弾切れになつたかもしれないが、 今回は別だった。

俺が弾数無限の魔法をかけているからだ。

故に引き金に指を掛けている限り、 弾は射出され続ける。

「さ、 さすがに冗談じゃねえ！」

言ってからすぐに両手を合わせる。

すると瞬間的に二番の持っていたAKが音を立てずに消滅した。
それと同時に二番は尻餅をついた。

「え、 あれ？」

二番は自分の手元をまじまじと見つめている。

「お前なあ。さすがにそこまでは無いだろ」

しかし、お前だけ剣で戦ってもらう、なんてことは言えないので、仕方がない。

新しい銃を創ってやるか。

ここで少し考える。

小さな奴でも扱える高火力の銃。

ならサブマシンガン。

P90か？

いや、あれは初心者が使うのには癖がある、と思う。

本にもそう書いてあったし、親父もそんなことを言ってた気がする。

グリップの握り方は、どうにかなるかもしれないが、マガジンの取り替えが面倒だか、ら？

「あつ、そうだ。ここじゃ魔法があるんだった」

そうだよ、マガジンの取り替えの必要は無いじゃないか。なら、問題無いんじゃないか？

やることは決まったので、再び両手を合わせる。

パチンと乾いた音がしてから俺の手にはP90が創られていた。みんな驚いているが、最初にAKを使った時ほどではない。

「二番はこれを使え。銃の名称はP90。集弾性には優れてるし反動もあまりない。これを使ってもう一度やってみろ」

「は、はい」

一度失敗したのを恐れているからなのか、少し肩を震わせている。

しかし少しして覚悟を決めたのか、P90をしっかりと構えた。そしてこががが！と音を立てて土人形が崩れ去った。

周りから、おおー、と歓声上がる。

「す、すごい」

「凄いだろう。それと言い忘れてたが、銃を人に向けて撃つと、

銃が爆発する。これはすべての銃に共通していることだ。 気をつけるよ」

もちろんそんなことは嘘だった。

でもこう言っておけば人に向けて撃たないと思う。

安全だしな。

「それじゃあこれで例はたくさん見られただろうから、これから各自で訓練してくれ。俺もきちんと監視してるから安心して訓練して良いぞ」

と言うのは建前でこのまま一人ずつ訓練をしているときりがないと思ったからだ。

それこそ日が沈んでしまう。

「リーダーリーダー。リーダーは訓練しなくて良いのか？」

俺がそう言うのもリーダーは銃で訓練をしないで、兵士達がしつかりしているか注視している。

「うむ。さつき少し撃って感覚は掴んだからな。私は大丈夫だ」

「ほうほう。やっぱりリーダーは戦闘についてはセンスがあるな」

「そうかもしれない」

そう言ってリーダーはAKを構えて撃つまねをした。

「それとナイフを持っているのもさすがだな」

「うむ。お前がナイフを使っているのを見てな。 自分一人で訓

練なんかをしてナイフの使い方を学んだんだ」

「感心感心」

でもナイフを使つてるとAKが使えないんだな。

ならあれは必要だろう。

「ほら。リーダーに村長就任祝いだ」

そう言つて目を閉じ、手を前に突き出す。

そして十秒もしないうちに、それはできあがっていた。

「それは、銃か？」

「そうだ。デザートイーグルという選ばれし者にしか扱えない銃だ」

というのは半分嘘。

しっかりした体つきでないと安定して撃つことはできないからな。リーダーにやる。使い方を間違えるなよ。それとリーダーは知っているだろうが、銃は人に向けても撃つことができる」

「うむ、わかっている。だがシンの説明はあれで良かったと思うぞ」

「だよな」

俺とリーダーはお互いうんうんと頷き会う。

「リーダーそれ片手で使えそうか？」

「うーむ。撃ってみんとわからんな」

そう言ってリーダーはデザートイーグルを携えて仮射撃場みたいな所へ歩を進める。

「シン。頼む」

「おう」

リーダーがそう言うので両手をパンと叩く。

するとリーダーの立っている所の前方で土人形が創造される。

「撃っちゃっていいぞ」

「・・・・・・はっ！」

リーダーはとりあえず両手でデザートイーグルを支えている。

やはり慎重でいいことだ。

自分の力を過信していないからな。

俺がリーダーをそう評していると、リーダーはバンバンと2発立て続けに撃った。

使用しているのは、50AE弾で拳銃の中で最強の威力を誇る。

それにAKのしょう弾薬と同じくらいの貫通力を持っている。

それはそうとリーダーの射撃の様子だが、非常に安定していた。2発とも土人形の頭にヒットしていた。

これなら大丈夫かもしれない。

「それじゃあ片手で撃ってみてくれ」

「わかった」

リーダーは片手で狙いを定める。

そしてすぐに撃ち放った。

バンバンツと轟音をたて、50AE弾が1発放たれる。
放たれた、50AE弾は土人形の胴体にヒットした。

「凄いなリーダー。俺じゃできないかも
すぐにはな。」

でも少し訓練して、衝撃を和らげ照準のずれを計算すればできるかもしれない。

「一応頭を狙ったのだが。胴体に当たってしまった」

「そうか。でも問題無いんじゃないか？」

「そうだな。これならナイフと共に使うことができる」

「ナイフと銃の組み合わせは狭いところなんかで使うのが良いな。

森の中なんてそのスタイルが良いと思う。動きの素早い魔物にいきなり懷に飛び込まれてもナイフで対応できるしな。まあでも

待ち伏せならAKで良いと思う」

「・・・それでは他の兵士にもこのタイプの銃を配布した方がいいのでは？」

「・・・そうかもな」

たしかにそうだ。忘れてたな。

それにしても、

「リーダー、なかなか強欲だな」

「こんなことを頼めるのはシンしかないのだ。ここの兵士達の安全性が少しでも上がれば良いと思ってしまうのだ」

「・・・その意気やよし。ついでに創つといてやる。でも今日はAKの訓練だけで」

「む。今日はこの後すぐに魔物の討伐に向かう予定だったのだが」

「・・・そうか。なら、俺が一人で何とかしておくから、こ

こはリーダーが仕切つといてくれ」

「大丈夫なのか？」

「ああ」

首をポキッと鳴らして固定の意を表す。

「それでは、頼む」

「ああ任せろ。それと暗くなったら銃を使った訓練はしないように。危ないからな。ナイフを使った白兵戦の訓練ならOKだ。

それと銃はまとめて保存しておくこと。各自で持ち帰らせるな。

銃は15丁創ったから15丁しっかり回収しろよ。それから」

「おいおいシン。お前は随分と世話焼きだな。まあ何とかするから大丈夫だ」

「そうか、そうだな。それじゃあ行ってくる」

確かに色々気にしすぎたな。

リーダーに任せとけばたぶん大丈夫だろう。

「んじゃ。また明日。時間は午前八時集合で」

「わかった。皆にも伝えておく」

その会話を最後に、今日はリーダー達と別れることとなった。

さて、それじゃあ俺も訓練を始めるか。

第三十九章

カルチャーショック（後書き）

はい、まず謝ります。すみませんでした。

自分もここまで投稿に手こずるとは思っていませんでした。

そのくせ内容が薄っぺらい気がします（いや、気がするではないか？）

それではこちらへんで失礼させて頂きます。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2097p/>

異端児の退屈な日々

2011年6月18日02時10分発行